

兵庫県伊丹市

有岡城跡

発掘調査報告書Ⅷ



1992.3

伊丹市教育委員会

兵庫県伊丹市

有岡城跡

発掘調査報告書Ⅷ

1992.3

伊丹市教育委員会

序

伊丹の地は、猪名野の中央に位置し、遙か遠く原始時代から今日に至るまで、悠久の歴史を有する地域として広く知られている所です。さらに、猪名川の清らかな流れを望む平地や伊丹台地のあちらこちらには、先人の生活の足跡を偲ばせる数多くの文化財が存在しています。

迫り来る2001年を前にした今日、世界の中の日本として国を挙げて未来に向かって大きく飛躍する人間中心の施策の必要性が強調され、企画、実施されつつあります。私たちの伊丹市においても「生命の輝きをたたえ青春の歓びがこだまする都市」いわゆる、劇場都市をめざして、さまざまな事業が計画され、創造、建設の槌音が響いております。しかし、私たちが未来に向かって大きく前進していくためには、過去から現在に立ち至った道程を見究めることが重要です。そしてそのことが「個性あるこの歴史と文化のまち」に誇りと愛着がもてるように、「明るく爽やかに暮らせる快適・便利で、魅力ある都市づくり」を標榜している基本方針を実現する前提であり、また文化財保護事業の原点、基本理念でもあります。

伊丹市域の中核となっている市街地に所在する有岡城跡と伊丹郷町遺跡は、伊丹市発展の基礎となった私たちにとってかけがえのない貴重な文化遺産であり、埋蔵されているこれら多くの遺跡を調査し、記録・保存していくことは、現代に生きる私たちの使命でもあります。

昭和61年10月から約7ヵ月にわたる現地調査と1ヵ年余の整理作業を実施し、ここに、その調査成果を報告書として刊行することになりました。今回の調査にあたって全面的なご協力をいただきました大阪経済法科大学村川行弘教授、大手前女子大学藤井直正教授に衷心より敬意と感謝を申し上げ、発刊のことばといたします。

平成4年3月

兵庫県伊丹市教育委員会

教育長 乾 一 雄

例 言

- (1) 本書は、兵庫県伊丹市伊丹1丁目を中心とする有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査報告書である。
- (2) 本書は、昭和61～昭和62年にかけて実施した第34次調査、第37次調査、第42次調査、第44次調査の成果をまとめたものである。
- (3) 第34次調査・第37次調査・第42次調査は、国鉄伊丹駅前市街地再開発事業に伴う発掘調査のうち、伊丹市教育委員会が担当したものである。第44次調査は、市立美術館庭園工事に伴い実施した。
- (4) 発掘調査は、第34次調査・第37次調査・第42次調査を市教委の直営事業として実施し、第44次調査を村川行弘(大阪経済法科大学教授)を団長とする宮ノ前地区埋蔵文化財調査団に委託した。
- (5) 第34次調査・第37次調査・第42次調査は小長谷正治・中井秀樹(現在三田市教育委員会)が担当し、第44次調査は村川行弘団長の指揮のもとに、小長谷・中井があたった。また村下佳子、角田あゆみがこれを補佐した。
- (6) 発掘調査期間は次のとおりである。

第34次調査	昭和61年10月 1日～10月31日
第37次調査	昭和61年10月 8日～11月 8日
第42次調査	昭和62年 1月15日～ 1月18日
第44次調査	昭和62年 3月23日～ 4月30日
- (7) 整理作業は、平成元年4月～平成2年3月にかけて、市立稲野小学校内にある埋蔵文化財整理室において実施した。
- (8) 本文は、第1章第1節を細川佳子、第3章第2節を村川行弘が執筆し、その他を小長谷正治が執筆した。
- (9) 整理作業では、沖高広子・三輪隆子・伊藤秀樹の協力を得た。
- (10) 発掘調査及び本書作成にあたっては、次の方々の御指導を受けた。記して感謝の意を表わしたい。
藤井直正(大手前女子大学) 川口宏海(大手前文化栄養学院) 前川要(富山大学) 仲野泰弘(愛知県陶磁資料館)
- (11) 出土遺物は市教委で保管している。

凡 例

- (1) 各調査地点の位置図は、昭和55年伊丹市計画全図(1/2500)を用いているため、国鉄駅前市街地再開発事業地区内については現況と著しく異なっている。
- (2) 第1章第1節所収の文化改正伊丹之図は、『伊丹古絵図集成』(本編)伊丹資料叢書6の解説図を転載している。
- (3) 遺物の実測図は1/3を原則としている。
- (4) 各調査成果には、紙面の関係で詳細な遺構実測図を掲載することができなかった。記録類はすべて市教育委員会に保管しているので、利用していただきたい。

目 次

第 1 章 調査概要……………1	第 3 節 第42次調査…………… 31
第 1 節 遺跡の概要……………1	第 4 節 第44次調査…………… 39
第 2 節 調査の概要……………3	第 3 章 各 説…………… 61
第 2 章 調査成果……………5	第 1 節 有岡城検出の堀について…… 61
第 1 節 第34次調査……………5	第 2 節 調査地域の歴史…………… 65
第 2 節 第37次調査…………… 27	第 4 章 結 語…………… 67

挿図目次

図 1 遺跡の位置図	1	図23 第42次調査出土遺物実測図(1)	34
図 2 文化改正伊丹之図	2	図24 〃 (2)	35
図 3 調査箇所位置図	3	図25 〃 (3)	36
図 4 調査区設定図	5	図26 調査区設定図	39
図 5 第34次・第37次調査全体図	7	図27 酒蔵建物配置図	40
図 6 第34次調査土層図	9	図28 第44次調査全体図	41
図 7 第34次調査出土遺物実測図(1)	11	図29 大蔵跡礎石配置図	42
図 8 〃 (2)	12	図30 第44次調査出土遺物実測図(1)	45
図 9 〃 (3)	13	図31 〃 (2)	46
図10 〃 (4)	14	図32 〃 (3)	47
図11 〃 (5)	15	図33 〃 (4)	48
図12 〃 (6)	16	図34 〃 (5)	49
図13 〃 (7)	17	図35 〃 (6)	50
図14 〃 (8)	18	図36 〃 (7)	51
図15 〃 (9)	19	図37 〃 (8)	52
図16 〃 (10)	20	図38 〃 (9)	53
図17 第37次調査全体図	27	図39 〃 (10)	54
図18 堀跡土層断面図	28	図40 〃 (11)	55
図19 第37次調査出土遺物実測図	29	図41 有岡城主郭西側の堀配置図	61
図20 調査区設定図	31		
図21 第42次調査全体図	32		
図22 土層断面図・エレベーション図	32		

写真図版目次

PL, 1	第34次調査	a遠景, b全景, c遺構	PL, 22	〃	(13)
PL, 2	〃	a~c遺構	PL, 23	第37次調査出土遺物(1)	
PL, 3	〃	a~c遺構	PL, 24	〃	(2)
PL, 4	第37次調査	a堀跡全景, b堀土層断面		〃	(3)
PL, 5	〃	a井戸跡, b井戸跡内部	PL, 25	第42次調査出土遺物(1)	
PL, 6	第42次調査	a・b全景, c・d堀内部	PL, 26	〃	(2)
PL, 7	第44次調査	a遠景, b全景	PL, 27	〃	(3)
PL, 8	〃	a~c遺構	PL, 28	〃	(4)
PL, 9	〃	a~c遺構		第44次調査出土遺物(1)	
PL, 10	第34次調査出土遺物(1)		PL, 29	〃	(2)
PL, 11	〃	(2)	PL, 30	〃	(3)
PL, 12	〃	(3)	PL, 31	〃	(4)
PL, 13	〃	(4)	PL, 32	〃	(5)
PL, 14	〃	(5)	PL, 33	〃	(6)
PL, 15	〃	(6)	PL, 34	〃	(7)
PL, 16	〃	(7)	PL, 35	〃	(8)
PL, 17	〃	(8)	PL, 36	〃	(9)
PL, 18	〃	(9)	PL, 37	〃	(10)
PL, 19	〃	(10)	PL, 38	〃	(11)
PL, 20	〃	(11)	PL, 39	〃	(12)
PL, 21	〃	(12)	PL, 40	〃	(13)

表目次

表 1	第34次調査出土遺物観察表(1)	21	表 8	〃	(2)	37	
表 2	〃	(2)	22	表 9	〃	(3)	38
表 3	〃	(3)	23	表10	第44次調査出土遺物観察表(1)	56	
表 4	〃	(4)	24	表11	〃	(2)	57
表 5	〃	(5)	25	表12	〃	(3)	58
表 6	第37次調査出土遺物観察表	30	表13	〃	(4)	59	
表 7	第42次調査出土遺物観察表(1)	36	表14	〃	(5)	60	

第1章 調査概要

第1節 遺跡の概要

遺跡の立地 伊丹市は兵庫県の東南部に位置し、三方を六甲山地、長尾山地、千里丘陵に囲まれた西摂平野の奥まったところにある。また南に開向し、大阪湾まで約10kmの距離である。中央部には長尾山地に端を発する伊丹台地(洪積台地)が南に向かって延び、武庫川と猪名川に挟まれている。有岡城跡は伊丹台地の東縁にあたり、標高は15~20mである。東側の猪名川との比高差は5~10mの崖をなし、西側、南側も数mの段差がある。規模は南北1.6km、東西0.8kmの範囲である。

有岡城跡は、縄文・弥生時代のものも出土している。JR伊丹駅地区周辺の本丸地区の調査(1次・5次)では、古墳時代の須恵器・土師器・埴輪が出土し、古墳の存在が想定できる。また、上藤塚(20次)、鶴塚(73次)も古墳の痕跡がある。台地縁辺部の北東隅の調査(17次)では、縄文時代中期から晩期の土器が土坑より出土した。同地点から、平安時代後期の土壌墓が検出され、土師器が出土した。44次周辺部の調査(65次・66次)では、弥生時代中期の土器が土坑や包含層より出土した。それより西側の宮ノ前地区(51次・54次)では、古墳時代から奈良時代の土坑や柱穴から須恵器・土師器が出土した。

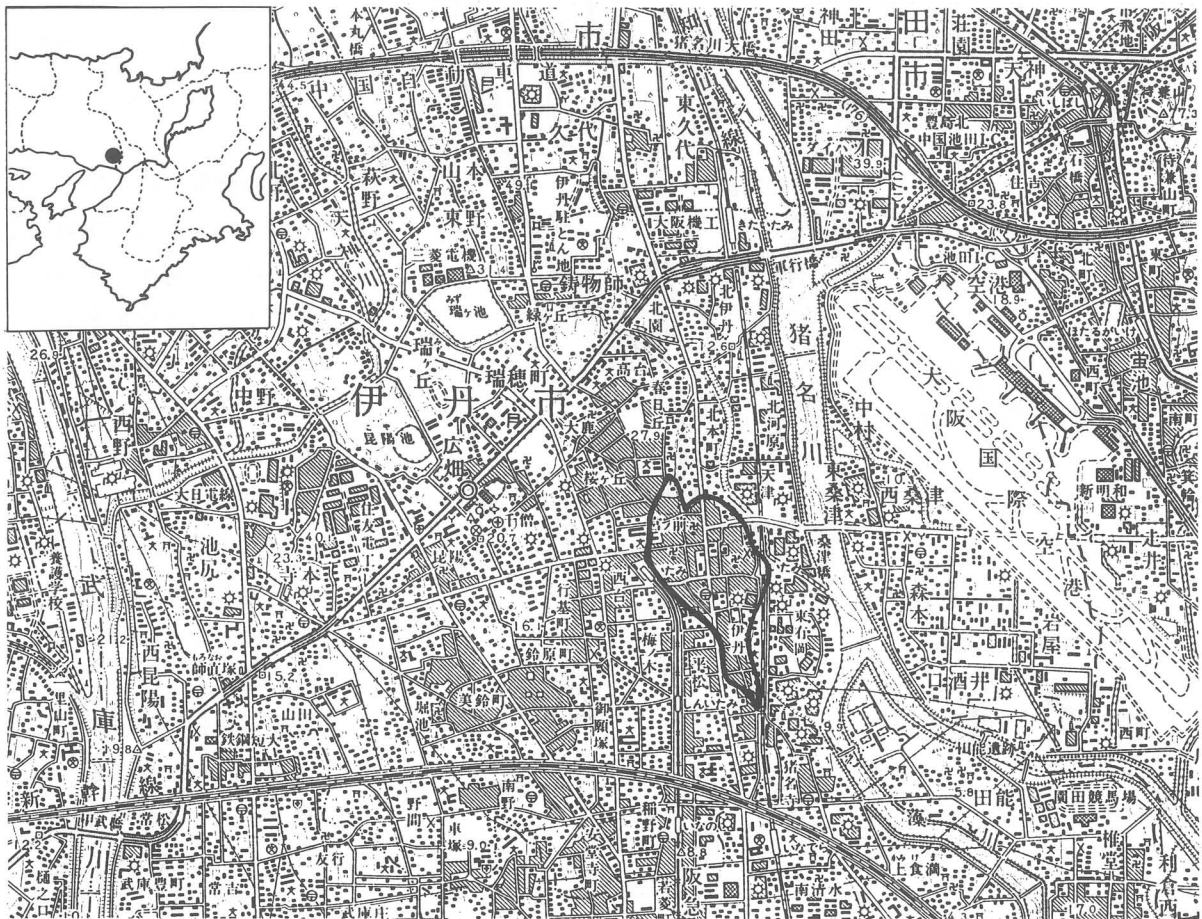


図1 遺跡の位置図(1/5000「大阪西北部」)

伊丹城 伊丹城は土豪伊丹氏の居館として、文和2年(1353)の「森本基長軍忠状」に初見される。応仁の乱後は度々敵の攻撃を受ける。永禄11年(1568)織田信長が足利義昭を奉じて上洛すると、伊丹親興は信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正とともに摂津国の三守護に任じられた。しかし、信長が義昭を追放すると、和田氏・池田氏・伊丹氏は荒木村重によって滅ぼされた。

有岡城 天正2年(1574)村重は伊丹城に入城し、信長の命で「有岡城」と改名した。有岡城は、城下町をも堀と土塁の防御施設で取り囲む惣構構造の城である。要所を守ったのが、岸の砦、上臈塚砦、鶴塚砦である。本丸から堀を隔てた西側に侍町、さらに西側に町屋が配置されている。天正6年(1578)村重は信長に背き、大軍に包囲され、1年余りの攻防の末、落城する。村重の後、池田之助が領有するが、天正11年(1583)廃城となる。

伊丹郷町 江戸時代、城下町より発展し、伊丹村を中心に15ヶ村が一続きになって伊丹郷町を形成した。初めは幕府の直轄領であったが、寛文元年(1661)に15ヶ村のうち10ヶ村が、近衛家領となった。

伊丹の酒造業は、享保15年～宝暦5年(1730～55)が第1のピークである。その後、灘の酒におされたが、近衛家の保護もあり、享和3年～文政2年(1803～19)第2のピークをむかえる。こうして、酒造業の発展に伴って、伊丹郷町は繁栄していった。

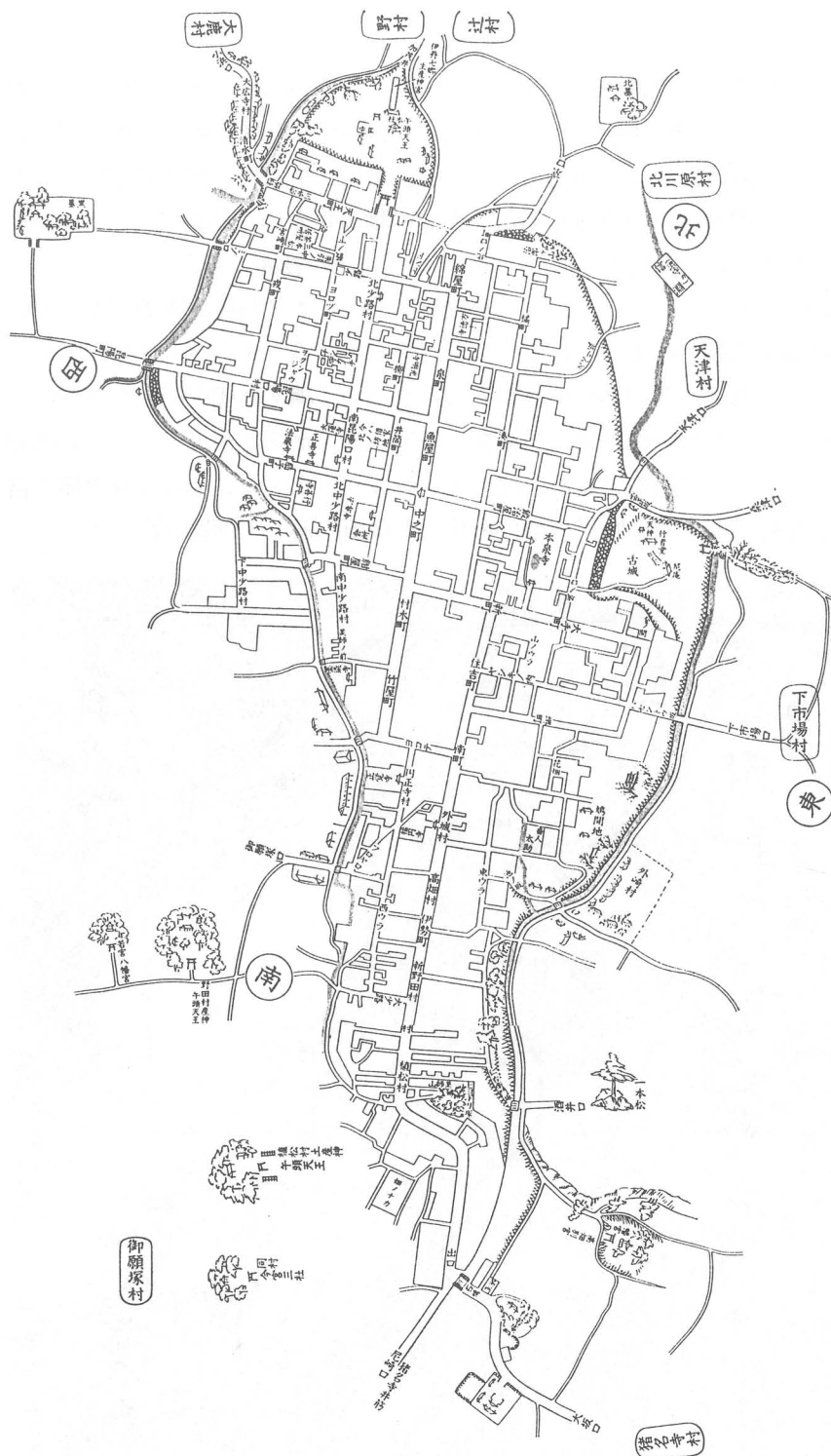


図2 文化改正伊丹之図(伊丹市立博物館蔵)

第2節 調査の概要

調査に至るまでの経緯

国鉄駅前市街地再開発事業地区内の発掘調査は、昭和61年2月～6月にかけて実施した第23次調査を初めとし、大手前女子大学藤井直正教授を調査担当とする有岡城跡調査委員会と市教育委員会が分担して、昭和62年1月までの間に併せて12次に及ぶ発掘調査を行った。今回報告する第34次調査・

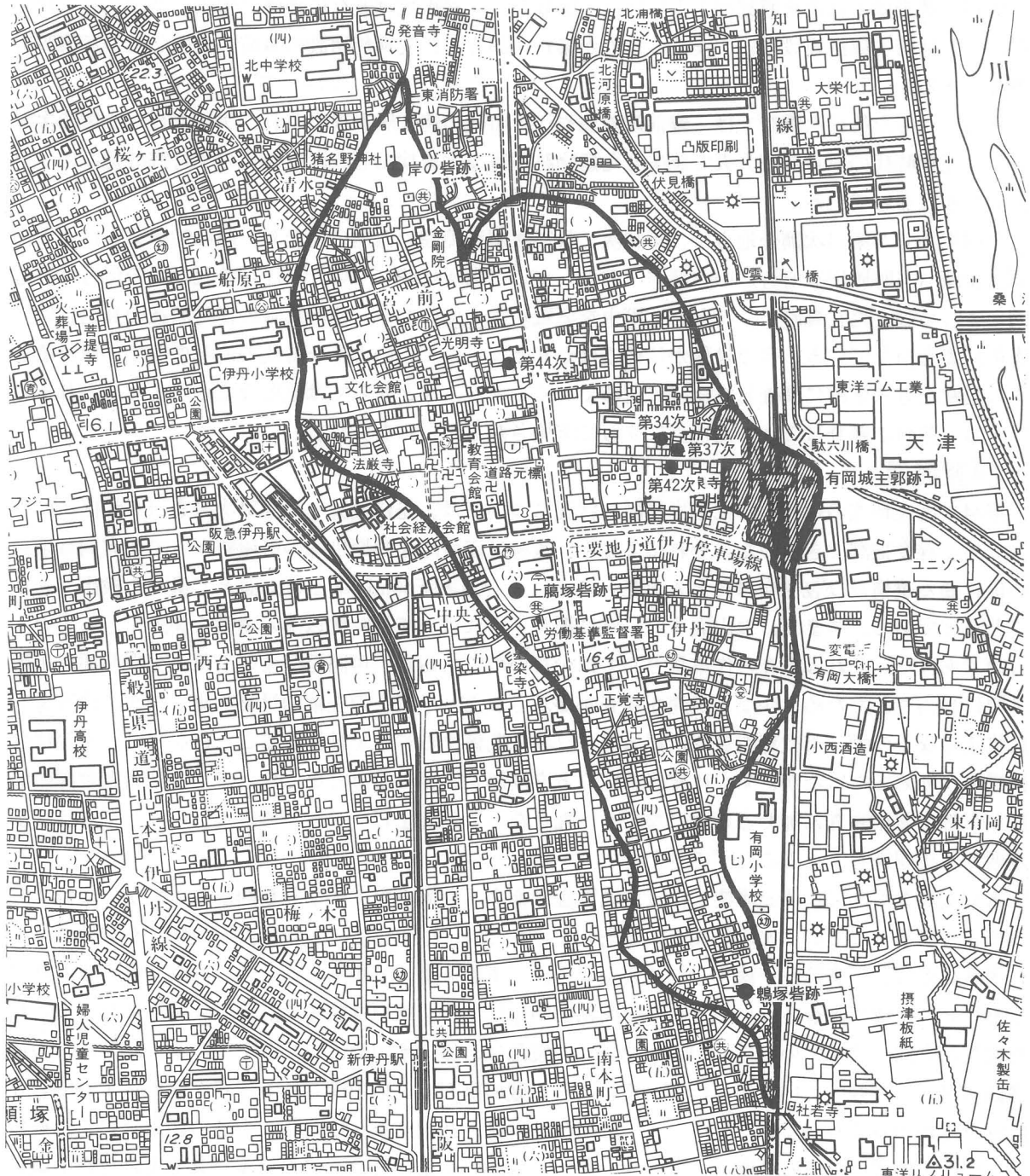


図3 調査箇所位置図(1/10000)

第1章 調査概要

第37次第調査・第42次調査は、この再開発事業に伴って実施したものである。

再開発事業地の範囲は、現在JR伊丹駅となっている有岡城主郭（本丸など城の主要部）の西側にあたり、その面約は約1.6haに及んでいた。城の大手口となるこの一帯は、文献や古絵図などから家臣団屋敷の営まれた侍町に相当すると考えられ、研究者の間では、有岡城跡解明のための重要な場所であるという認識があった。そして、最初に行われた第23次調査において、侍町に中小の堀が存在することが明らかにされて、さらに関心が高まった。その後の発掘調査が進むにつれて、次第に侍町の構造解明の糸口が見えてきたのである。

第44次調査は市立美術館庭園工事に伴って実施した。美術館は既存の柿衛文庫館に増設されて建てられた。柿衛文庫館建設時に、実施したのが第12次調査で、美術館増設の事前に実施したのが第29次調査である。

最初に行った第12次調査では、備前焼の甕や江戸時代の焼土層が検出され、次いで行った第29次調査では元禄時代の伊丹郷町大火で焼失した建物跡や竈などを検出し、江戸時代の伊丹郷町営みの一辺が明らかになっている。

今回実施した第44次調査地点は、第12次・第29次調査範囲の西側にあたり、昭和59年までは大手柄酒造北蔵（当時岡田家所有）の大蔵（千石蔵）がこの場所に残っていた。江戸時代以降の伊丹は酒造業によって栄えた在郷町で、ほとんど町中を酒蔵が占めていたが、明治以降の伊丹酒造の衰退に伴い次第に姿を消していき、今では僅かに残るばかりとなった。このような時代の流れの中で、伊丹酒造業の足跡を考古学的に調査して記録に留めておくことも、今となっては重要なことだと考えられるのである。第44次調査はこうした視点に立って実施されることになった。

調査経過

第34次調査地点の遺跡の時代や堆積層の状況については、先に実施した第31次調査（C地区）によってある程度推測できていた。それによると、遺跡は江戸時代中期以降の町屋跡が主で、有岡城頃の中世に遡る遺構及び包含層はほとんど無いこと、また地表下50mにある地山面上で遺跡を検出できることなどである。つまり、地山面まで一気に掘り下げれば、江戸時代以前の遺構を調査できるというものであった。これは調査の作業量としては少ないのであるが、再開発事業の工程上発掘期間が1箇月間に制約されたため、かなり迅速な調査が要求された。早速、調査補助員を募集したが、思うように集まらないので、市教育委員会市民スポーツ課に關係する学生を動員することになった。彼等は発掘調査が初めてだったが、すぐに記録の採り方を理解し大いに助けとなった。また、社会教育課の職員が交替で発掘調査に加わることになり、一丸となって調査を行うことができた。こうして、ほぼ予定通り発掘調査を了えることができた。

第37次調査も同じ再開発事業に伴う発掘調査である。期間の上でかなり制約があったが、これまでの調査で検出されている堀の延長上に該当しているため、堀の確認に主眼を置いて調査を進めた。第42次調査では、調査範囲が狭小なため安全を考えて重機を用いて掘削を行った。両調査とも基準点測量を行い、近隣で調査された堀との位置関係を明確にした。第44次調査地点は、大蔵解体時に掘られた攪乱が全面に及んでいることが判った。この攪乱は、ほぼ地山面にまで達しており、江戸時代の遺構面はほとんど残っていなかったが、幸いにも大蔵の礎石は、地中深くまで根石が埋め込まれており、位置を確かめることができた。また、一部では井戸跡・瓦溜りなどが残り、大蔵の建立年代を含め当該地点の歴史の変遷をある程度辿ることができた。遺跡の全景写真は、アドバルーンを用いた空中撮影を行い、それを基に全体図を作成した。

第2章 調査成果

第1節 第34次調査

はじめに

今回の調査は、駅前市街地再開発事業に伴う事前調査として実施したものである。調査範囲は東西15m～18m、南北46mあり、面積は867m²である。この内一部は第33次調査として、既に調査を終えていたが、遺構のつながりを見るために再検出している。その場所は調査区中央部分にあたり、全体図(図5)では遺構名を表記していない部分に該当する。

調査した場所は、有岡城主郭部の西方100mの地点に当たり、有岡城当時は侍屋敷地に推定されている所で、天正六年(1578年)から1年近くにわたる織田信長による有岡城攻めの折、焼き払われたと考えられている場所である。廃城となって漸く経た寛文九年(1669年)の伊丹郷町絵図には、まだこの場所に家屋らしきものは描かれておらず、現在のような町場に移っていくのはその後のことである。

現在の地名で伊丹1丁目と表示されるこの一帯は、以前は湊町と鍛冶屋町(殿町)と呼ばれていた。この両町は江戸時代初期の段階では存在せず、鍛冶屋町が寛文年間(1661～71年)に、遅れて湊町が元禄年間に成立している。

発掘調査の結果、当調査範囲には井戸3を除いて侍屋敷を想わせる遺構は検出されず、主に江戸中期以降の町屋跡が広がっていることが判った。以下、調査成果を遺構と遺物に分けて説明したい。

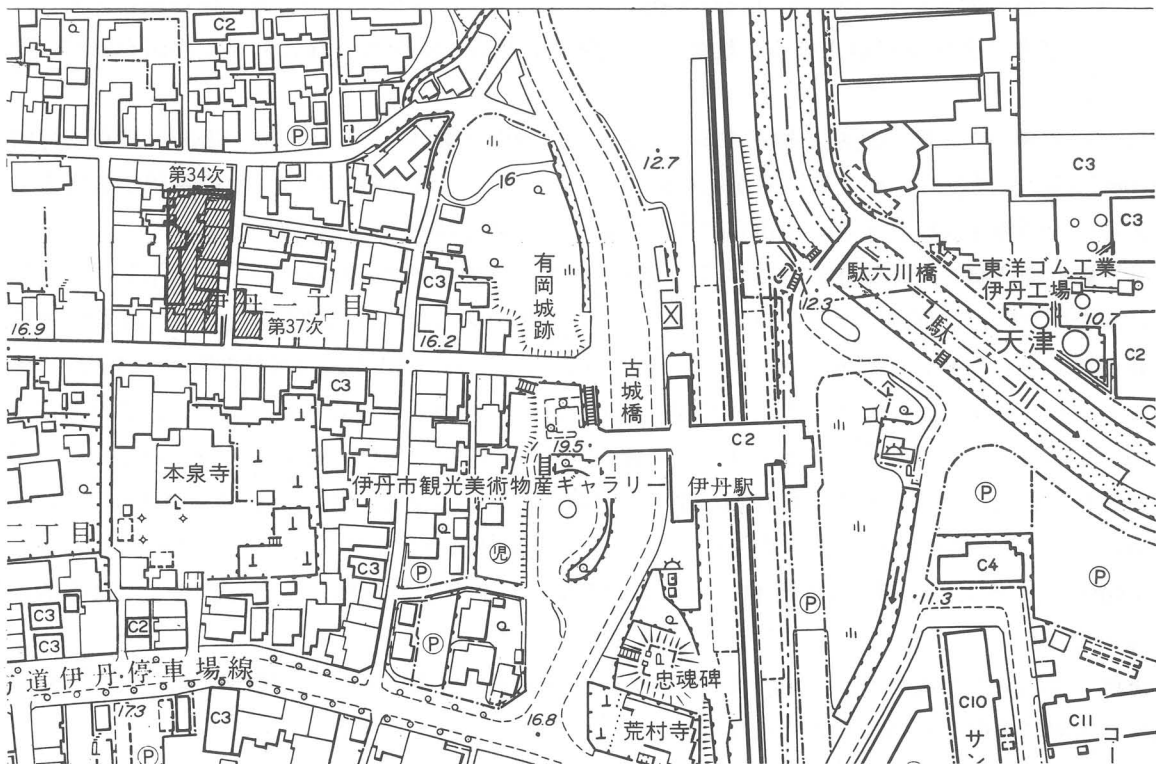


図4 調査区設定図(1/2500)

遺 構

検出した遺構には、土坑208基・埋桶20基・埋甕7基・井戸13基・溝2条・杭列2条・礎石列1条がある。この内の2条の溝(SD01・SD02)の底には杭の跡が並び、2条の杭列(杭列1・杭列2)と共に屋敷の区画境に設けられたものと考えられる。また、埋桶と埋甕は2基並んで検出される場合が多く、その場合は便槽せうと考えられる。

遺構を時期別にみていくと、有岡城が存在していた天正十一年(1583)までの遺構は井戸3だけで、それ以外の遺構は18世紀以降の所産である。

室町時代 この時期の明確な遺構は井戸3の他に検出されなかった。井戸3は、調査区の北側に位置する素掘りの井戸である。調査では、深さ4mの所で底に達しないため、それ以下の掘削を行わなかった。径は1.2mである。井戸の埋土は、深さ2.5m程の所から下は焼土と炭が混った土となり、遺物を多く含むようになった。茶臼(124・125)や五輪塔(122・123)等はこの当りから出土している。深さ4mの所から、次第に径が小さくなり始めるところをみると、底に近いと考えられる。

江戸時代以降 礎石が遺存していないため、建物の規模や配置については明らかにできないが、溝や垣根の跡とみられる杭列等から、地割や屋敷の規模を推定することができる。そして、屋敷の中に設けられた井戸や便所と考えられる埋桶・埋甕の配置によって、屋敷の構造についてもある程度推定できると思われる。

地割跡 地割や屋敷境を示す遺構には、溝(SD01・SD02)、杭列、柱列、礎石列がある。この内、東西方向に延びる遺構は、SD01・SD02、礎石列・杭列2、南北方向に延びるものは杭列1である。SD01は、調査区の北端部に位置し、浅い溝の底に多数の杭が打ち込まれている。SD02も同様に浅い溝の中に杭が並ぶ。SD02の範囲は、西壁から杭列1までの間となる。礎石列は、径30~50cmの掘方に20cm大の石を据えたもので、約1mの間隔で6基並んでいる。柱穴列は、調査区南側に位置し、径20cm程の掘方に径5cm柱痕が残る。杭列は、調査区中央部をSD01から柱穴列までの間を南北に延びている。

以上の遺構から当時の地割を推定すると、SD01とSD02の間が約18m(9間)、SD02と礎石列の間が約10m(5間)、礎石列と柱穴列の間が約10m(5間)となる。これらの区画は、その東限が杭列までと考えられ、西側を入口とすると、現在の西側の道からの奥行は約25m(12.5間)となる。

井戸跡と便所跡 全体図(図5)に井戸・埋桶・埋甕の位置をスクリーン tone で表示している。井戸は調査区北側の杭列沿いに、井戸2・4~6・11が集中するが、他は散在している。埋桶と埋甕は2基が並ぶ場合が多い。埋桶では、SK13と14、SK32と33、SK131と168、SK75と78、SK48と123がセットとなり、埋甕では、SK91と199、SK189と190がある。このように2基並ぶ場合は、これまでの調査例から便所跡と判断される。便所跡は、屋敷の一隅に集中する傾向が顕著で、ほぼ同じ場所で何度か造り替えられたとみられる。埋桶13は全く同じ場所で造り替えが行われており、径1mの古い桶を埋め戻した上に径55cmの桶を設置している。また、SK48は桶を埋めてその上に甕を据えている。SK48が示すように、江戸時代の便槽はすべて桶を用いており、甕を用いるようになるのは明治以降と考えられる。

土坑 検出した土坑の多くは、内部に不要の瓦や陶磁器、貝殻や魚骨などが棄てられたゴミ穴で、敷地の裏側に集中する傾向が認められる。

遺 物

本調査地点より出土した遺物は、概ね江戸時代の所産である。しかも江戸初期あるいは江戸前期の遺

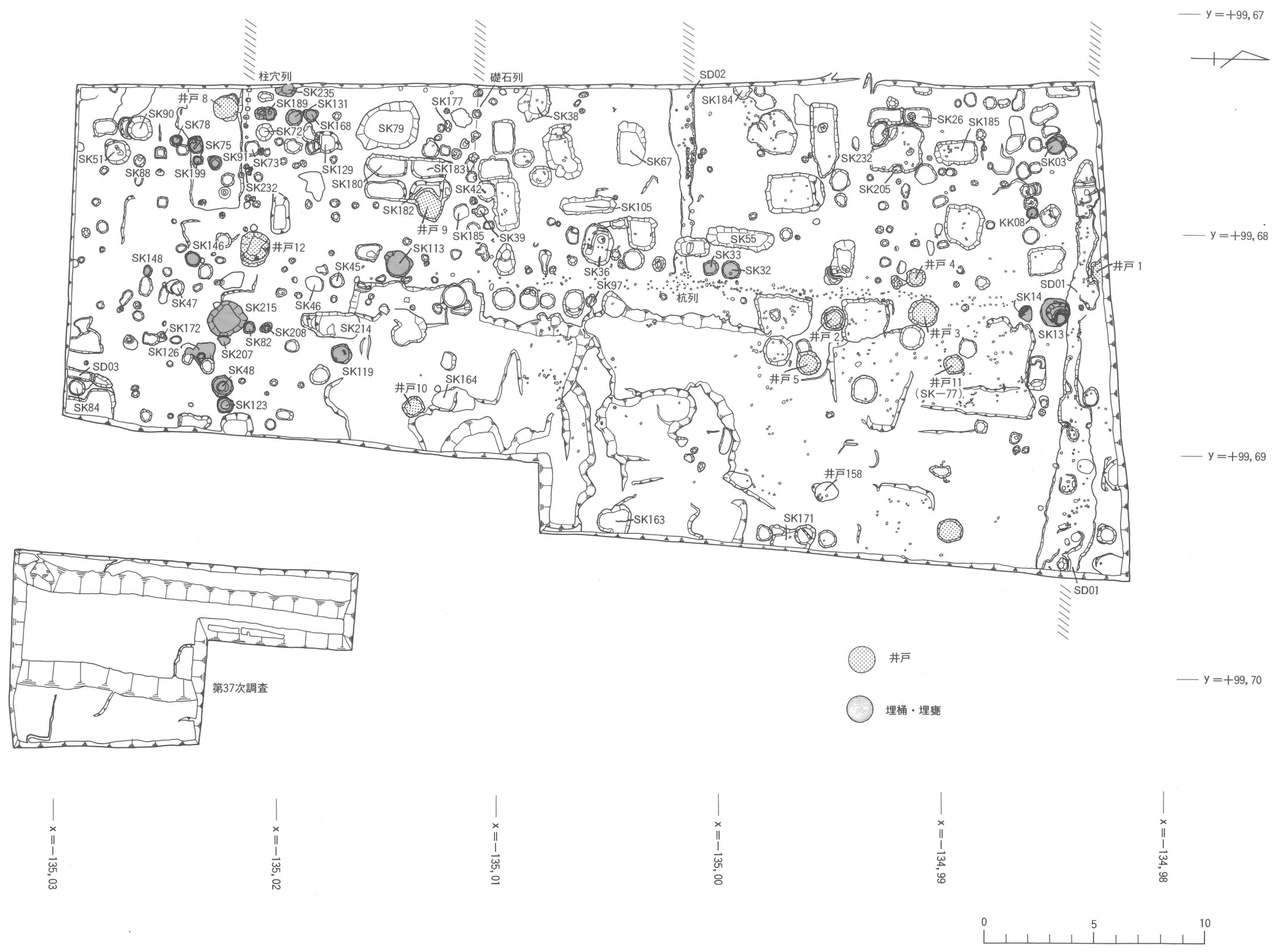


図5 第34次・第37次調査全体図

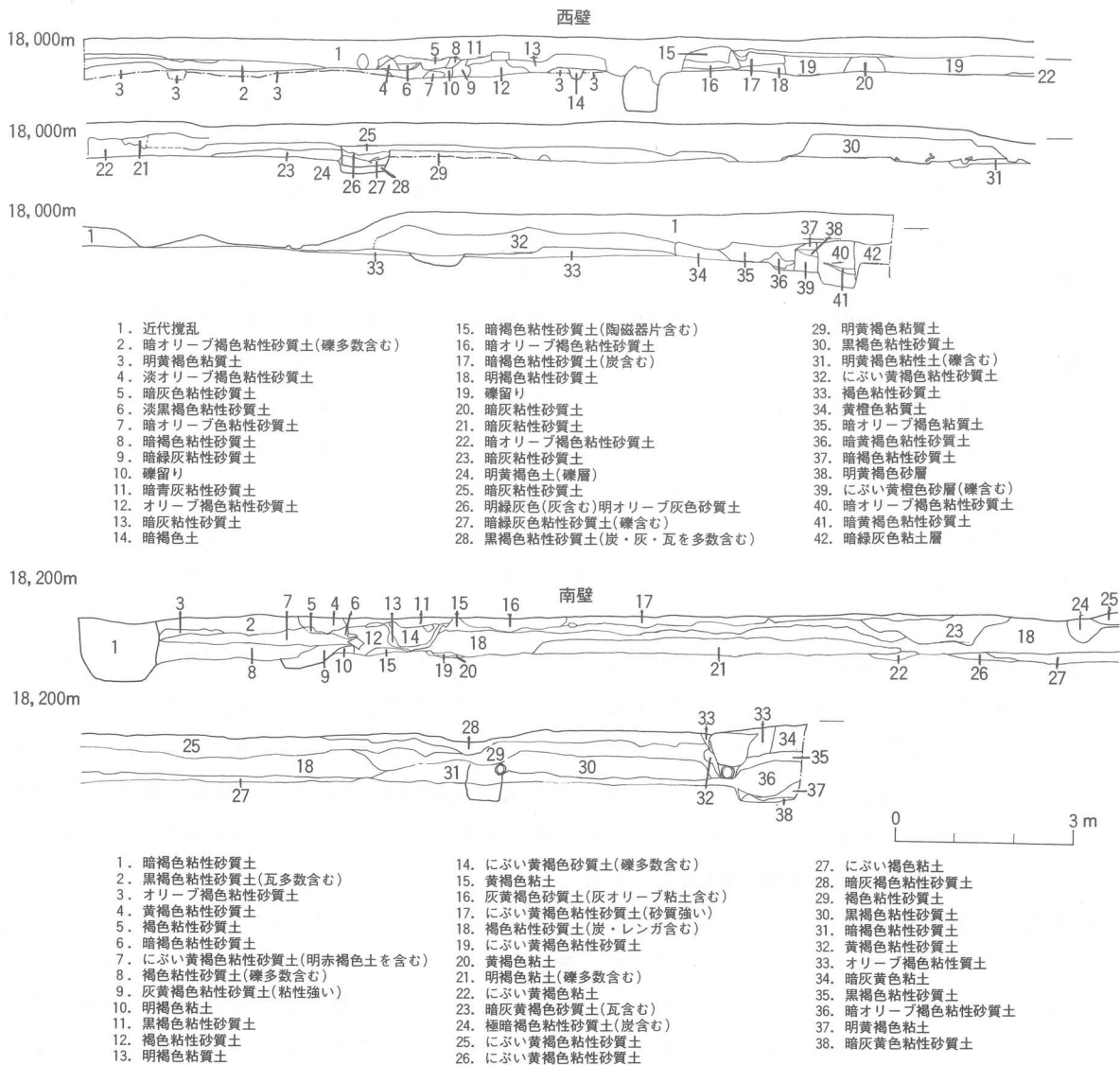


図6 第34次調査土層図

物はほとんどみられず、江戸後期が主体をなす。発掘を開始するにあたり最も期待していた有岡城期の遺物は井戸3に一括して出土したのみである。また、不思議なことにSK146から「東大寺大佛殿」銘の軒丸瓦(83)、SK214から鉄製の砲弾(106)が出土した。ともに明治以降の土坑より出土したもので、個人の収集品が廃棄されたものでしょうか。

遺物掲載の順位は、土坑→井戸の順とし、遺構番号の若い方から並べているので、遺物の掲載順位が遺物の新旧を表わしていない。以下、遺物の説明を加えておきたい。

室町時代(伊丹城・有岡城期) この時期の遺物は、井戸3においてのみ認められる。井戸3は深さ4mを超える規模であったが、崩壊の危険があるため途中で調査を中止した。よって、井戸3より出土した遺物(112~128)は、井戸底の出土ではなく、井戸廃絶時に埋め戻された埋土中に混入した遺物群である。埋土には多量の焼土と炭化材が混じり、遺物には火熱を受けたと見られるものを多数含んでいることから、天正七年(1579)の落城時あるいはその後、あまり時日を経ずして埋められたものと考えられる。

土師皿(113~117)は5点図示している。113~115は口縁部が緩やかに丸く立ち上がる。115のみ底

部が「ヘソ皿」状に窪む。116・117は底部を平坦に造り、口縁部は緩やかに外反する。117の口縁部には煤の付着が認められる。

陶器 (PL.22-130～134) 陶器は実測可能な遺物がなく写真を掲載した。備前焼の播鉢(PL.22-130)は、口縁部が肥大化する備前焼V期(間壁編年)の新しい段階に比定される。唐津焼の皿(PL.22-131)は、口縁部端に浅い溝が巡る溝縁皿である。PL.22-132～134は、外面に緑釉を掛けた器の一部と考えられる。134はその底部で、短い脚が造られている。3点は同一固体と考えられる。

金属製品 118は銅碗。底部は平坦で口縁部は直線的に立ち上がり、端部が折り返されている。薄く造られており、底部の厚みは1mmに満たない。120は刀装具の切羽。121は北宋の熙寧元宝である。

石製品 119・122・123は五輪塔の台座にあたる。これは一石五輪塔の下に敷く台座として作られたもので、上部に蓮弁を彫り出している。しかし、井戸内からは一石五輪塔本体が出土していないので、建物の礎石等に転用されたものが、他の廃棄物と共に井戸内に投棄されたものと考えられる。122は火熱を受け赤く変色し、123は煤が多く付着している。124と125は茶臼である。124は上臼で、側面には菱形に造り出された把手の取り付け部が2箇所設けられ、方形の孔が穿たれている。播り目は8区画8条になる。造りは極めて丁寧に仕上げられている。125は下臼。臼の周囲には大きな受け皿が造り出され、底部は外側に開いて安定感を増している。上面は、滑らかに仕上げられ、受け皿部の裏面及び脚部はノミ跡を残す粗い仕上げとなっている。播り目は上臼と同じ8区画8条である。上臼と下臼は材質は異なるものの、径は一致する。ともに井戸に投棄された折に大きく破損している。

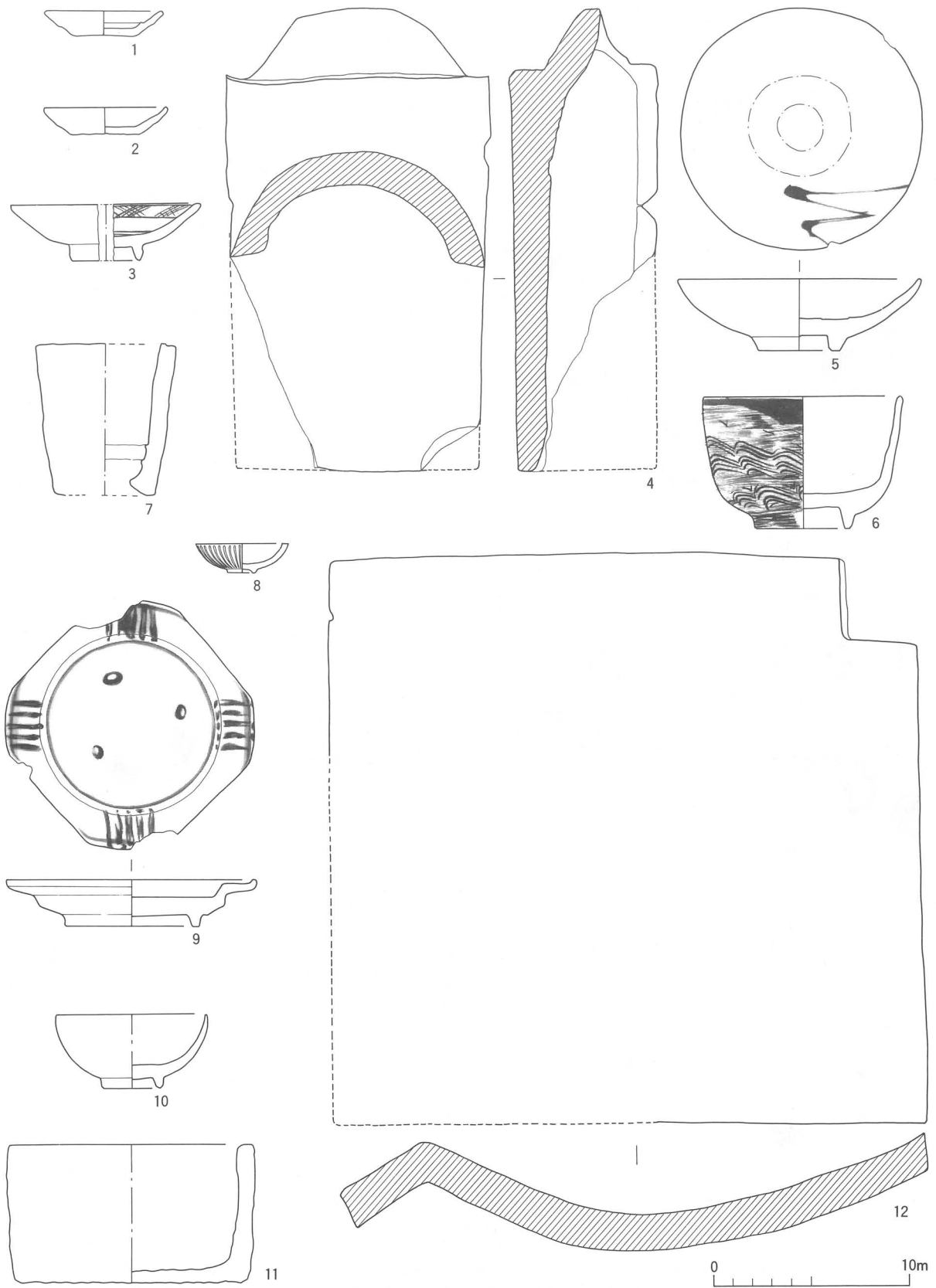
瓦 126・127は軒丸瓦。瓦当はともに左巻の三巴文で、周囲に19個の珠文を配している。巴文の頭部は比較的小さく、尾部は長く延びて一圈を成している。色調は鼠色を呈し、焼成は良好。128は軒平瓦。瓦当には唐草文が配されている。瓦の左右の端は垂直に立ち上がり、下面には突出部が造り出されている。表面には多量の煤が付着している。

江戸時代 今回の調査地点は、有岡城が存在していた天正11年(1583)までは、侍屋敷が配された地域に該当するが、廃城後は全ての建物が速やかに撤去されたらしく、伊丹に遺る寛文九年(1669)の伊丹郷町絵図には、この付近には建物が存在していない。発掘調査の結果をみても江戸時代前期の遺物はほとんど出土せず、18世紀以降にようやく町がひろがっていったことを裏付けている。次に図示した遺物の説明を加えておきたい。

SK51 (18～22) 18は手捏ね製の土師皿。外面には指頭圧痕を多く残し対し、内面は「ナデ」により整えられている。口縁部には煤が付着している。19は磁器小杯。高台は無釉となり、内面には呉須によ折松葉文が描かれている。20は陶器碗。透明な釉が高台まで掛けられる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。21は染付磁器碗。外面には草花文を配し、高台裏に「大明年製」の銘款がある。胎土は精緻で色調は肌色に近い。唐草系の碗であろう。22は京焼陶器の皿。内面に草花文が描かれている。

SK77 (27～30) SK77出土の遺物は4点を図示した。27は焼塩壺の蓋。内面に布目跡が残る。28と29は筒型碗。28は外面に丸文を配した白磁染付碗、29は青磁染付碗である。29の高台裏には「渦福」銘がある。30は染付磁器碗蓋。見込みにコンニャク印判による五弁花が描かれている。図示していないが、これらと共に染付磁器そば猪口と柿釉灯明皿が出土している。時期は18世紀後半と考えられる。

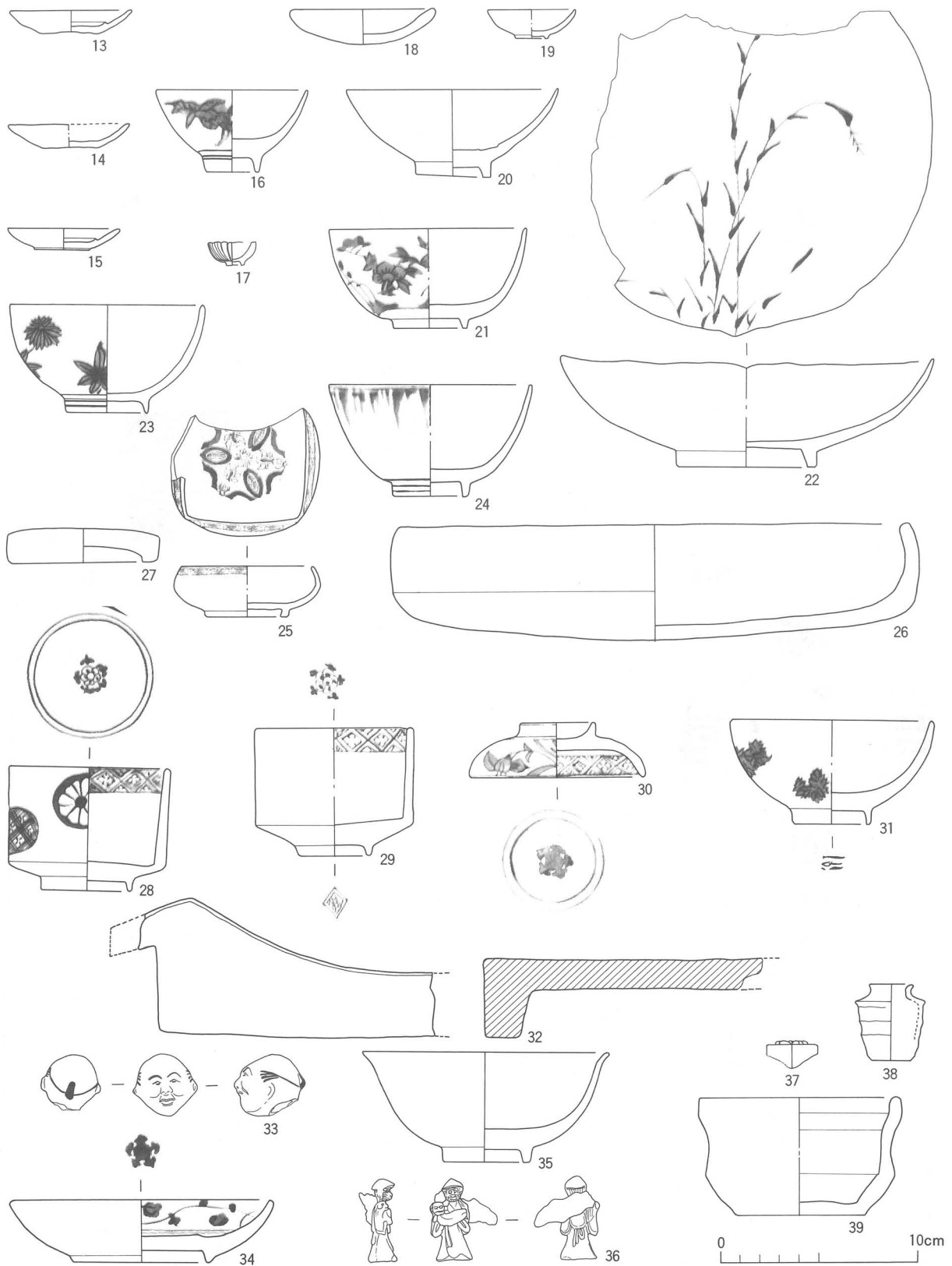
SK113 (46～64) SK113からは土師皿が多く出土している。いずれも口縁部に煤の付着があり、灯明皿として用途が明確なものである。47・50・53が底部に糸切り痕を残すロクロ製で、51と52は手捏ね製となっている。ともに無釉。48は粗製の白磁染付皿。見込みにはかなり崩れた五弁花が描かれている。



SK-3 1・2 SK-13 3 SK-26 4 SK-32 5 SK-36 6 SK-38 7~9
SK-39 10 SK-42 11 SK-45 12

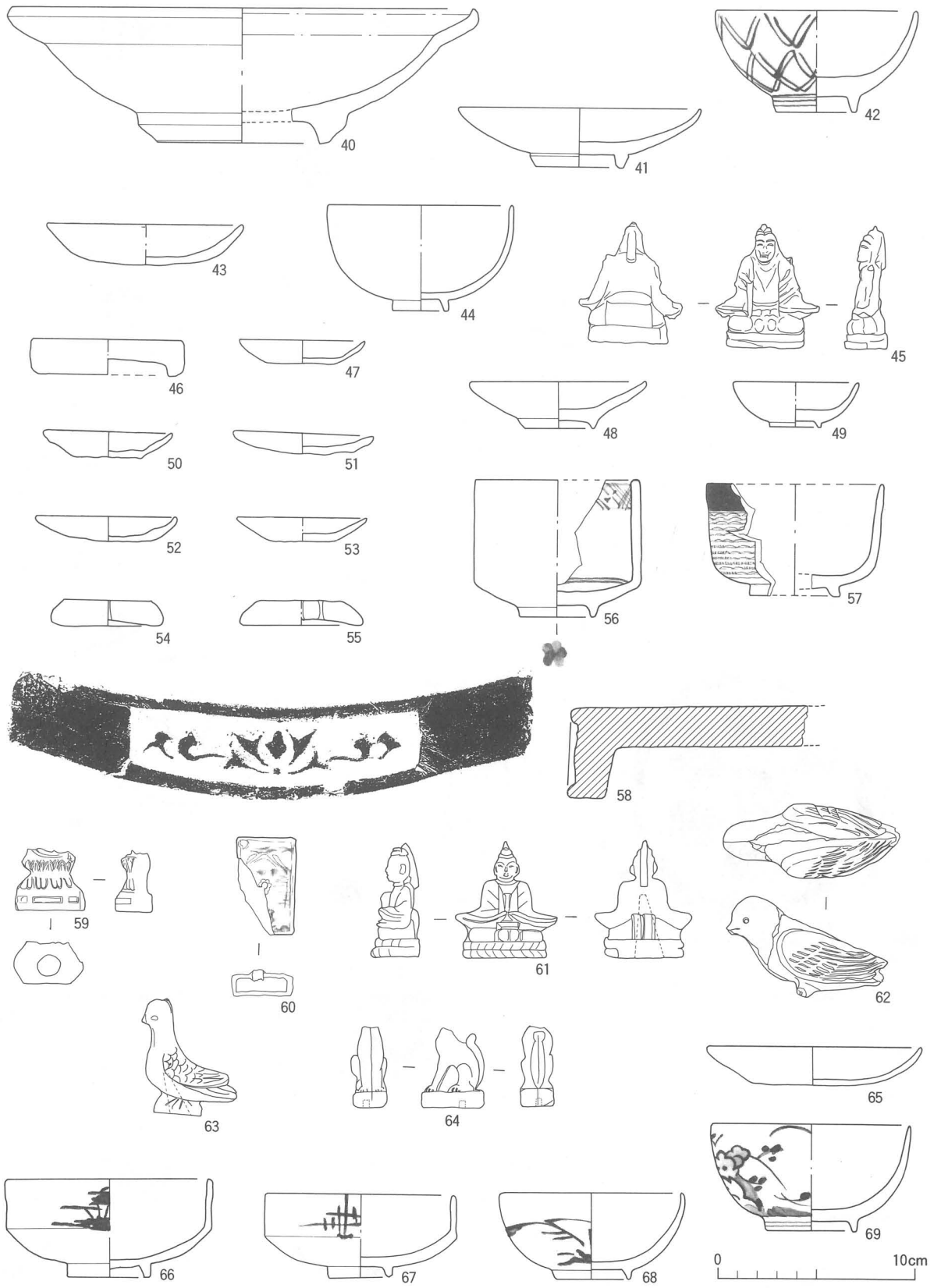
図7 第34次調査出土遺物(1)

第2章 調査成果



SK-45 13~15 SK-73 26 SK-46 16 SK-77(井戸11) 27~30 SK-47 17 SK-79 31・32 SK-51 18~22
 SK-82 33・34 SK-55 23 SK-84 35 SK-67 24 SK-88 36~38 SK-72 25 SK-90 39

図8 第34次調査出土遺物(2)



SK-90 40・41 SK-97 42 SK-105 43~45 SK-113 46~64
SK-119 65~69

図9 第34次調査出土遺物(3)

第2章 調査成果

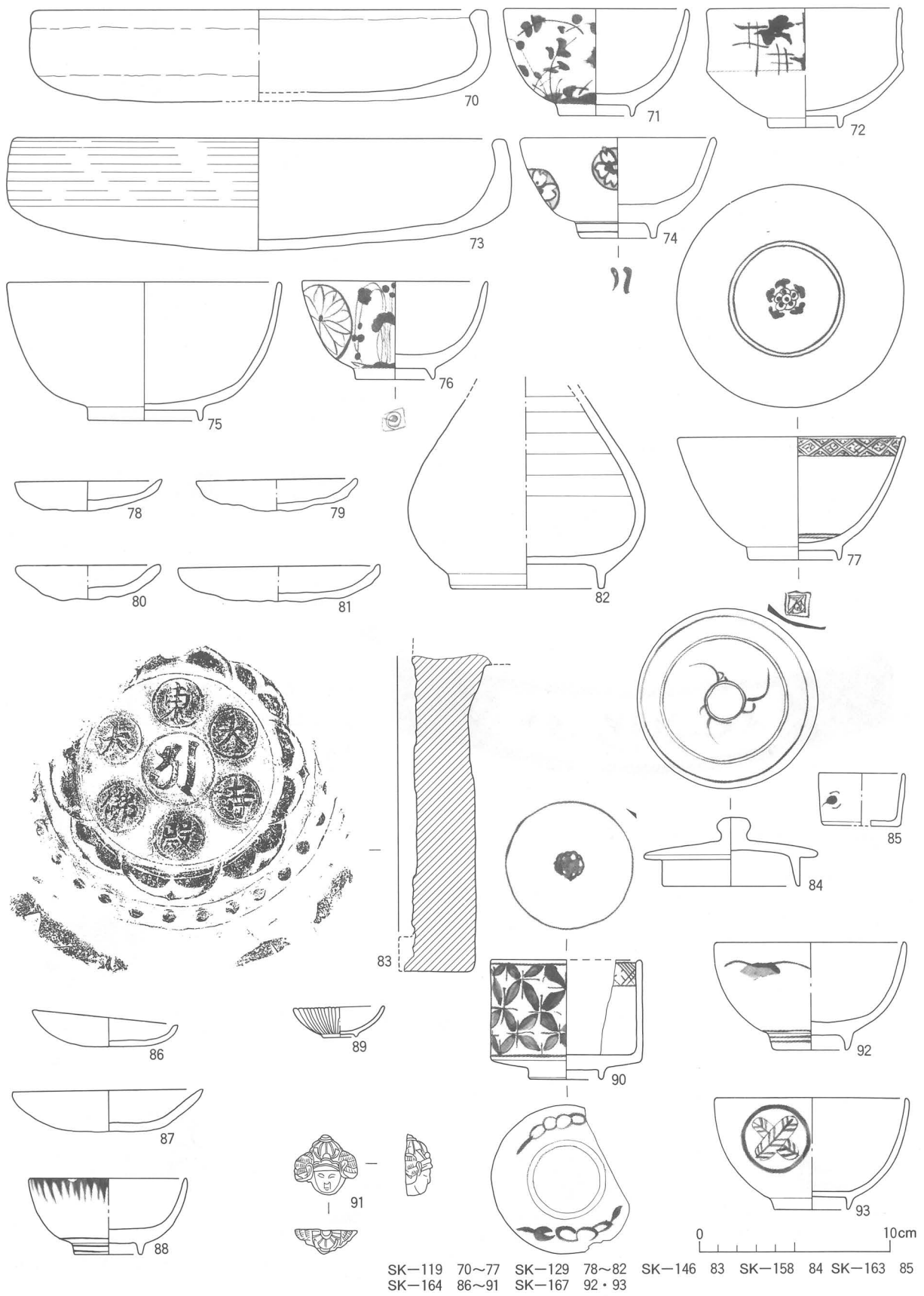


図10 第34次調査出土遺物(4)

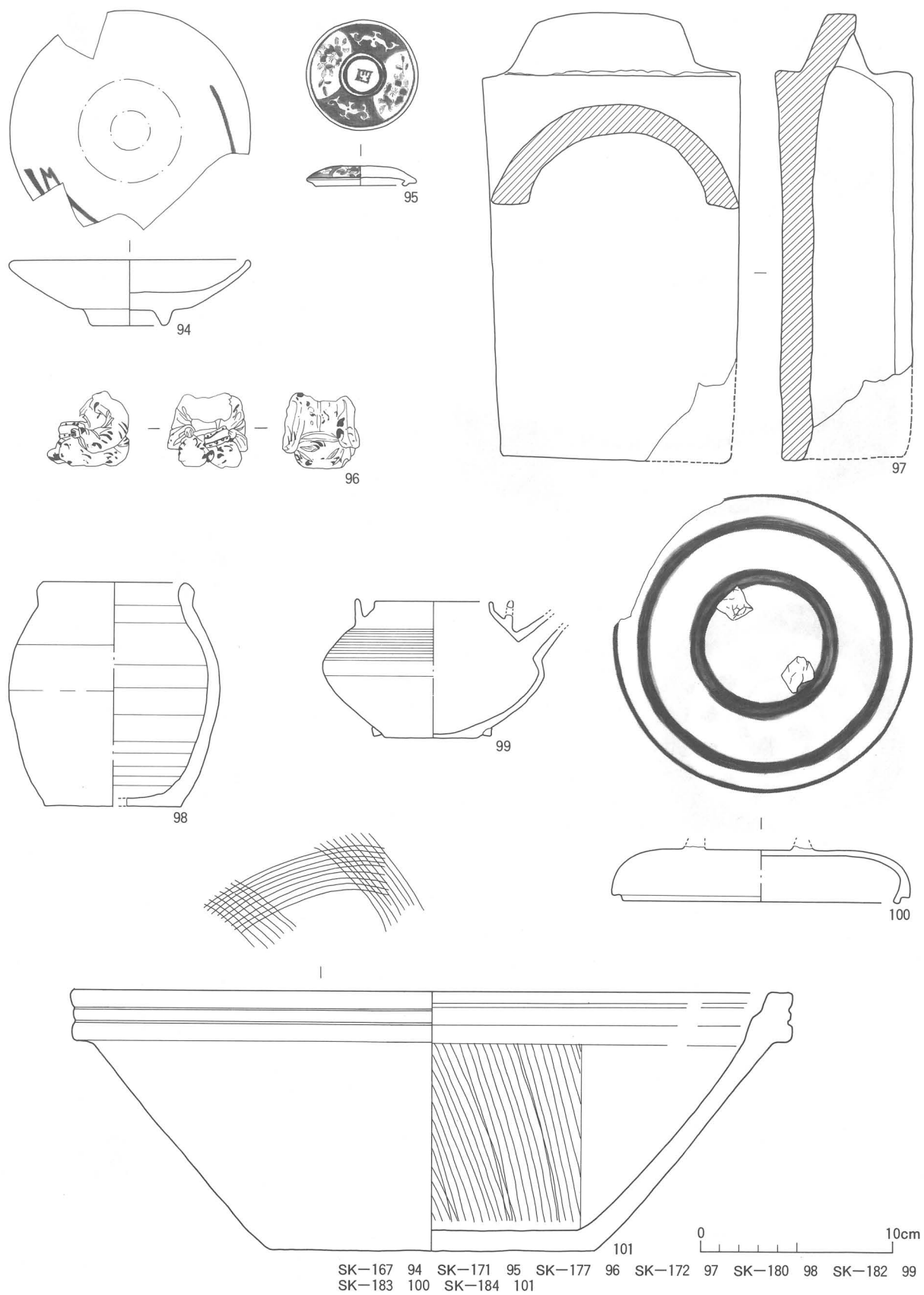
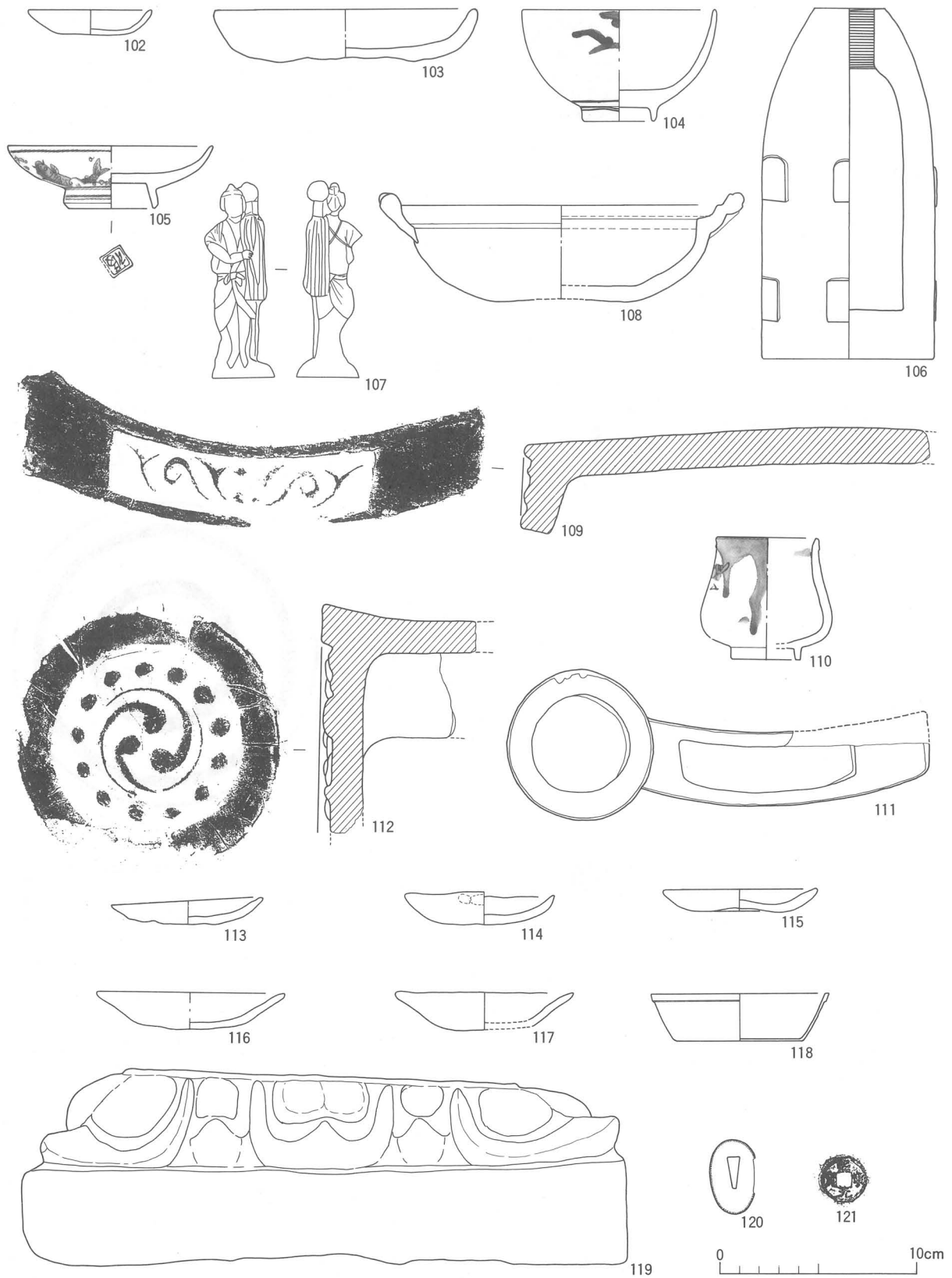


図11 第34次調査出土遺物(5)

第2章 調査成果



SK-183 102 SK-185 103 SK-205 104 SK-214 105~107 SK-232 108
SK-235 109 井戸2 110・111 井戸3 112~121

図12 第34次調査出土遺物(6)

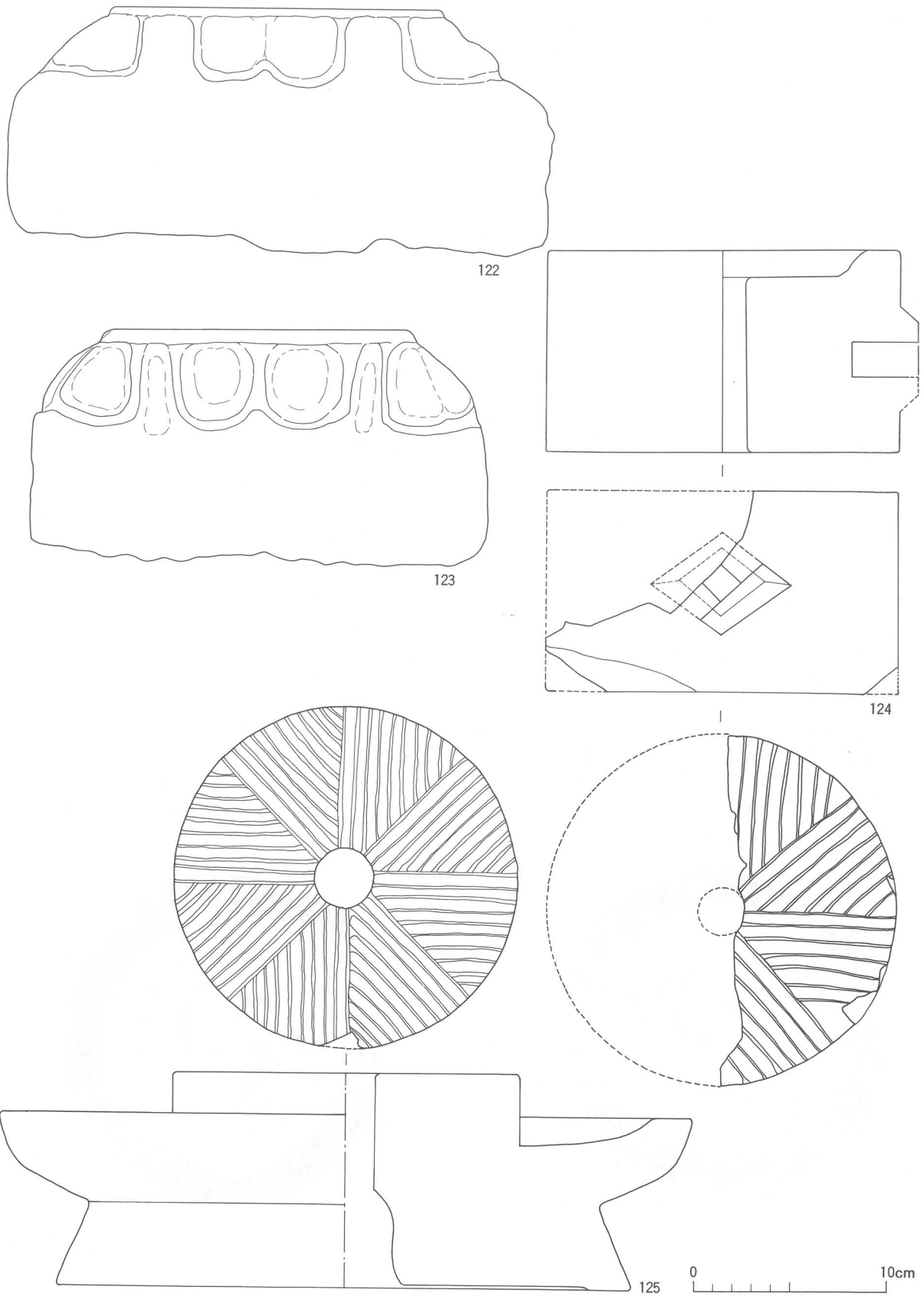
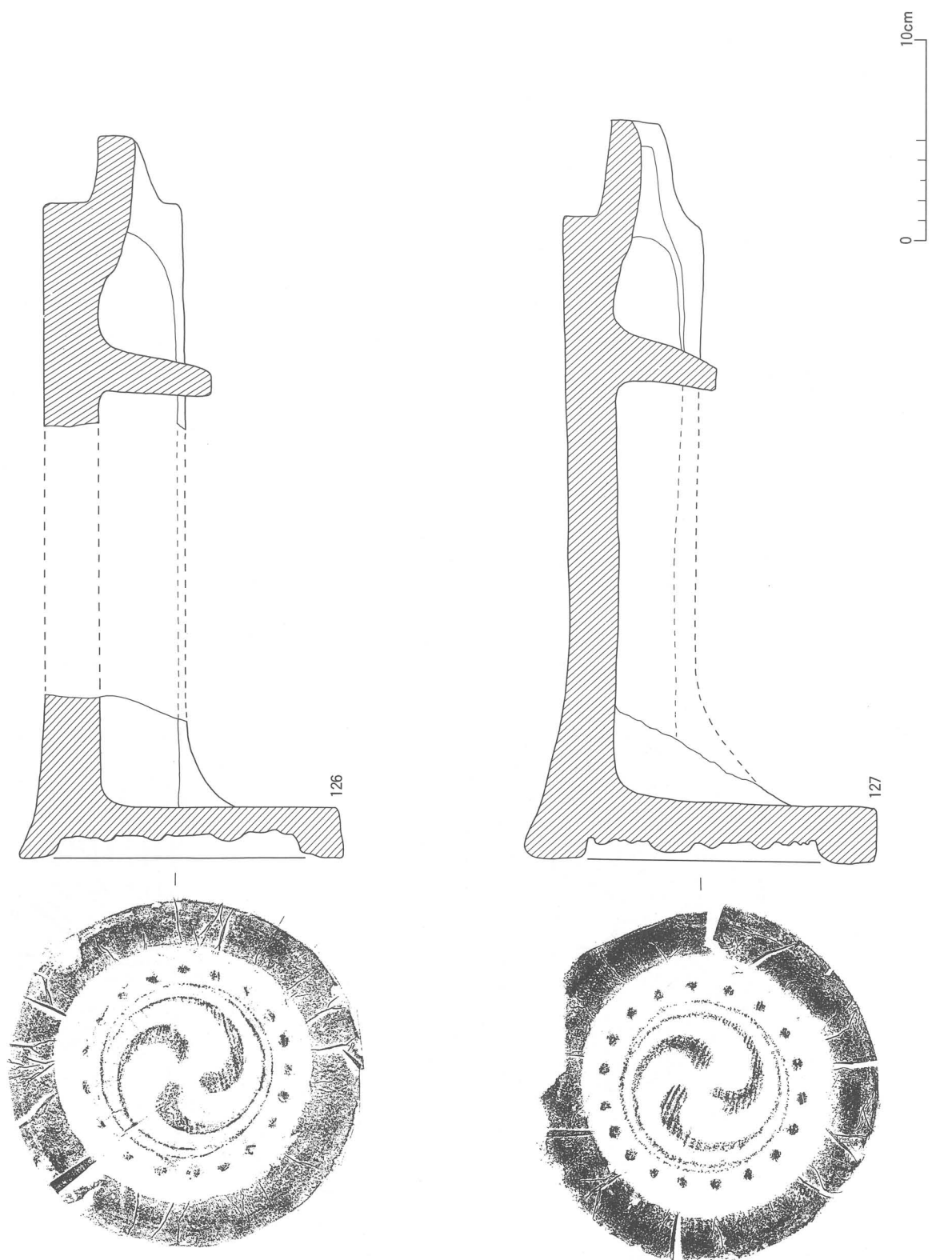


図13 第34次調査出土遺物(7)

井戸3 122~125



井戸3 126・127

図14 第34次調査出土遺物(8)

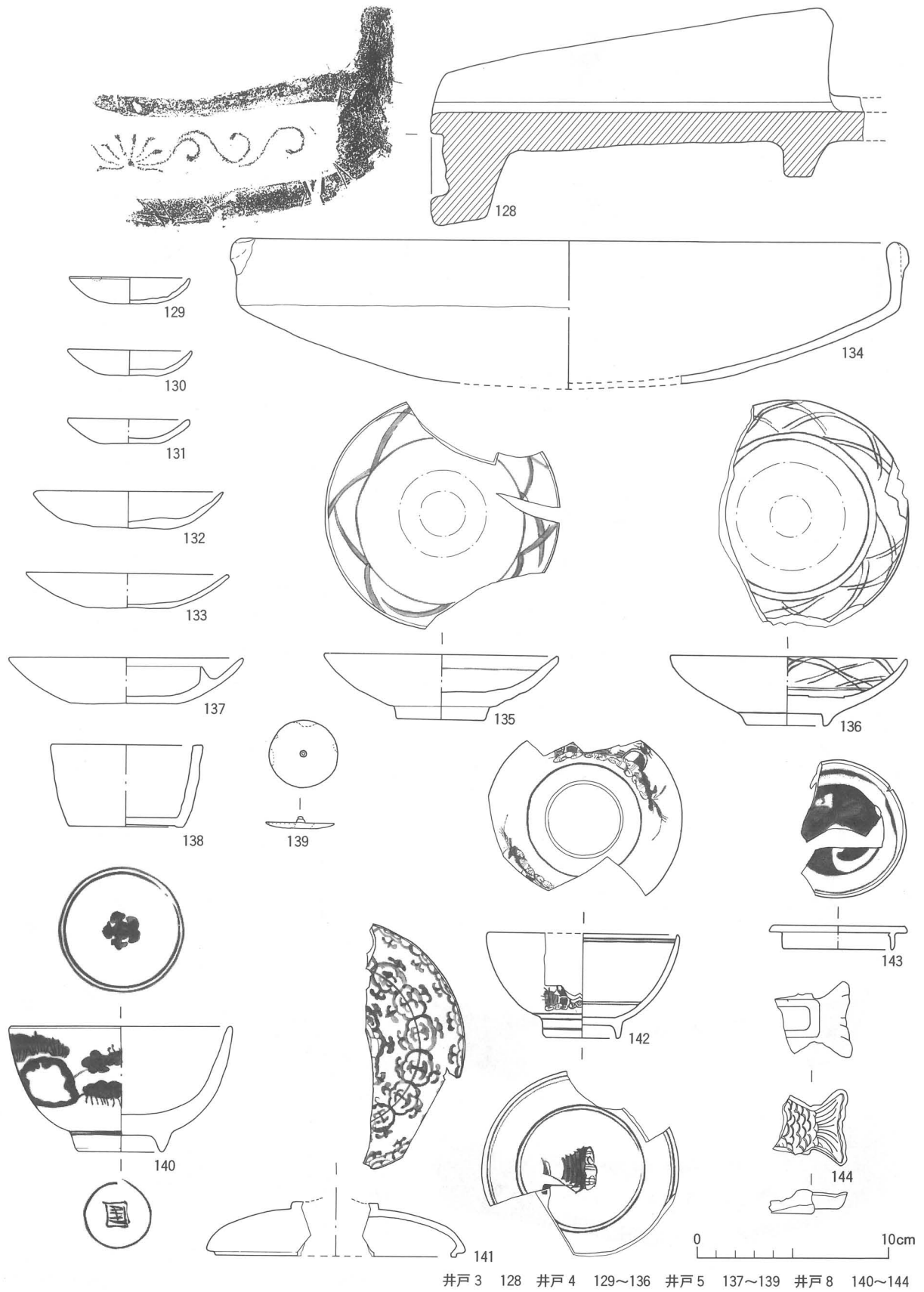
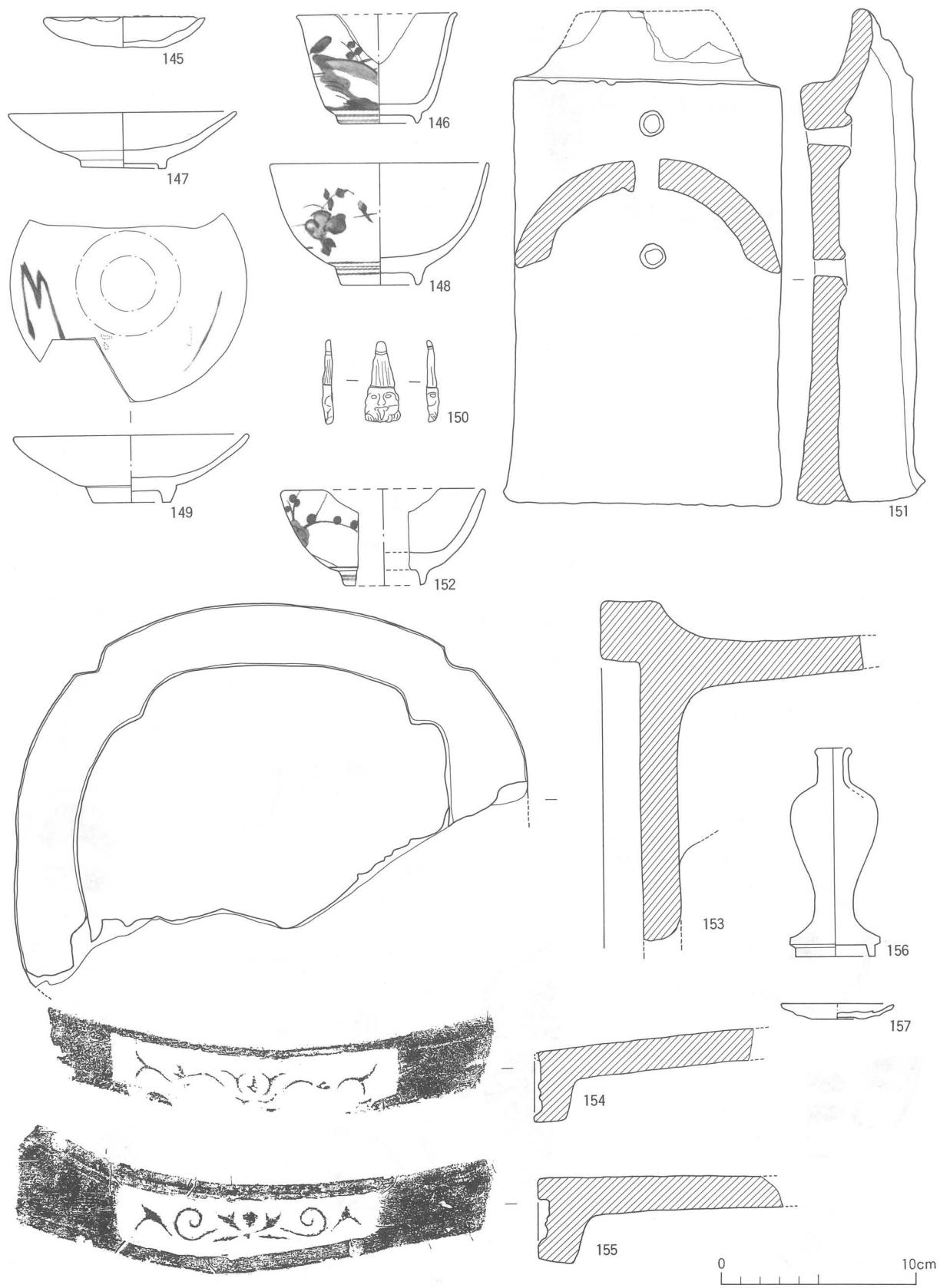


図15 第34次調査出土遺物(9)

第2章 調査成果



井戸9 145~150 井戸11 151~155 遺構外 156~157

図16 第34次調査出土遺物(10)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 7-1 Pl. 10-1	燈明受皿 (土師質)	器高 1.3 口径 6.1 底径 3.1	SK-3 口ク口成形 糸切り底 柿釉	Fig. 8-20 Pl. 11-15	陶器碗	器高 4.5 口径 10.8 底径 3.8	SK-51 蛇ノ目釉ハギ
Fig. 7-2 Pl. 10-2	燈明皿 (土師質)	器高 1.4 口径 (6.4) 底径 (3.4)	SK-3 口ク口成形 柿釉	Fig. 8-21 Pl. 11-16	染付磁器碗 肥前	器高 5.1 口径 (10.5) 底径 (3.75)	SK-51 外 草花文 「大明年製」銘
Fig. 7-3 Pl. 10-3	青磁染付皿 肥前	器高 2.9 口径 9.8 底径 3.5	SK-13 内 斜格子文 五弁花	Fig. 8-22 Pl. 11-17	陶器皿 京焼	器高 5.6 口径 (19.5) 底径 (2.1)	SK-51 内 草花文 「榮」銘
Fig. 7-4	丸瓦	長 23.9 幅 13.5 厚 1.7	SK-26	Fig. 8-23 Pl. 11-18	染付磁器碗 肥前	器高 5.55 口径 10.0 底径 4.2	SK-55 外 印判手 銘款あり
Fig. 7-5 Pl. 10-4	染付磁器皿 肥前	器高 3.8 口径 12.4 底径 4.2	SK-32 蛇ノ目釉ハギ	Fig. 8-24 Pl. 11-19	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 (10.35) 底径 (3.9)	SK-67 外 柳文
Fig. 7-6 Pl. 10-5	陶器碗 唐津	器高 6.85 口径 10.3 底径 5.0	SK-36 外 刷毛目	Fig. 8-25 Pl. 11-20	色絵磁器小鉢	器高 2.6 口径 (6.8) 底径 (4.3)	SK-72 外 斜格子文 「青峯」銘
Fig. 7-7 Pl. 10-6	焼塩壺	器高 7.8 口径 (7.25) 底径 (4.5)	SK-38	Fig. 8-26 Pl. 12-21	焙烙	器高 5.9 口径 26.0 器高 7.5	SK-73
Fig. 7-8 Pl. 10-7	紅皿(磁器)	器高 1.5 口径 4.8 底径 1.4	SK-38	Fig. 8-27 Pl. 12-22	焼塩壺蓋	器高 1.8 口径 7.7 底径 7.7	SK-77 内 布目あり
Fig. 7-9 Pl. 10-8	陶器皿 瀬戸・美濃	器高 2.45 口径 12.8 底径 6.9	SK-38(新)	Fig. 8-28 Pl. 12-23	染付磁筒型碗 肥前	器高 6.3 口径 8.2 底径 4.6	SK-77 外 丸文 内 斜格子文
Fig. 7-10	磁器碗 肥前	器高 3.95 口径 (7.75) 底径 (3.1)	SK-39	Fig. 8-29 Pl. 12-24	青磁染付筒型碗 肥前	器高 6.55 口径 (8.11) 底径 (3.85)	SK-77 内 斜格子文 五弁花
Fig. 7-11	陶器火入れ 備前	器高 7.15 口径 (12.5) 底径 (11.2)	SK-42	Fig. 8-30 Pl. 12-25	染付磁器蓋 肥前	器高 2.8 口径 9.0 底径 3.9	SK-77 外 菖蒲文 内 斜格子文
Fig. 7-12	平瓦(棧瓦)	長 29.2 横 30.1 幅 1.9	SK-45	Fig. 8-31 Pl. 12-26	染付磁器碗 肥前	器高 5.3 口径 (10.3) 底径 (4.0)	SK-79 外 印判手 桐文
Fig. 8-13 Pl. 10-9	燈明受皿 (土師質)	器高 1.25 口径 6.25 底径 3.2	SK-45 口ク口成形 糸切り底 柿釉	Fig. 8-32	軒平瓦(棧瓦)	厚 1.6	SK-79
Fig. 8-14 Pl. 10-10	燈明受皿 (土師質)	器高 1.3 口径 (6.2) 底径 (2.8)	SK-45 口ク口成形 糸切り底 柿釉	Fig. 8-33	人形(陶器)	縦 3.2 横 3.3	SK-82
Fig. 8-15 Pl. 10-11	燈明受皿 (土師質)	器高 1.1 口径 5.7 底径 2.8	SK-45 口ク口成形 糸切り底 柿釉	Fig. 8-34 Pl. 12-27	染付磁器皿 肥前	器高 3.2 口径 13.4 底径 6.8	SK-82 内 草花文 五弁花 蛇ノ目釉ハギ
Fig. 8-16 Pl. 11-12	染付磁器小碗 肥前	器高 4.2 口径 (7.8) 底径 (2.6)	SK-46 外 印判手	Fig. 8-35 Pl. 12-28	白磁碗 肥前	器高 5.6 口径 12.4 底径 4.5	SK-84 蛇ノ目釉ハギ
Fig. 8-17	紅皿	器高 1.3 口径 2.3 底径 9.5	SK-47	Fig. 8-36 Pl. 12-29	土人形 (獅子を抱いた猿)	幅 4.2 高 2.0	SK-88
Fig. 8-18 Pl. 11-13	土師皿 (燈明皿)	器高 2.8 口径 8.5 底径 3.5	SK-51 手捏ね	Fig. 8-37 Pl. 12-30	土製駒	幅 2.6 高 1.4	SK-88 中央に孔あり
Fig. 8-19 Pl. 11-14	磁器小杯 肥前	器高 1.55 口径 (4.45) 底径 (1.7)	SK-51 内 折松葉丈	Fig. 8-38 Pl. 13-31	小型壺	幅 3.55 高 3.9	SK-88 褐釉

表1 第34次調査出土遺物観察表(1)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 8-39 Pl. 13-32	陶器火入れ	器高 6.0 口径 (10.2) 底径 (6.6)	SK-90	Fig. 9-58	軒平瓦	厚 2.0 幅 26.3	SK-113 唐草文
Fig. 9-40 Pl. 13-33	陶器鉢 印毛目唐津	器高 6.9 口径 (24.0) 底径 (8.8)	SK-90	Fig. 9-59 Pl. 14-49	土人形 (仏像台座)	高 3.1 幅 3.6	SK-113 型合わせ
Fig. 9-41 Pl. 13-34	染付磁器皿 肥前	器高 2.95 口径 12.4 底径 4.5	SK-90 蛇ノ目釉ハギ	Fig. 9-60 Pl. 14-50	水滴 (染付磁器) 肥前	縦 5.0 横 3.0 厚 1.4	SK-113 外 富士山
Fig. 9-42 Pl. 13-35	染付磁器碗 肥前	口径 (10.3) 底径 (4.1) 器高 5.2	SK-97 二重網目文	Fig. 9-61 Pl. 14-51	土人形 (天神様)	高 5.9 幅 5.2	SK-113 型合わせ
Fig. 9-43 Pl. 13-36	土師皿 (燈明皿)	器高 2.1 口径 10.1 底径 (5.4)	SK-105 手捏ね	Fig. 9-62 Pl. 14-52	土人形(鳩)	高 5.9 幅 7.6	SK-113
Fig. 9-44	陶器碗 京焼	器高 5.4 口径 (9.5) 底径 (2.8)	SK-105 外 草花文 高台無釉	Fig. 9-63 Pl. 14-53	土人形(鳩)	高 5.8 幅 5.2	SK-113 型合わせ
Fig. 9-45 Pl. 13-37	土人形 (天神様)	幅 5.3 高 6.35	SK-105 型合わせ	Fig. 9-64 Pl. 14-54	土人形(狐)	現存高4.1 幅 3.2	SK-113 型合わせ
Fig. 9-46 Pl. 13-38	焼塩壺蓋	器高 1.8 口径 7.8	SK-113 内 布目あり	Fig. 9-65 Pl. 14-55	土師皿 (燈明皿)	器高 2.4 口径 10.95 底径 5.7	SK-119 手捏ね
Fig. 9-47 Pl. 13-39	土師皿 (燈明皿)	器高 1.2 口径 6.3 底径 3.5	SK-113 口ク口整形 糸切 り底	Fig. 9-66 Pl. 15-56	陶器碗 信楽	器高 5.0 口径 (10.5) 底径 (4.2)	SK-119 外 鉄絵
Fig. 9-48 Pl. 13-40	磁器皿	器高 2.4 口径 9.0 底径 3.5	SK-113 内 蛇ノ目釉ハギ 高台無釉	Fig. 9-67 Pl. 15-57	陶器碗 信楽	器高 4.3 口径 (9.7) 底径 (3.0)	SK-119 外 鉄絵
Fig. 9-49 Pl. 13-41	染付磁器碗 肥前	器高 2.3 口径 6.35 底径 2.6	SK-113	Fig. 9-68 Pl. 15-58	染付磁器碗 肥前	器高 4.4 口径 9.4 底径 4.9	SK-119 外 草花文
Fig. 9-50 Pl. 13-42	土師皿 (燈明皿)	器高 1.4 口径 6.6 底径 3.4	SK-113 口ク口整形 糸切 り底	Fig. 9-69 Pl. 15-59	染付磁器碗 肥前	器高 5.4 口径 10.2 底径 4.7	SK-119 外 梅樹文
Fig. 9-51 Pl. 13-43	土師皿 (燈明皿)	器高 1.6 口径 7.1 底径 1.8	SK-113 手捏ね	Fig. 10-70	焙烙	器高 (4.9) 口径 (24.0)	SK-119
Fig. 9-52 Pl. 14-44	土師皿 (燈明皿)	器高 1.5 口径 7.2 底径 4.3	SK-113 手捏ね	Fig. 10-71 Pl. 15-60	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 9.8 底径 4.0	SK-119 外 花文のみ印判 草花文
Fig. 9-53 Pl. 14-45	土師皿 (燈明皿)	器高 1.3 口径 6.1 底径 3.4	SK-113 口ク口成形 糸切 り底	Fig. 10-72 Pl. 15-61	陶器碗 信楽	器高 6.3 口径 (10.3) 底径 (4.0)	SK-119 外 鉄絵
Fig. 9-54 Pl. 14-46	紡錘車 (土師質)	径 5.6 厚 1.3	SK-113	Fig. 10-73	焙烙	器高 6.0 口径 26.0 底径 22.0	SK-119
Fig. 9-55 Pl. 14-47	紡錘車 (土師質)	径 6.2 厚 1.3	SK-113	Fig. 10-74 Pl. 15-62	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 10.3 底径 22.0	SK-119 外 印判手 銘款あり
Fig. 9-56 Pl. 14-48	青磁染付筒 型碗 肥前	器高 7.0 口径 (8.4) 底径 (3.9)	SK-113 内 斜格子文 五弁花	Fig. 10-75 Pl. 15-63	白磁碗 肥前	器高 7.3 口径 14.5 底径 6.1	SK-119
Fig. 9-57	陶器碗 (鎧茶碗) 瀬戸・美濃	器高 5.7 口径 (9.0)	SK-113	Fig. 10-76 Pl. 15-64	染付磁器碗 肥前	器高 5.2 口径 9.8 底径 4.2	SK-119 外 菊文

表2 第34次調査出土遺物観察表(2)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 10-77 Pl. 15-65	青磁染付碗 肥前	器高 6.5 口径 12.0 底径 4.9	SK-119 内 斜格子文 五弁花	Fig. 11-96 Pl. 16-78	土人形 (陶器)	高 3.9 幅 4.2	SK-177
Fig. 10-78	土師皿	器高 1.4 口径 7.8 底径 3.8	SK-129 手捏ね	Fig. 11-97	丸瓦	長 23.4 幅 13.5 厚 1.5	SK-172
Fig. 10-79	土師皿	器高 1.8 口径 (8.5) 底径 (2.4)	SK-129 手捏ね	Fig. 11-98 Pl. 17-79	陶器壺 丹波	器高 11.7 口径 (8.2) 底径 (7.2)	SK-180
Fig. 10-80 Pl. 15-66	土師皿	器高 1.9 口径 (7.6) 底径 (3.8)	SK-129 手捏ね	Fig. 11-99 Pl. 17-80	土瓶	器高 7.1 口径 (6.2) 底径 (4.9)	SK-182
Fig. 10-81 Pl. 15-67	土師皿	器高 2.0 口径 (10.6) 底径 (4.0)	SK-129 手捏ね	Fig.11-100 Pl. 17-81	染付磁器蓋	器高 (2.9) つまみ径 口径 (15.4)	SK-183
Fig. 10-82	陶器瓶	胴部径(12.4) 底径 (8.2)	SK-129 鉄釉	Fig.11-101	播鉢 堺	器高 13.5 口径 37.5 底径 16.9	SK-184
Fig. 10-83 Pl. 16-68	軒丸瓦	厚 3.0 径 (23.2)	SK-146 「東大寺大仏殿」銘	Fig.12-102 Pl. 17-82	土師皿 (燈明皿)	器高 1.3 口径 6.4	SK-183 口ク口成形 糸切り底
Fig. 10-84 Pl. 16-69	陶器蓋	器高 3.6 口径 7.25 底径 1.75	SK-158	Fig.12-103 Pl. 17-83	土師皿 (燈明皿)	器高 (2.7) 口径 13.5	SK-185 手捏ね
Fig. 10-85 Pl. 16-70	染付磁器小 杯	器高 2.8 口径 (4.6) 底径 (4.2)	SK-163 外 おたまじゃくし	Fig.12-104 Pl. 17-84	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 9.9 底径 (3.8)	SK-205 外 草花文
Fig. 10-86 Pl. 16-71	土師皿 (燈明皿)	器高 2.0 口径 7.7	SK-164 手捏ね	Fig.12-105 Pl. 17-85	染付磁器蓋	器高 3.2 口径 (10.4) 底径 (4.4)	SK-214 外 鯉文 型紙摺り 「角福」銘あり
Fig. 10-87	土師皿 (燈明皿)	器高 2.2 口径 (10.0)	SK-164 手捏ね	Fig.12-106 Pl. 17-86	砲弾	長 17.9 径 8.8 厚 1.6	SK-214
Fig. 10-88	染付磁器碗 肥前	器高 4.0 口径 (8.3) 底径 (3.6)	SK-164 外 柳文	Fig.12-107 Pl. 18-88	土人形 (火消し・磁器)	高 10.0 幅 3.4	SK-214
Fig. 10-89 Pl. 16-72	紅皿(磁器) 肥前	器高 1.5 口径 4.8 底径 1.8	SK-164	Fig.12-108	土鍋 瀬戸	器高 5.5 口径 (16.0) 底径 (7.4)	SK-232 長石釉
Fig. 10-90 Pl. 16-73	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 6.3 口径 8.0	SK-164	Fig.12-109 Pl. 17-87	軒平瓦	厚 1.8 幅 23.5	SK-235 唐草文
Fig. 10-91	土人形 (武士)	高 3.15 幅 3.3	SK-164	Fig.12-110 Pl. 18-89	陶器碗 瀬戸・美濃	器高 6.2 口径 (5.25) 底径 (3.5)	井戸 2 長石釉 鏤絵
Fig. 10-92 Pl. 16-74	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 (10.2) 底径 (4.0)	SK-167 外 草花文	Fig.12-111	軒丸瓦 (棧瓦)	幅 20.2 厚 1.2	井戸 2
Fig. 10-93 Pl. 16-75	染付磁器碗	器高 5.9 口径 (10.2) 底径 (4.0)	SK-167 外 印判文	Fig.12-112 Pl. 18-90	軒丸瓦	厚 1.6 径 13.0	井戸 3 (中層) 三巴文
Fig. 11-94 Pl. 16-76	染付磁器皿 肥前	器高 3.4 口径 12.7 底径 3.9	SK-167 内 蛇ノ目杓ハギ	Fig.12-113 Pl. 18-91	土師皿	器高 1.5 口径 7.65 底径 3.1	井戸 3 手捏ね
Fig. 11-95 Pl. 16-77	色絵磁器蓋	器高 1.0 口径 5.8	SK-171 外 花文	Fig.12-114 Pl. 18-92	土師皿	器高 1.7 口径 7.6 底径 4.0	井戸 3 (底) 手捏ね

表3 第34次調査出土遺物観察表(3)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig.12-115	土師皿	器高 1.4 口径 (7.8) 底径 (4.9)	井戸3 (底) 手捏ね	Fig.15-134	焙烙	器高 7.8 口径 35.0 底径 34.5	井戸4 口縁部に取手あり
Fig.12-116	土師皿	器高 1.9 口径 (9.6)	井戸3 手捏ね	Fig.15-135 Pl. 19-109	染付磁器皿 肥前	器高 3.4 口径 (12.25) 底径 (4.8)	井戸4 (上層) 内 斜格子文 蛇ノ目釉ハギ
Fig.12-117	土師皿 (燈明皿)	器高 1.95 口径 9.0	井戸3 手捏ね	Fig.15-136 Pl. 20-110	染付磁器皿 肥前	器高 3.65 口径 (12.4) 底径 (4.4)	井戸4 (土層) 内 斜格子文 蛇ノ目釉ハギ
Fig.12-118 Pl. 18-94	銅碗	器高 2.4 口径 9.0 底径 6.3	井戸3 (底)	Fig.15-137 Pl. 20-111	燈明受皿 信楽	器高 2.4 口径 (12.4) 底径 (5.6)	井戸5
Fig.12-119 Pl. 18-95	五輪塔台座	残存高10.0 最大幅30.7	井戸3 花崗岩	Fig.15-138 Pl. 20-112	鉢(土師質)	器高 4.3 口径 8.0 底径 6.0	井戸5 型作り
Fig.12-120 Pl. 18-96	切羽	縦 3.8 横 2.3	井戸3	Fig.15-139	陶器蓋	径 3.55 厚 6.5	井戸5 褐釉
Fig.12-121 Pl. 18-97	古銭 (熙寧元宝) 北宋	直径 2.3	井戸3 初鑄年1068年	Fig.15-140 Pl. 20-113	染付磁器碗 肥前	器高 6.6 口径 (11.7) 底径 (4.6)	井戸8 外 雪輪草花文 五弁花
Fig.13-122 Pl. 18-98	五輪塔台座	残存高12.5 最大幅28.5	井戸3 花崗岩	Fig.15-141	染付磁器蓋 肥前	現存高2.8 口径 (12.6) つまみ径(4.6)	井戸8 外 環珞文
Fig.13-123 Pl. 18-99	五輪塔台座	高さ 12.3 幅 23.8	井戸3 花崗岩	Fig.15-142 Pl. 20-114	染付磁器碗	器高 5.45 口径 (10.2) 底径 (4.1)	井戸8 外 楼郭山水文
Fig.13-124 Pl. 19-100	茶臼(上臼)	径 18.3 高さ 10.5	井戸3 8区画8条	Fig.15-143 Pl. 20-115	陶器蓋	つまみ径(5.7) 口径 (6.88) 器高 1.25	井戸8
Fig.13-125 Pl. 19-101	茶臼(下臼)	白径 18.0 受皿径35.9 高さ 11.2	井戸3 8区画10条	Fig.15-144	土人形(魚)	幅 3.9 現在高3.99	井戸8 外 朱彩
Fig.14-126 Pl. 19-102	軒丸瓦	長 36.0 径 17.1 厚 2.1	井戸3 三巴文	Fig.16-145 Pl. 20-116	土師皿 (燈明皿)	器高 1.65 口径 8.22 底径 3.95	井戸9 手捏ね
Fig.14-127	軒丸瓦	長 36.4 径 17.1 厚 2.4	井戸3 三巴文	Fig.16-146 Pl. 20-117	染付磁器碗 肥前	器高 6.3 口径 (11.4) 底径 (4.2)	井戸9 外 草花文 「渦福」銘あり
Fig.15-128 Pl. 19-103	軒平瓦	厚 2.0 幅 27.0	井戸3 唐草文	Fig.16-147 Pl. 20-118	陶器皿 唐津	器高 2.91 口径 11.8 底径 4.4	井戸9 銅緑釉 蛇ノ目釉 ハギ
Fig.15-129 Pl. 19-104	土師皿 (燈明皿)	器高 1.4 口径 6.4 底径 2.4	井戸4 (土層) ロク口成形	Fig.16-148	染付磁器碗 肥前	器高 6.3 口径 (11.4) 底径 (4.2)	井戸9 内 草花文 蛇ノ 目釉ハギ
Fig.15-130 Pl. 19-105	土師皿 (燈明皿)	器高 1.35 口径 6.5 底径 3.3	井戸4 ロク口成形	Fig.16-149 Pl. 20-119	染付磁器皿 肥前	器高 3.5 口径 12.21 底径 4.15	井戸9 蛇ノ目釉ハギ 高台無釉
Fig.15-131 Pl. 19-106	燈明皿 (土師質)	器高 1.3 口径 (6.4) 底径 (3.0)	井戸4 ロク口成形 柿釉	Fig.16-150	土人形	幅 1.95 高 4.1	井戸9 型合わせ
Fig.15-132 Pl. 19-107	土師皿 (燈明皿)	器高 2.0 口径 10.5 底径 4.0	井戸4 ロク口成形	Fig.16-151	軒丸瓦	長 25.5 幅 14.4 厚 1.6	井戸11
Fig.15-133 Pl. 19-108	土師皿 (燈明皿)	器高 1.8 口径 (10.65) 底径 (4.3)	井戸4 ロク口成形	Fig.16-152	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 (10.55) 底径 (4.2)	井戸11 外 梅樹文 蛇ノ目釉ハギ

表4 第34次調査出土遺物観察表(4)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig.16-153 Pl. 20-120	棟端飾瓦	厚 2.0 幅 26.5	井戸11	Pl. 21-128	銅銭		SK-13
Fig.16-154 Pl. 20-121	軒平瓦	厚 1.6 幅 23.2	井戸11 唐草文	Pl. 21-129	鉄釘		SK-13
Fig.16-155 Pl. 21-122	軒平瓦	厚 1.8 幅 24.1	井戸11 唐草文	Pl. 22-130	播鉢 備前	不明	井戸3 備前V期
Fig.16-156 Pl. 21-123	瓶 信楽	器高 2.0 口径 10.75 底径 4.05	重機荒堀 銅緑釉	Pl. 22-131	陶器溝淵皿 唐津	不明	井戸3
Fig.16-157 Pl. 21-124	燈明皿 (土師質)	器高 0.8 口径 (5.75) 底径 (2.8)	地山直上 ロクロ成形 柿釉	Pl. 22-132	不明 陶器	不明	井戸3 緑釉 P113-133・134と同一
Pl. 21-125	キセル吹口		SK-13	Pl. 22-133	不明 陶器	不明	井戸3 緑釉 P113-132・134と同一
Pl. 21-126	キセル雁首		SK-13	Pl. 22-134	不明 陶器	不明	井戸3 緑釉 P113-132・133と同一
Pl. 21-127	銅銭		SK-13				

表5 第34次調査出土遺物観察表(5)

57は瀬戸・美濃焼の鎧茶碗である。体部から高台にかけて透明釉、口縁部と内面には鉄釉の掛け分けとなっている。60は磁器製の水滴。表面には富士山と想われる山が浮彫りされ、呉須で雲などが描かれている。その他は土人形が5点(59・61～64)出土している。61は天神様、62・63は鳩、64は狐で、いずれも型合わせ。時期は、白磁皿(48)を除けば18世紀末～19世紀初の様相を呈している。

SK119(65～77)65は手捏ね製土師皿。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。ほぼ全面に煤の付着が認められ、灯明皿と使用されたことが判る。この土坑からは同様の土師皿が他に4点出土している。66・67・72は信楽焼の陶器碗である。高台から丸く立ち上がり中程から口縁部が直立するタイプで、外面には鉄絵が描かれる。磁器碗には、染付(68・69・71・74・76)と白磁(75)、青磁器染付(77)が出土している。74はコンニャク印判により桜が描かれ、71は菊をコンニャク印判で描き、草花文を手書きで描いている。白磁碗(75)は口径14.5cmの大振り碗である。薄手に仕上げられた上製品である。77の青磁染付碗も薄手で呉須の発色や釉調ともに良好である。高台裏に「渦福」銘が書かれている。70と73は焙烙。70は口縁部に粘土紐の痕を残し、底部との接合部は指頭によるナデを施すだけの粗略な作りであるのに対し、73は回転台の使用により、口縁部内面は平滑に仕上げられ、底部との境はヘラナデが施されている。時期は、コンニャク印判を使用した74とコンニャク印判と手書きを併用した71が出土していること、信楽焼陶器碗(66・67・72)からみて18世紀前半の様相がみとめられる。

SK164(86～91) 86・87は土師皿である。ともに外面に指頭圧痕を多く残す手捏ね製。図示していないが口径7cmほどのロクロ製の土師皿が共伴している。89は紅皿。90は染付磁器筒型碗。見込みにはコンニャク印判による五弁花を施文している。時期は18世紀後半と考えられる。

井戸4(129～136)129～133は灯明に共された土師皿。いずれも底部に糸切り痕を残すロクロ製である。131は柿釉が施され、他は無釉。この他にも、10点ほどの土師皿が出土しているが、1点を除いてロクロ製となっている。135・136は染付磁器皿。ともに斜格子文を描いた蛇ノ目釉剥ぎの皿である。134は焙烙。口縁部は直立する。一對の把手が付くが、穿孔されていない。口縁部は回転台を利用した「ナデ」が施され、底部との接合部は「ヘラナデ」によって整形されている。時期は、ロクロ製土師皿

からみて18世紀後半頃と考えられる。

井戸9 (145～150) 145は土師皿。外面に指頭圧痕を残す手捏ね製。147は唐津系の銅緑釉皿。高台は無釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。146は染付磁器の端反り碗。高台裏に銘款の一部が残る。148草花文を描いた磁器碗。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。149は染付磁器皿。高台は無釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。時期は、147の唐津系銅緑釉皿や149の高台無釉の皿、146の端反り碗などから、17世紀後半～18世紀前半とみられる。

以上、紙面の関係で、遺物を多く出土した遺構についてのみ説明を加えたが、他の遺物の中でも重要と思われるものについて説明しておきたい。

83は軒丸瓦の瓦当である。中心部に梵字とその周囲に「東大寺大佛殿」を配した文字瓦で、もとは東大寺の大佛殿に葺かれていたものと思われる。また、106は大砲の砲弾である。この砲弾は側面部に将棋の駒形の突出部が上下2列10個配されていることが特徴で、同型の砲弾は幕末～明治にかけて使用されたものと考えられる。

小 結

伊丹郷町は伊丹村、大広寺村など十五の村が一つづきとなった在郷町で、その中心は伊丹村となっている。伊丹村には文禄年間(1592～1595)、既に藁屋町(綿屋町)・柴屋町(泉町)・魚屋町など十五の町が成立しており、それが寛文年間(1661～1672)までに十七町となり、その後元禄年間(1688～1703)までに二十四町、そして、正徳年間までに二町、享保十七年(1732)に一町が増加して二十七町が形成されていった。

今回の第34次調査地点については、先に述べたように鍛冶屋町(殿町)と湊町の両町にまたがっている。当時の一つの町の範囲は道の両側に広がるのが通例で、伊丹の場合も同様である。従って、比較的大きな道によって区画された土地に、複数の町が背中合わせに位置するのである。調査地点の町境はやや複雑で、ちょうど両町の範囲がL字立ちに向き合う形となっている。

調査範囲にこの町境が含まれることは、現状の地図や江戸時代に描かれた伊丹郷町絵図により明らかで、検出した遺構の中でSD01・杭列・柱穴列がこれに該当すると考えられる。すなわち、町境は北端のSD01を東から西へ通り、杭列との接点から南へ折れて、また再び柱穴列へと西へ折れるのである。町境といっても、それは当然個々の屋敷境でもある。溝や板塀や生垣などにより境が明示されていたと考えられるが、調査範囲の町境には、柱穴列や杭列からみて板塀が用いられていたとみられる。

次に、個々の屋敷境についてみてみたい。屋敷境は前述したように町境も兼ねているが、町境の遺溝の他に屋敷境を示す遺構のSD02・礎石列がある。SD02には直線的に杭が打ち込まれており、礎石列は規模と間隔などから板塀と考えられる。以上の遺構から区画された屋敷の規模を復元すると、SD01-SD02の間が9間×12.5間、SD02と礎石列の間が5間×12.5間、礎石列と柱穴列の間が5間×12.5間となり、各々が短冊型の地割であることがわかる。柱穴列より東側については残念ながら近代の攪乱を受けて不明となっている。また、柱穴列より南側(本泉寺側)については、調査範囲の中に屋敷境を示す遺構は検出されなかった。

以上、検出遺構と町割について復元を試みたが、最後に町の成立時期を出土遺物によって考えてみたい。遺構出土の遺物は総じて18世紀以降の所産で、17世紀後半に比定されるものは井戸9ほか僅かである。このことは、寛文中までに鍛冶屋町、元禄年中までに湊町が成立することと多少の食い違いを生じるが、調査地点が鍛冶屋町でも東端に湊町でも南端に位置することと関連があると思われ、町が次第に拡大していったことを示していると考えておきたい。

第2節 第37次調査

はじめに

第37次調査は、伊丹駅前市街地再開発事業に伴う発掘調査として実施したものである。この再開発事業地区内の発掘調査は、大手前女子大学藤井直正教授の有岡城跡調査委員会と市教育委員会が分担しながら進めており、今回の第37次調査を開始する時点では、大手前女子大学の調査団はすぐ北側で調査(第35次調査)を続行中であった。第35次調査では、南北方向に延びる有岡城の小堀が調査されており、その堀の延長上に今回の第37次調査範囲がある。

調査では、初めに8m×8mの調査区を設定して表土を掘り下げ、堀の位置を確認することにした。これにより、堀の東側の縁を検出することができたが、西側の縁は調査区の西側に沿って南北に通る現道の下に入り込むため、調査区を西側に1m拡張することにした。調査面積は90m²である。

遺 構

検出した遺構は、堀と井戸である。井戸は堀の西壁に位置し、堀が構築されるにあたり上部が破壊されている。従って新旧関係は、井戸→堀の順となる。

堀の規模は、幅5.3～5.5m・深さ1.55m～1.7mである。堀底は平坦に仕上げられ、壁面は直線的に立ち上がる。堀の断面形は逆台形状となる。壁の傾斜は西壁と東壁では異なり、東壁で53°・西壁で65°となる。壁には石垣等を用いた痕は認められず、当初から素堀であったことがわかった。



図17 第37次調査全体図

第2章 調査成果

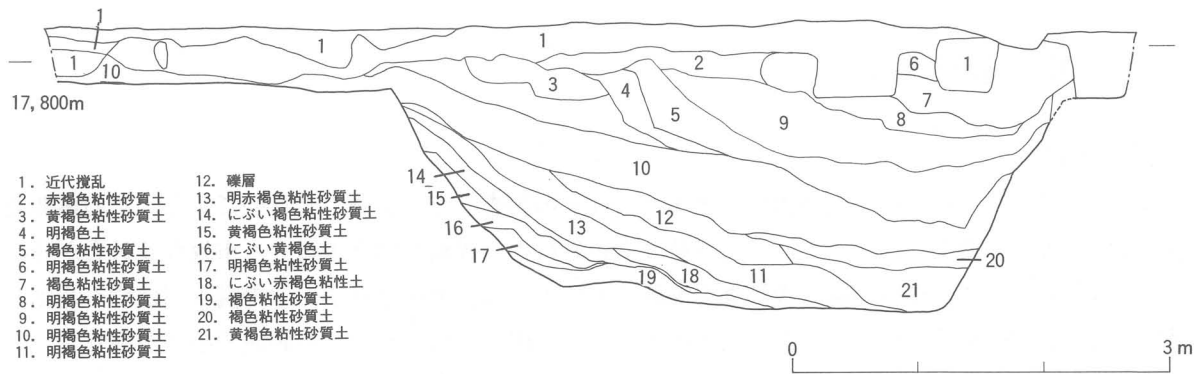


図18 堀跡土層断面図(南壁)

土層の堆積についてみると、堀底に泥の堆積はなく、水を張った痕は認められない。また、埋土の堆積では、土砂が東側から埋め戻された状況を示している。このことは、堀の埋の戻しにあたって堀の東側(内側)に築かれていた土塁を削って埋め戻したことを示している。

井戸 井戸は堀の埋土を取り除いた段階で、西壁においてその跡を発見した。規模は、東西1.1m、南北80cmの楕円形を呈し、深さは3.5mである。井戸の内部は袋状に広がり、最も広がった所では径が1.8mにもなる。これは、井戸の内壁が崩れた跡とみられ、井戸底付近では径70cmとなる。底付近には瓦が堆積していた。

遺物

堀(1・2・5) 堀から出土した遺物は、図示した遺物の他に写真図版(PL,24-12~14)に3点掲載している。1は明代の染付碗である。見込みには、二重圏線の中に連花文が描かれている。高台脇にも二重の圏線が巡る。釉調は全体に青味が強く、畳付は無釉となっている。輸入陶磁は他に3点出土しており、写真図版に掲載している。PL,24-11は青磁碗。胎土は灰色に近く、釉調は緑色が強い。高台には部分的に釉が垂れるが、無釉の部分が多い。PL,24-12は染付碗である。底部付近のみ出土したため全体の形は不明。腰部に唐草様の文様と二重圏線が、高台にも二重圏線が描かれている。見込み文様は、二重圏線内に描かれているが文様の内容は不明である。畳付は無釉となっている。PL,24-13は白磁の皿になると思われる。2は瀬戸・美濃焼灰釉皿。高さは低く、高台脇に一条の沈線が巡る。高縁部は強く外方に開き、内側に一条の沈線が巡る。内面は丸ノミ状工具によりソギ落としている。灰釉は全体にかかり、見込みには重ね積みの跡が残っている。堀の上層部から唐津焼胎土目の皿(5)が出土した。5は見込みに4ヶ所の目跡が残っている。内面には灰釉が掛けられているが、高台周辺は無釉。

井戸(6, PL,23-1~6・PL,24-10) 井戸からは羽釜と瓦が出土した。6(PL,23-1・2)は、土師質の羽釜である。鐔がやや上向きにつくられ、口縁部が内傾する特徴を有する。鐔の断面をみると、下方はやや垂れて、胴部付近において水平に仕上げられている。口縁部外面には段を有している。PL,23-3も同様の特徴を有している。PL,23-4は、鐔が水平に延び、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部外面には弱い段が残る。PL,24-10は瓦質の羽釜。鐔は僅かに上向きにつくられ、口縁部は短く内側する。口縁部外面には段がつくられている。胎土は灰白色を呈する。瓦質の羽釜については、図示しなかったが、この他に有脚のものなど数点が相伴している。瓦は多数出土したが、平瓦と丸瓦の破片が多く、それについては今回図示していない。ここでは、特徴ある瓦2点のみ説明しておく。

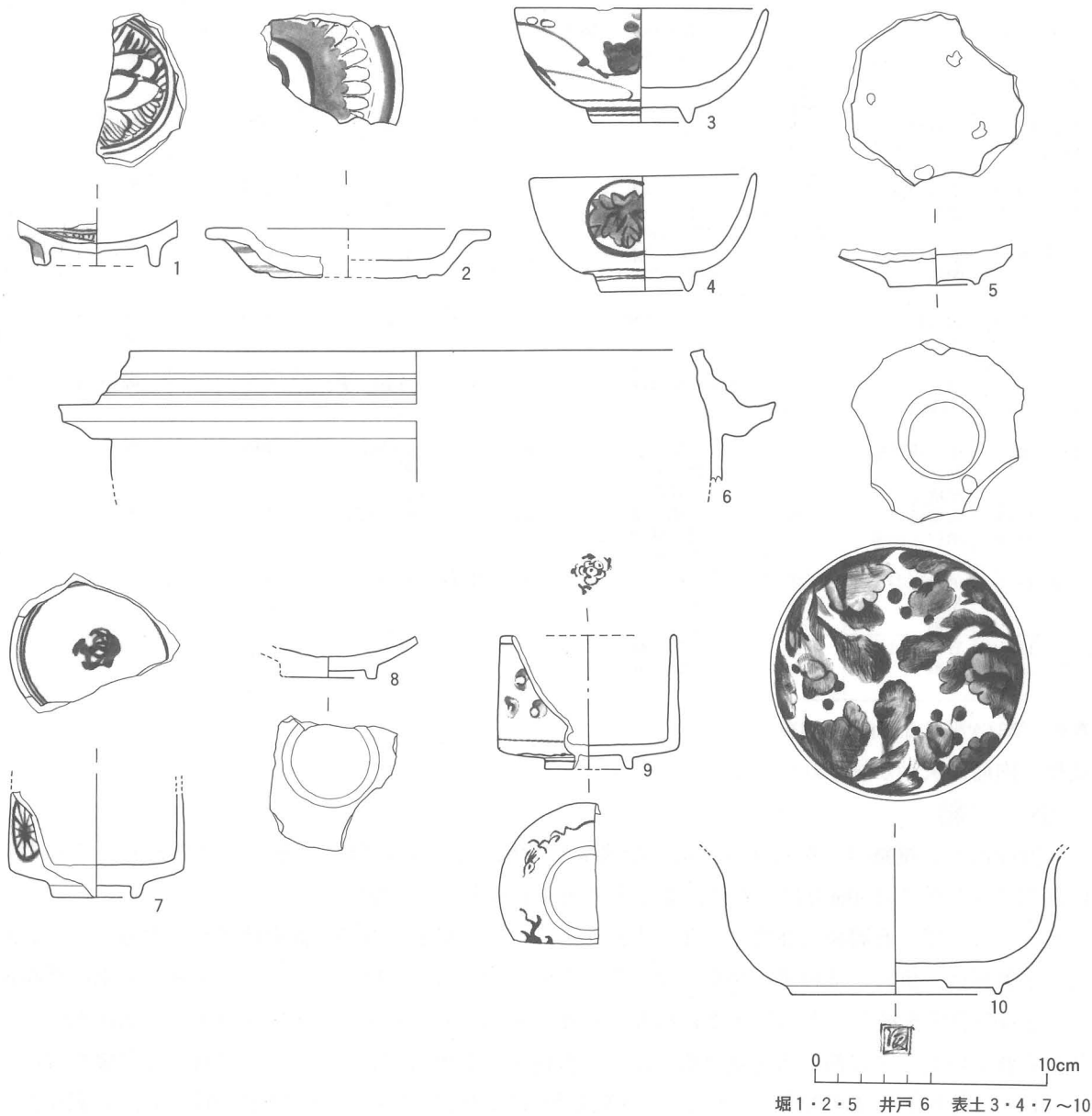


図19 第37次調査出土遺物(1)

PL,23-5は鬼瓦側縁部の破片である。この破片は、鬼瓦の左側下部とみられ、表面には側縁に沿って円形の押型文が施されている。瓦の厚さ4.7cmである。胎土は灰白色を呈している。PL,23-6は軒平瓦の一部である。菊花様の中心飾の一部が残っている。瓦の厚さは3cmと厚い。胎土は灰色を呈している。

その他の遺物(3・4・7~10) 表土(第1層)を掘削中に江戸時代の陶磁器が出土した。3と4は肥前の染付磁器碗。3は外面に草花文と高台脇に二重の圈線が描かれている。器厚は全体に厚手で、重い。釉は乳白色を呈している。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。4はコンニャク印判の手法で桐文が描かれている。高台脇の圈線が巡る。7と9は染付筒型碗。7は外面に菊花文、見込みに五弁花が描かれている。9は外面に丸文、底部に簡略化した龍が描かれている。内面の縁文様には斜格子文、見込みには五弁花が描かれる。10は青磁染付の鉢。外面には青磁釉が施され、見込みには一面に草花文が描かれる。高台は蛇ノ目凹型高台で、中心部に「渦福」銘が書かれている。8は瀬戸・美濃焼の碗。外面は

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 19-1 Pl. 24-13	染付磁器碗 明	器高 口径 底径 5.5	堀(下層)	Pl. 23-2	羽釜 (土師質)	不明	堀(井戸)
Fig. 19-2 Pl. 24-9	灰釉皿 瀬戸・美濃	器高 2.1 口径 (12.4) 底径 (6.8)	堀	Pl. 23-3	羽釜 (土師質)	不明	堀(井戸)
Fig. 19-3 Pl. 25-15	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 11.0 底径 4.4	第一層 外 草花文 蛇ノ目釉ハギ	Pl. 23-4	器釜 (土師質)	不明	堀(井戸)
Fig. 19-4	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 9.8 底径 4.0	第一層 外 印判手 桐文	Pl. 23-5	鬼瓦	不明	堀(井戸)
Fig. 19-5 Pl. 24-7	陶器皿 唐津	不明	堀(上層) 胎土目	Pl. 23-6	軒平瓦	不明	堀(井戸) 唐草文
Fig. 19-6 Pl. 23-1.2	羽釜 (土師質)	口径(24.2) 残存高5.6	堀(井戸)	Pl. 24-10	羽釜(瓦質)	不明	堀(上層)
Fig. 19-7	染付磁器筒 型碗 肥前	不明	第一層 外 菊文 五弁花	Pl. 24-11	青磁碗 明	不明	堀
Fig. 19-8 Pl. 24-8	陶器碗 瀬戸・美濃	不明	第一層 外 鉄釉 内 灰釉	Pl. 24-12	染付磁器碗 明	不明	堀(土層)
Fig. 19-9	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 5.8 口径 (7.6) 底径 38	第一層 五弁花	Pl. 24-14	磁器皿	不明	堀(土層)
Fig. 19-10 Pl. 25-16	青磁染付鉢 肥前	不明	第一層 「角福」銘あり				

表6 第37次調査出土遺物観察表

鉄釉、内面は灰釉が施されている。

小 結

今回検出した堀跡は、第27次及び第35次調査で検出されていたSF01の延長部にあたる。これまでに確認された長さは50mを超えるが、まだその両端を検出していない。

さて、ここで、有岡城主郭部の全体の構造から、今回検出した堀の位置を確認しておきたい。有岡城の主郭部は、伊丹台地の東縁がやや東に張した所に設けられている。よって、主郭部の東は標高差7～8mの急崖を成し、さらに崖下には幅広の堀(堀というより沼のようなものか。)と低湿地帯により守られていた。主郭部の西辺及び南辺には、台地上の平坦面が広がり、ここに侍町と町場が設けられていた。侍町と町場の配置については、「信長記」によれば、「城と町との間に侍町あり」と記述されており、主郭の西側に侍町→町場の順で配置されていたことが知られる。

今回検出された堀は、有岡城の内堀との距離60mにして平行する。主郭から近いこの場所は侍町に該当しており、侍町の中にもこうした中小の堀が巡らされていたことになる。主郭周辺部には、こうした堀が何本か確認されているが、昨年実施した第103次調査では、さらに西側に約35m隔てて平行する幅3mほどの小堀を検出した。これらがすべて内堀と平行すること、侍町に構築されていること、規模が3～5mであることなどから、侍町に家臣団の屋敷に沿うように中小の堀が配置されていたと推定される。

堀出土の遺物を見ると、輸入陶磁器の染付碗(1)は一乗谷から多く出土するもので、16世紀後半頃とされ、また、瀬戸・美濃焼の折縁菊皿(2)は、大窯期後半段階に焼かれたもので、やはり16世紀後半に比定される。堀に切られている井戸から出土した羽釜(6)は、堀より古く15世紀後半～16世前半頃の様相を呈している。また、堀上層部から出土した唐津焼きの胎土目の皿は、1580年以降に焼造されたもので、堀の埋没が廃城後に行われたことを示している。

第3節 第42次調査

はじめに

第42次調査は、国鉄伊丹駅前市街地再開発事業に伴う発掘調査として実施した。この調査が駅前再開発事業地内の最後の発掘調査である。

調査地点は、有岡城を東西に貫ぬく道路と日蓮宗本泉寺境台に挟まれた細長い場所で、調査範囲の東側は第36次調査として既に調査を完了している。第36次調査では複数の堀跡を検出している。一つは第23次のSF01に連絡すると思われる屈折した堀、もう一つは今回の調査範囲に向けて延びる小堀である。また、今回の調査範囲は、第37次調査などで検出した南北方向の堀の延長上に該当している。このように、第42次調査はこれまで発見された堀跡の行方を探る意味でも重要な調査となった。

調査区の規模は、東西15m・南北2.5～4.5mで、東側は堀のつながりを確認するため、既に調査を完了していた第36次調査範囲の一部を再度掘り返すことにした。調査範囲の周囲には歩行者用の仮設道路等が設置されており、また調査期間にも制約されていたためトレンチ調査となった。

遺構

検出した主な遺構は、ここを基点に北西方向に延びる堀状遺構である。調査範囲の中では、この遺構の南側の壁面しか検出できていないため幅は不明である。底面はほぼ平坦面を成し、深さは2～2.5mある。南側の壁は45度～60度の傾斜をもち、西に行くにつれて傾斜が緩やかになっている。また平面的には、若干弧を描くように西側に延びている。この堀状遺構は、第36次調査検出の堀を切って構築されており、方向・形状とも異なっている。また、第34次調査等で検出した堀は、ここまでのびていないことも判明した。

遺物

第42次調査の出土遺物は、その大半が堀の埋土中より出土した。しかし一部の遺物(36～62)について

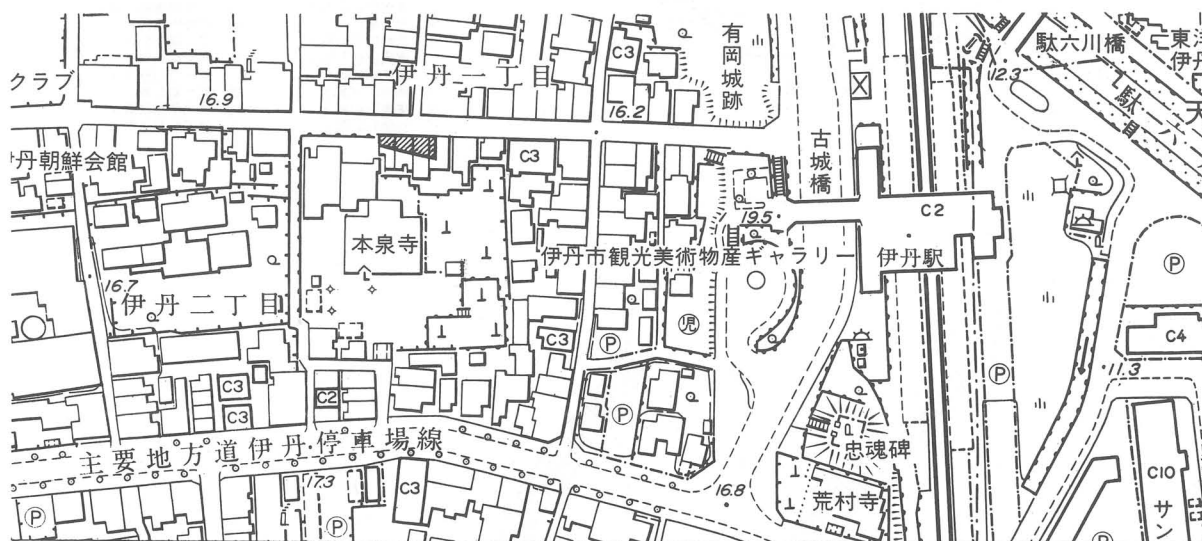


図20 調査区設定図(1/2500)

第2章 調査成果

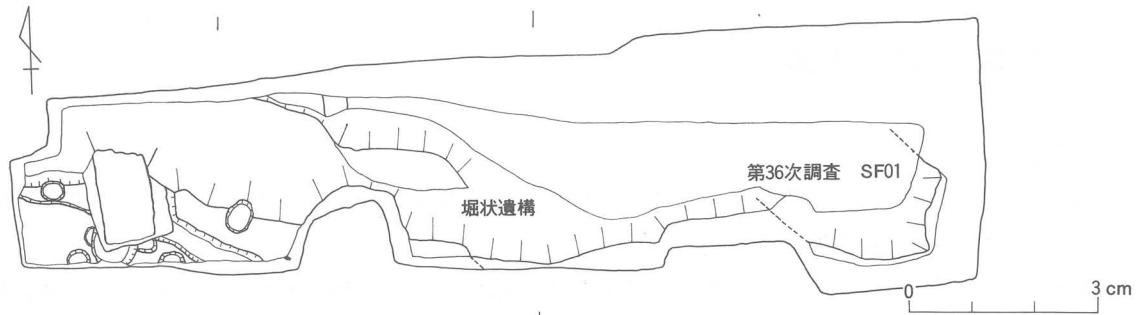


図21 第42次調査全体図

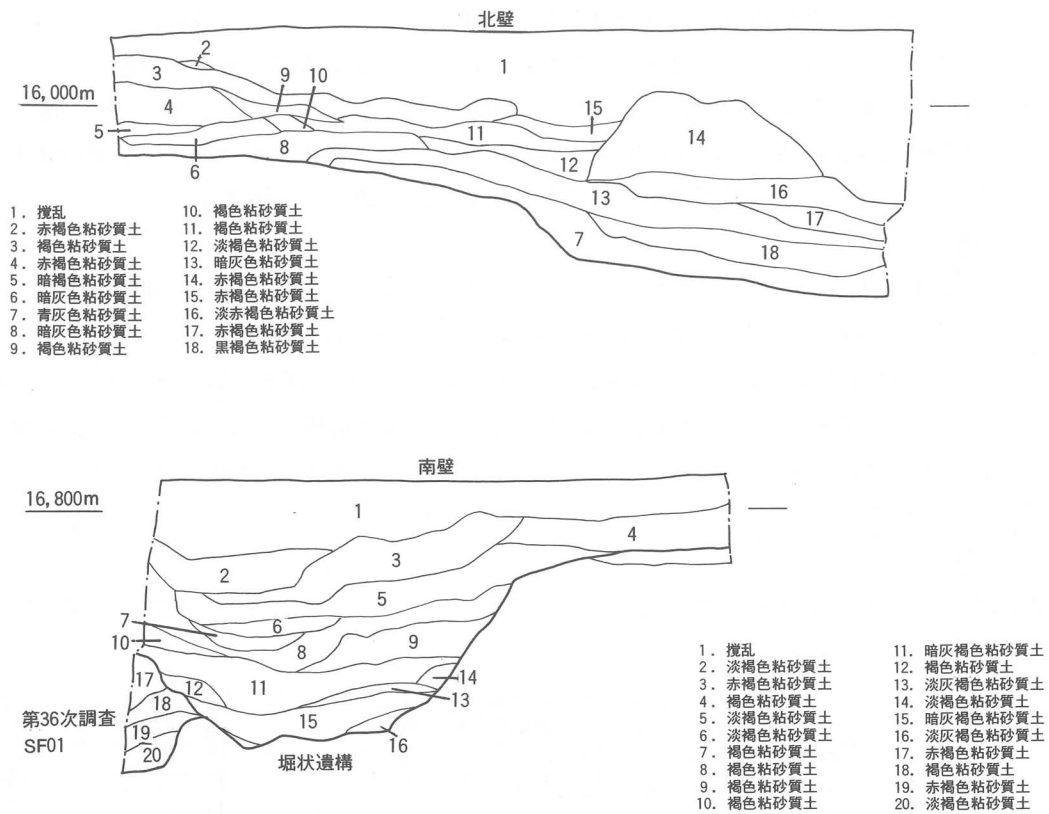


図22 土層断面図、エレベーション図

は、重機による堀埋土掘削時に排土と共に上がったもので、一応分けて掲載した。

土師質土器(1～18) 1～17は土師皿。ほとんどの土師皿は口縁部に煤の付着があり、灯明皿として使用されたことが判る。器形の特徴は、扁平な底部と緩やかに立ち上がる口縁部にある。いずれも外面に指頭圧痕が多く、凹凸を残している。内面は、撫でられて平滑な仕上がりとなっている。法量別にみると、口径7cm大の皿(1～5)と10cm大の皿(6～14・17)の2種に分けることができる。18は焙烙。口縁部は腰部から強く内傾する。底部は型造り。

陶器(19～23) 19・20・23は京焼写しの碗。19は見込みに楼閣山水門が描かれ、高台裏に刻印(不明)と円形削り出しがある。高台は露胎となる。20は見込みに鉄絵が描かれているが、破損しており文様は不明。19が黄色味のある胎土に、薄く釉が掛かるのに比べ、20の胎土は白く堅い焼き上がりとなり、釉がやや厚く全体に貫入がはいる。高台は露胎。23は体部上面に楼閣山水文が描かれる。高台裏には「木下弥」の刻印と円形削り出しがある。図示しなかったが、この他に呉器手の碗2点が相伴している。21は高台付の播鉢。22は唐津系の刷毛目碗。大振りの碗で、胎土は灰色を呈す。

磁器(24～30) 24は草花文碗。高台裏に銘款があるが、破損しているため不詳。25はコンニャク印判により紅葉と菊が描かれ、高台裏に「大明年製」の銘款がある。27はコンニャク印判により菊が描かれているが、かなり不鮮明である。28は網目文碗で、緑色がかった釉調となる。29はコンニャク印判により桐文が描かれる。器壁が厚が薄く、釉の発色も良好な上製品である。高台裏に「大明年製」の銘款がある。30は青磁の香炉。

瓦(31～35) 31は軒丸瓦。一圈の中に尾の長い三巴文が配される。32は鬼瓦。33・35は小型の軒丸瓦。33は左巻き三巴文で、35は右巻となる。34は鳥衾瓦。文様は左巻き三巴文。

次に説明する遺物は、堀の埋土のうち上層部を重機により掘削した時出土したものである。他の場所の遺物が混入した可能性があるともみて分けたが、堀出土の遺物と考えても差し支えはないと思われる。

土師質土器(36～45) 36～43は土師皿。口縁部に煤が付着する。器形は扁平なものが多く、口縁部は緩やかに立ち上がる。すべて手捏ね製。44は玩具の鍋。底部に足が付く。45は焼塩壺蓋。内面に布目痕が残る。

陶器(46～48) 46は唐津系皿。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。削り出し高台。47は唐津系の刷毛目碗。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。48は鉄釉を施した鍋。底部に足が付き、口縁部に把手が設けられている。

磁器(49～58) 49は小型の白磁碗。50は小型の染付碗。51は染付蓋。天井部につまみがある。52は、小さな桐文を一面に配す。53は青磁染付碗。54は端反りの白磁小碗。55と56は仏飯具。ともに白磁。57は染付を施した香炉。内面は無釉で砂が多量に付着する。58の口縁部内面の文様は、墨弾きの技法を用いて描いている。口鏽。

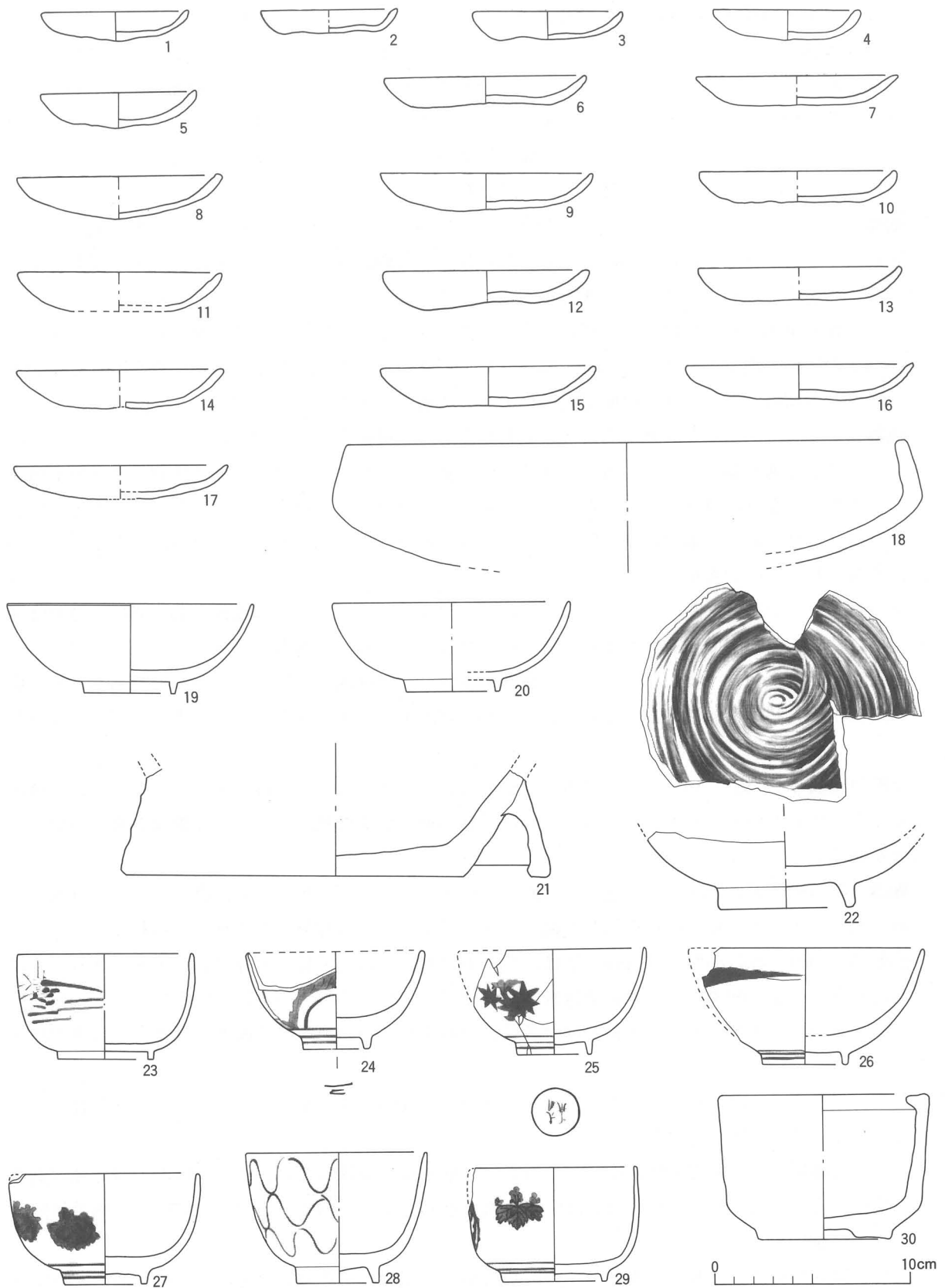
瓦(59～62) 59・60は軒丸瓦。59は左巻きの三巴文。周囲に珠文を12個配す。60は左巻き軒丸瓦。61は棟込瓦。62は小型の軒平瓦。

63～65は隣接する道路掘削時に出土したもので、堀と直接関係はない。63は土師皿。64は瀬戸美濃焼天目碗。高台周辺は無釉。高台は、高台内が深く削り込まれた内反り高台。65は唐津系刷毛目碗。

小 結

第42次調査で検出した堀状遺構は、調査区が狭小であるため全体の形状を明らかにすることはできなかった。しかし、深さが2mを越え、堀の可能性が強いが、とりあえず堀状遺構として捉え

第2章 調査成果



堀上層 1~16, 19・20, 23~30 堀下層 17・18・21・22

図23 第42次調査出土遺物(1)

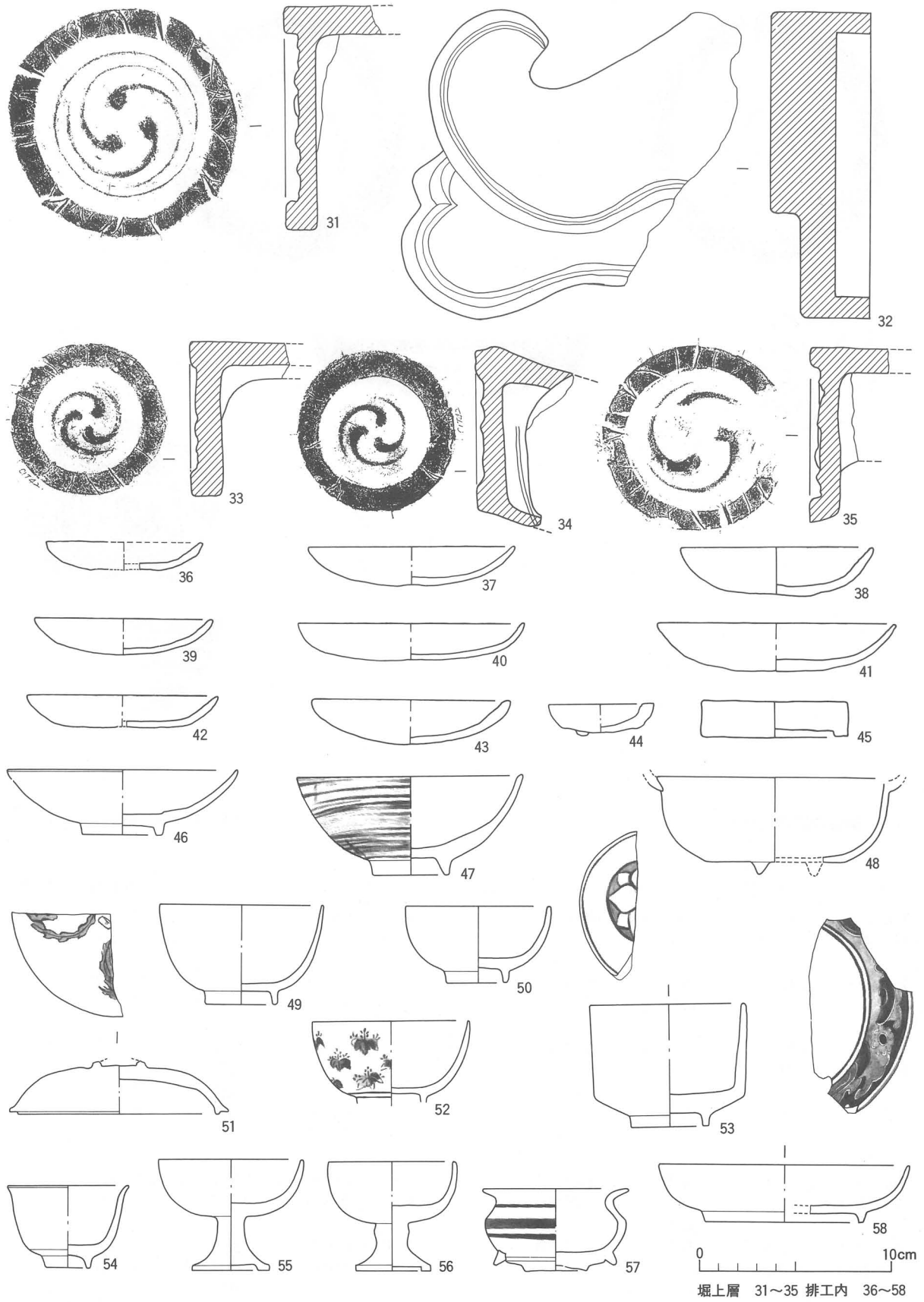


図24 第42次調査出土遺物(2)

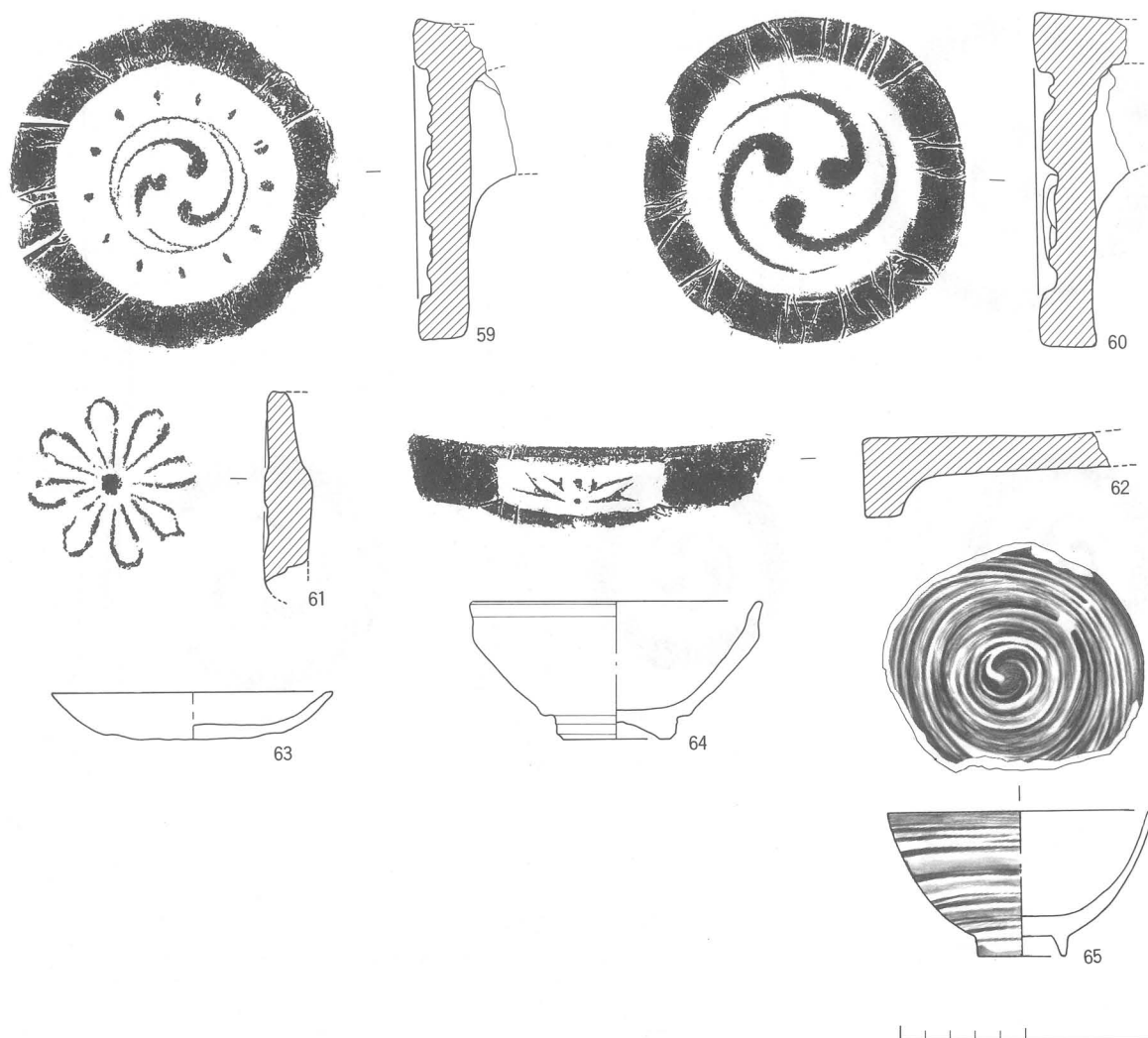


図25 第42次調査出土遺物(3)

排土内 59~62 東西道路下 63~65

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 23-1 Pl. 25-1	土師皿 (燈明皿)	器高 1.5 口径 7.6	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-7 Pl. 25-6	土師皿	器高 1.6 口径 (10.4)	堀(上層) 手捏ね
Fig. 23-2	土師皿 (燈明皿)	器高 1.2 口径 (7.0)	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-8	土師皿 (燈明皿)	器高 2.2 口径 (10.6)	堀(上層) 手捏ね
Fig. 23-3 Pl. 25-2	土師皿 (燈明皿)	器高 1.6 口径 7.5	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-9 Pl. 25-7	土師皿 (燈明皿)	器高 1.9 口径 10.9 底径 5.5	堀(上層) 手捏ね
Fig. 23-4 Pl. 25-3	土師皿	器高 1.6 口径 7.8	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-10	土師皿 (燈明皿)	器高 1.6 口径 (10.2)	堀(上層) 手捏ね
Fig. 23-5 Pl. 25-4	土師皿 (燈明皿)	器高 2.1 口径 10.4 底径 7.0	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-11 Pl. 25-8	土師皿 (燈明皿)	器高 (2.0) 口径 (10.5)	堀(上層) 手捏ね
Fig. 23-6 Pl. 25-5	土師皿 (燈明皿)	器高 1.5 口径 10.4 底径 7.0	堀(上層) 手捏ね	Fig. 23-12	土師皿 (燈明皿)	器高 2.1 口径 10.6 底径 5.6	堀(上層) 手捏ね

表7 第42次調査出土遺物観察表(1)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 23-13	土師皿 (燈明皿)	器高 1.7 口径 (10.4)	堀(上層) 手捏ね	Fig. 24-32	棟端飾瓦	厚 3.3	堀(上層)
Fig. 23-14 Pl. 25-9	土師皿 (燈明皿)	器高 (2.1) 口径 (10.7)	堀(上層) 手捏ね	Fig. 24-33 Pl. 26-21	軒丸瓦	径 8.2 厚 1.1	堀(上層) 三巴文
Fig. 23-15 Pl. 25-10	土師皿 (燈明皿)	器高 2.1 口径 11.0 底径 6.6	堀(上層) 手捏ね	Fig. 24-34 Pl. 26-22	隅軒丸瓦	径 8.4 厚 1.0	堀(上層) 三巴文
Fig. 23-16 Fig. 25-11	土師皿	器高 1.8 口径 11.7	堀(上層) 手捏ね	Fig. 24-35 Pl. 26-23	軒丸瓦	径 9.2 厚 1.1	堀(上層) 三巴文
Fig. 23-17	土師皿	器高 (1.8) 口径 (11.0)	堀(下層) 手捏ね	Fig. 24-36	土師皿	器高 (1.5) 口径 (8.2)	排土内 手捏ね
Fig. 23-18 Pl. 25-12	焙烙	器高 不明 口径 (28.6)	堀(下層)	Fig. 24-37	土師皿 (燈明皿)	器高 (2.1) 口径 (10.8) 底径 (3.5)	排土内 手捏ね
Fig. 23-19 Pl. 25-13	陶器碗 京焼写し	器高 4.6 口径 12.7 底径 4.7	堀(上層) 内 山水文	Fig. 24-38 Pl. 27-24	土師皿 (燈明皿)	器高 2.5 口径 10.1	排土内 手捏ね
Fig. 23-20	陶器碗 京焼写し	器高 4.6 口径 (12.2) 底径 (4.8)	堀(上層)	Fig. 24-39	土師皿	器高 1.9 口径 (9.4)	排土内 手捏ね
Fig. 23-21 Pl. 25-14	播鉢 丹波	器高 口径 底径 (21.5)	堀(下層) 高台付	Fig. 24-40	土師皿	器高 1.9 口径 (11.8)	排土内 手捏ね
Fig. 23-22 Pl. 26-15	陶器碗 唐津	不明	堀(下層) 刷毛目	Fig. 24-41	土師皿 (燈明皿)	器高 2.5 口径 (12.5)	排土内 手捏ね
Fig. 23-23 Pl. 26-16	陶器碗 京焼写し	器高 5.4 口径 (9.1) 底径 (4.9)	堀(上層) 外 山水文 「木下弥」銘あり	Fig. 24-42	土師皿	器高 (1.7) 口径 (10.0)	排土内 手捏ね
Fig. 23-24	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 (9.2) 底径 (3.4)	堀(上層) 草花文	Fig. 24-43 Pl. 27-25	土師皿 (燈明皿)	器高 2.3 口径 (10.4) 底径 (2.1)	排土内 手捏ね
Fig. 23-25 Pl. 26-17	染付磁器碗 肥前	器高 5.4 口径 (9.7) 底径 3.8	堀(上層) 外 紅葉 印判手 「大明年製」銘あり	Fig. 24-44	土人形(鍋)	器高 1.7 口径 (5.5)	排土内 型作
Fig. 23-26	染付磁器碗 肥前	器高 6.0 口径 (12.1) 底径 4.4	堀(上層)	Fig. 24-45	焼塩壺蓋	器高 1.9 口径 7.6	排土内 内 布目
Fig. 23-27	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 9.8 底径 4.2	堀(上層) 外 印判手	Fig. 24-46	陶器碗	器高 3.4 口径 (12.0) 底径 (4.2)	排土内
Fig. 23-28 Pl. 26-18	染付磁器碗 肥前	器高 6.7 口径 (9.3) 底径 (4.2)	堀(最上層) 外 網目文	Fig. 24-47 Pl. 27-26	陶器碗 唐津	器高 5.2 口径 (11.8) 底径 (4.0)	排土内 外 刷毛目
Fig. 23-29 Pl. 26-19	染付磁器碗 肥前	器高 5.9 口径 8.6 底径 5.3	堀(上層) 外 桐文 印判手 「大明年製」銘あり	Fig. 24-48	土鍋	器高 5.1 口径 (12.1) 底径 7.2	排土内
Fig. 23-30 Pl. 26-20	青磁香炉 肥前	器高 7.4 口径 (10.8) 底径 (6.8)	堀(上層)	Fig. 24-49	白磁碗 肥前	器高 5.2 口径 (8.6) 底径 (3.7)	排土内
Fig. 23-31	軒丸瓦	径 11.3 厚 1.5	堀(上層) 三巴文	Fig. 24-50 Pl. 27-27	染付磁器碗 肥前	器高 4.0 口径 7.6 底径 3.2	排土内 外 草花文

表8 第42次調査出土遺物観察表(2)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 24-51 Pl. 27-28	染付磁器蓋 肥前	器高 2.7 口径 (11.4) 底径 (2.7)	排土内	Fig. 25-59 Pl. 27-34	軒丸瓦	径 13.4 厚 2.0	排土内 三巴文
Fig. 24-52 Pl. 27-28	染付磁器碗 肥前	口径 (8.2)	排土内 外 桐文。 「大明年製」銘あり	Fig. 25-60 Pl. 27-35	軒丸瓦	径 13.3 厚 2.2	排土内 三巴文
Fig. 24-53	青磁器染付筒 型碗 肥前	器高 6.4 口径 (8.2) 底径 (4.0)	排土内	Fig. 25-61 Pl. 27-36	棟込瓦	径 8.3 厚 1.9	排土内 菊文
Fig. 24-54 Pl. 27-29	白磁碗 肥前	器高 4.3 口径 (6.3) 底径 (2.3)	排土内	Fig. 25-62 Pl. 28-37	軒平瓦	幅 14.6 厚 1.4	排土内 唐草文
Fig. 24-55 Pl. 27-30	仏飯具 (磁器) 肥前	器高 5.8 口径 (7.6) 底径 (4.0)	排土内	Fig. 25-63	土師皿 (燈明皿)	器高 2.0 口径 (11.3) 底径 (5.0)	道路敷下 手捏ね
Fig. 24-56 Pl. 27-32	仏飯具 (磁器) 肥前	器高 5.7 口径 (6.7) 底径 (3.9)	排土内	Fig. 25-64 Pl. 28-38	天目碗 瀬戸・美濃	器高 5.5 口径 (11.7) 底径 (4.3)	道路敷下 鉄釉
Fig. 24-57 Pl. 27-31	香炉 (磁器) 肥前	器高 4.3 口径 (7.6) 底径 (3.3)	排土内	Fig. 25-65 Pl. 28-39	陶器碗 唐津	器高 5.8 口径 (10.5) 底径 (3.5)	道路敷下 刷毛目
Fig. 24-58 Pl. 27-33	染付磁器皿 肥前	器高 3.0 口径 (3.1) 底径 (8.2)	排土内 口錆				

表9 第42次調査出土遺物観察表(3)

ておきたい。堀状遺構と周辺の堀との関係については、東側の第36次調査検出のSF01とは切り合い関係にあり、堀状遺構が新しいことが判っている。また、第37次調査検出の堀との関係については、堀が堀状遺構を超えて、南側に伸びていないことが判明している。

有岡城主郭部周辺では、これまでの長年にわたる発掘調査により、内堀の他多数の中小の堀を検出している(図41)。これらの堀には一つの共通した方向性があり、それは現在の地割(江戸時代以前からの地割)と一致する。しかし、今回検出した堀状遺構は地割の方向とズレがあり、同じ目的で築かれたとは考え難い。また、出土遺物についてみても、他の堀が有岡城廃城(天正七年)頃の遺物を出土するのに対し、今回検出した堀状遺構は江戸時代の遺物を出土しており、この点についても明確な違いが認められる。

堀状遺構より出土した遺物には、様々な器種の陶磁器がある。遺物の時期については、コンニャク印判文のある肥前磁器(27・29)、京焼写しの陶器碗(19・20・23)、唐津焼刷毛目文碗(22・47)などからみて、17世紀後半～18世紀前半頃と考えられよう。

第4節 第44次調査

はじめに

第44次調査は、市立伊丹美術館の庭園工事に先立って実施したものである。発掘調査に際しては、村川行弘教授(大阪経済法科大学)を団長とする宮ノ前地区埋蔵文化財調査団を編成した。

当該調査地点は、有岡城惣構の中にあつて、当時の町場に該当する。ただ、町場を南北に通る大通りには直接面せず、家一軒ほど内に入った所である。江戸時代になると、この一帯には、大きな敷地を使って酒蔵が建てられるようになり、当調査地点にもその頃の酒蔵がつい最近まで残っていた。

この酒蔵は、昭和59年までは岡田家の所有で、大手柄酒造株式会社が借り受け清酒を醸造していた。酒蔵では、精米から醸造・樽詰めまでのすべて工程を行う施設が必要で、それらの建物が工程順に従って配置されている。この旧岡田家所有の酒蔵も同様である。各建物の配置と調査範囲の関係を示したものが図27である。南側の店舗が正面となり、洗場・釜屋・糶室・臼屋(精米所)などが並び、その奥に大蔵と澄し蔵がある。今回の調査範囲は、大蔵の場所に相当する。因に、店舗は延宝二年(1674)の建立で、その奥の酒蔵は遅れて17世紀末頃の建立とされる。店舗と奥の酒蔵は、酒蔵としては全国でも古く、良くその形態を残していることが認められ、平成4年1月21日付で国の重要文化財に指定された。

大蔵の構造は切妻造、本瓦葺、妻入り、二階建てで、規模は、明治19年10月付の「酒蔵場絵図面届出書写」によれば、間口9間、奥行16間半とある。建立時期は明確ではないが、このような大規模な千石造りの蔵が建てられる江戸後期の建立とみられる。

遺 構

検出された遺構には、大蔵の礎石(根石)と井戸・竈・溝・瓦溜り・土坑などがある。この内、瓦溜りは、火災による焼け瓦などを埋め込んだもので、瓦の他に赤く焼けた壁土や陶磁器などが処分された遺構である。大蔵の礎石1と2は、この瓦溜り1を掘り込んで構築されている。このことから、検

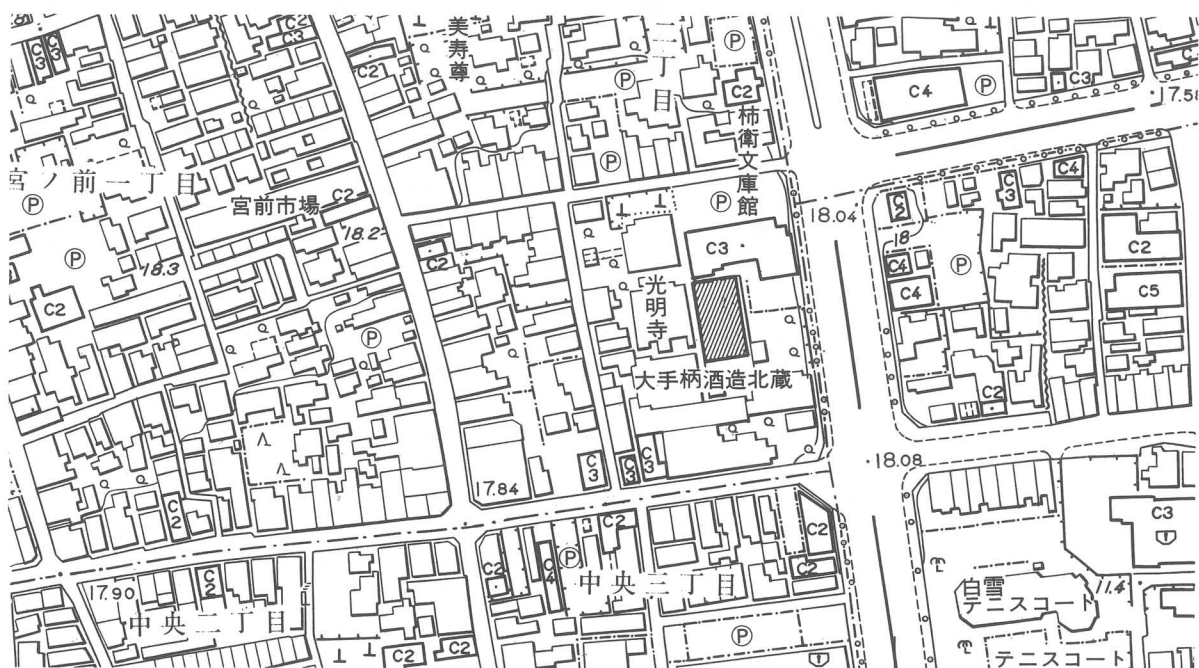


図26 調査区設定図(1/2500)

出した遺構の時期は、火災以前と火災後の2時期に大別できる。以下、各遺構の説明をする。

大蔵(図29) 大蔵の遺構は、礎石1~13と礎石1と9の間を結ぶ石列から成る。礎石は、桁行方向の1~5、6~8、9~13の3列に配置され、各列の間隔は5.92m(3間)の等間隔となる。また、各列の礎石間は、西列の3と4、東列の11と12、中央列の7と8が5.92m(3間)で、西列と東列のその

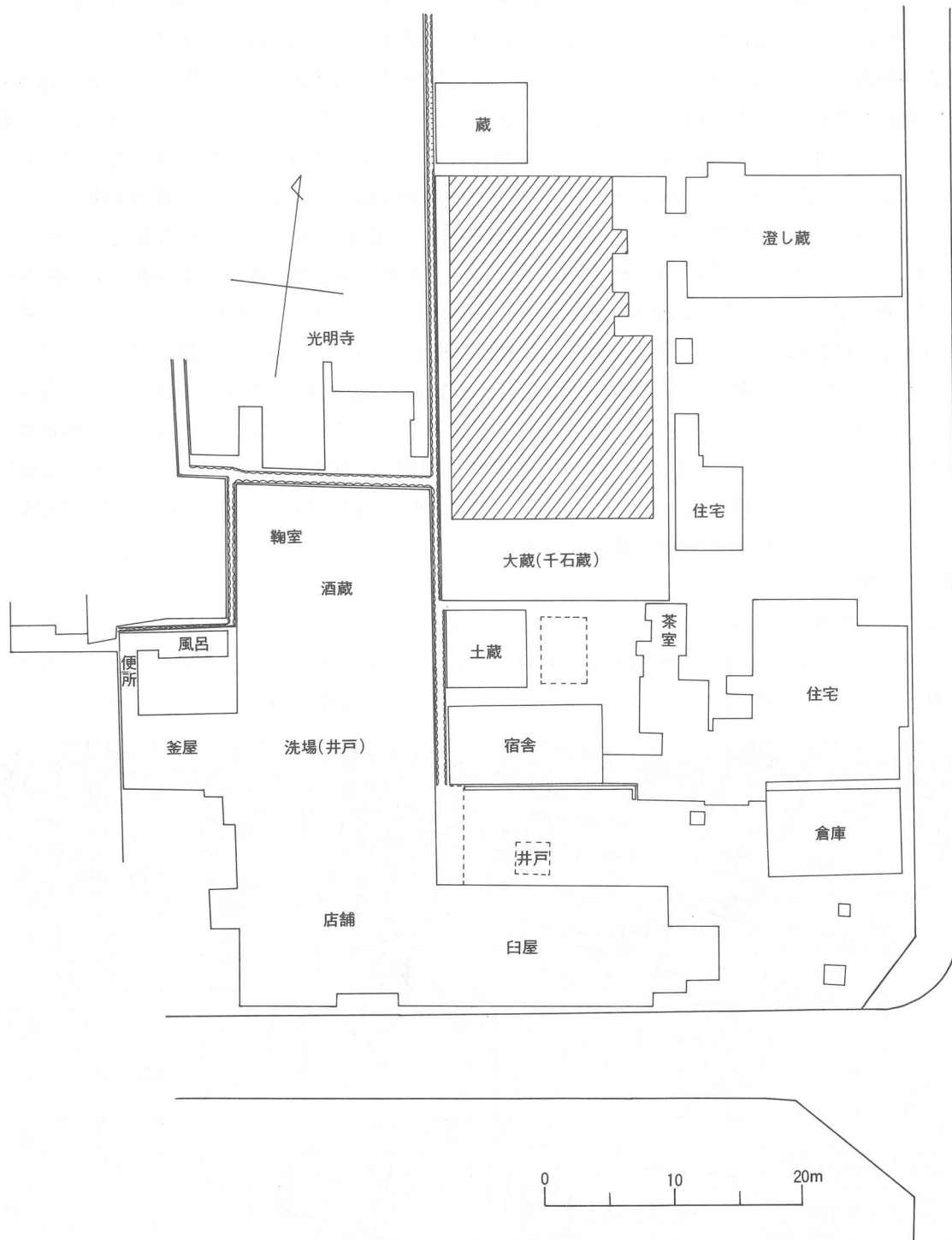


図27 酒蔵建物配置図(斜線部分が調査範囲)

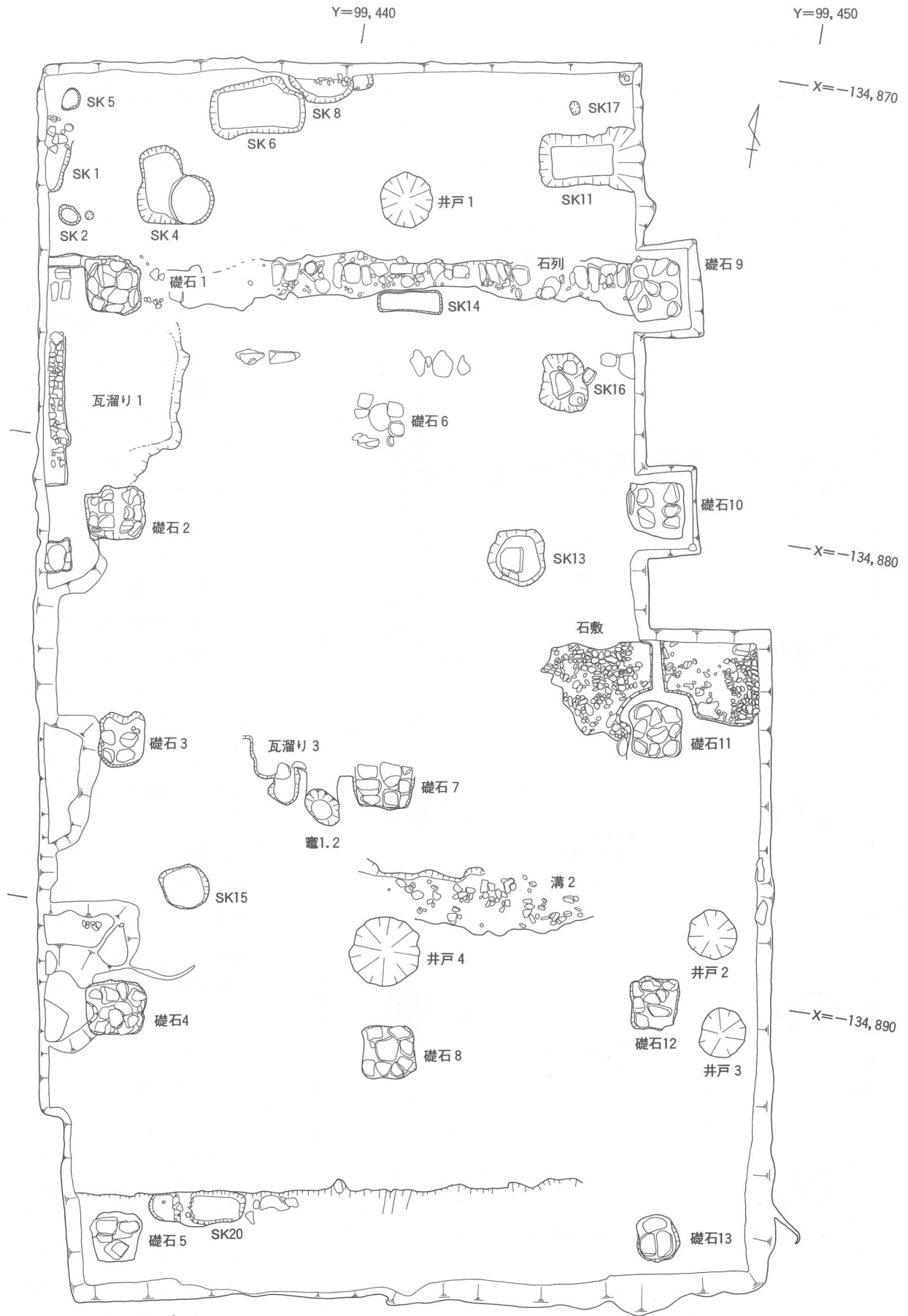


図28 第44次調査全体図

他の礎石間は4.91m(2.5間)である。検出した礎石は上部を失っており、下部の根石のみとなっている。根石は1.2m四方の掘方に、40~50cm大の河原石を数段積んだ構造となっている。

大蔵の規模が、梁行17.7m(9間)、桁行32.5m(16間半)であったことから、礎石列は南にあと2間づつ存在することになり、東西方向には各1間分の広庇が設けられていたと考えられる。

井戸 井戸は4基検出された。その内の井戸2~4は酒蔵内に位置するが、出土遺物からみて酒蔵の建立以前に埋没している。各井戸の規模は、井戸1が径1.2m、井戸2が径1.2m、井戸3が径1m、

井戸4が径1.5mである。井戸3は上部が瓦積であるが、他は素堀となっている。

瓦溜り 瓦溜りは4箇所検出された。瓦溜り出土の瓦はすべて焼瓦で、焼けた壁土と共に埋め込まれており、火災後に整理された跡と考えられる。

遺物

第44次調査において出土した遺物の総量は、コンテナバットに90箱ほどになる。その内、報告書に図示した遺物は154点である。以下、遺構毎に遺物の説明を加えておきたい。

SK01(1・2) 1は陶器皿。見込に溝状の渦巻文を配し、内面に長石釉を、外面に灰釉を施す。2は染付磁器蓋。外面に桜を描いている。

SK02(3) 3は軒丸瓦。一圈の中に左巻の三巴文を周囲には16個の珠文を配す。

SK04(4~9) 4は土師皿。5は青磁皿。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、高台は無釉。6は染付磁器の小碗。内外面に横縞文を描く。7は唐草文を配した染付磁器碗。8は楼閣山水文、9は

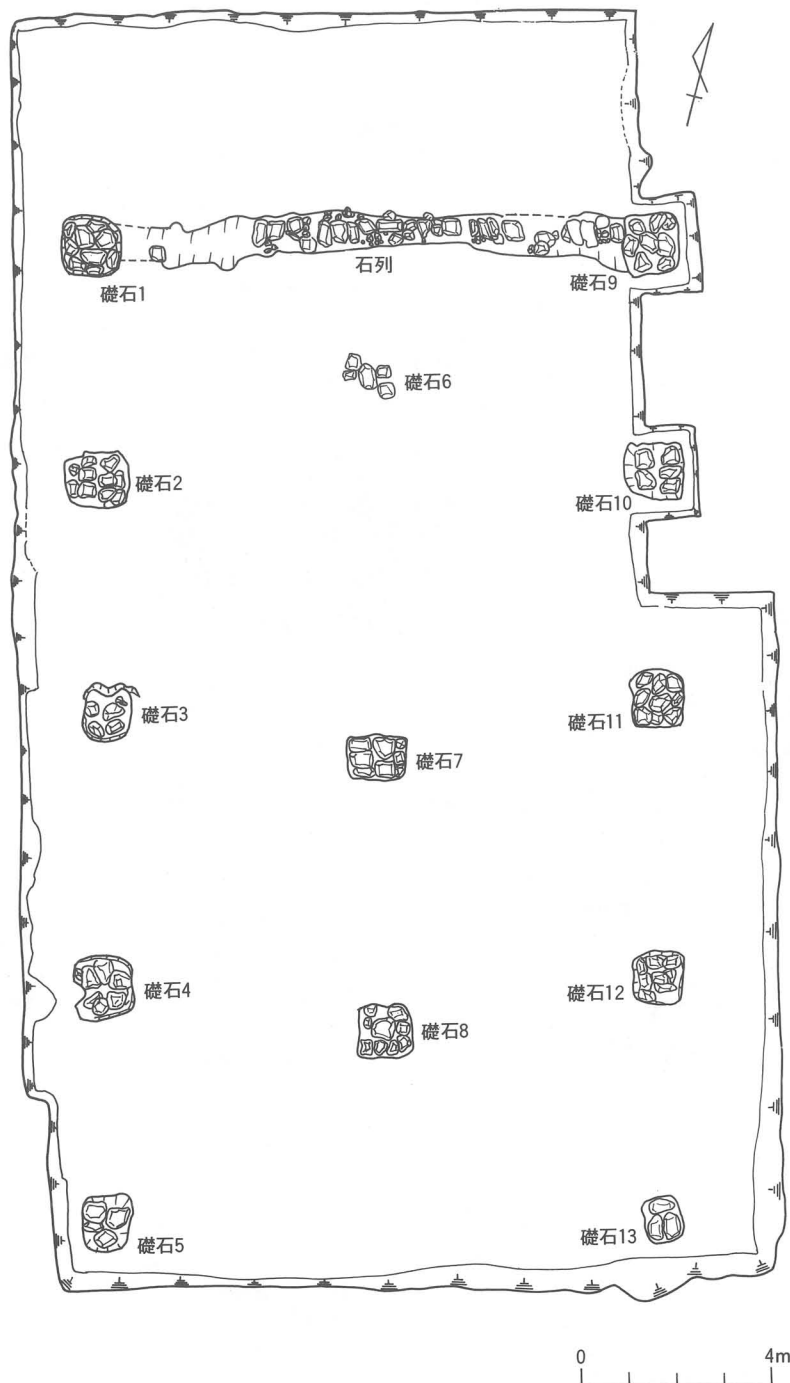


図29 大蔵跡礎石配置図

梅樹文を描いた磁器碗。

SK06(10~20) 10は土師皿。口径13cmの大型品。11は柿釉を施した土師皿。底部に糸切り痕を残すロクロ製。12は「難波浄因」銘の刻印のある焼塩壺。内面に布目痕が残る。13は鉄釉を施した蓋物。14・18は染付磁器蓋。14は草花文、18は福寿字文を描く。15は筒型碗、16は染付磁器皿、ともに見込みに五弁花を描く。17・19は草花文を描いた染付磁器碗。20は土面子。

SK11(21~43) 21は灰釉を施した灯明受皿。22は柿釉を施した土師質の灯明受皿。23・24・26は染付磁器蓋。23は山水文、24は線画の中を濃みで描いた龍文、26は草花文を配している。25は染付磁器皿の粗製品。呉須は黒ずんで発色は極めて悪い。見込みに五弁花を描く。27は陶器蓋。28は磁器蓋。外面に瓔珞文を描く。29は筒型碗。30は端反りの白磁碗。31は口縁部を緑釉、その他に灰釉を施した信楽焼陶器碗。高台は無釉。32は土師質の紅皿。型造りで内面のみ施釉している。33・34は笹文を描いた染付磁器碗。35~38は染付磁器碗。35は掬文、36はコンニャク印判により菊文を描く。37は広東碗。38は牡丹文を描いた端反碗。39・41は染付磁器皿。39は蛇ノ目凹形高台。呉須の発色は濃紺色を呈す。40は染付磁器鉢。内面には草花文、外面に唐草文を描く。42は竈を型取った土製玩具。43は波状文の軒平瓦である。

SK16(44~46) 44は素焼きのミニチュアの花瓶。45・46は丸瓦。45は二次的に焼け赤化している。

SK18(47~51) 47~49・51は軒丸瓦。47・48は三巴文の部が長く延びるが、互いに接していない。51は尾部の先端が互いに接して一圈を成す。49は一圈の中に三巴文が配される。50は棟を飾る棟込瓦である。文様は8弁の菊花文。

SK28(52) 52は瀬戸・美濃焼の飴釉を施した油さし。内面には薄く灰釉を施すが、高台部分は無釉。

SK29(53) 53は唐津焼系の刷毛目碗。内面は縮緬刷毛を施している。口縁部は一担外反しながら、その先が内弯気味に屈曲する。現川焼に類品がある。

SK33(54~56) 54・55は手捏製土師皿。56はコンニャク印判手の染付磁器碗。

SK47(57) 57は玩具の一種と思われる。文机を型取ったもので、机上には左から手習いの本と文鎮を乗せた紙、その右には硯箱を置いている。硯箱の中には、硯・墨・筆・水滴が詳しく描かれている。

井戸 2(58~60) 58~60は染付磁器。58は内面に斜格子文を描いた皿。胎土は厚く、呉須は緑色に発色している。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。59は筒型碗。60は丸文を描く。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。

井戸 3(61~73) 61~64は土師皿。61は柿釉を施したロクロ製。62~64は手捏ね製の大型品。いずれも灯明皿とし使用されたものであるが、63と64は使用頻度が多かったと見えて、口縁部には煤が厚く付着する。これら大型品は、酒蔵内で使用されたものと考えられる。65・66・70は陶器蓋。65は鍍釉、66は鉄釉が施される。70は長石釉の上に鉄絵が描かれている。67は堺焼の播鉢。68・69・71~73は染付磁器。68・69は筒型碗。ともに見込みには五弁花を描く。71は蓋、72は二重綱目文碗である。

井戸 4(74~84) 74は土師皿。75は輪高台の信楽焼の陶器皿。高台を除いて灰釉が施される。76は鉄釉の陶器蓋。77は口縁部が直線的に開く白磁碗。器厚は厚く、純調な仕上がりとなっている。78は紅皿。79~81は内面にに蔓草文を描いた染付磁器皿。いずれも蛇ノ目釉剥ぎ。82~84は染付磁器碗。82・83は丸文と五弁花を描いている。ともに高台裏に銘款がある。84はハの字状高台の染付磁器碗。

溝 1(85・86) 85は青磁皿。高台は無釉で見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。86は均整唐草文軒平瓦。

溝 3(87) 87は三巴文軒丸瓦。巴文の頭部は小さく、尾部は細長く延びる。珠文は13個である。

瓦溜り 1(93~101) 93は丸瓦。101は隅丸瓦。94・95・100は軒丸瓦。94は左巻三巴文、珠文は16

個である。95は圏線の中に尾の短い左巻三巴文が配される。珠文は16個となる。100は尾の長い左巻三巴文。珠文は16個である。98は陶器皿。高台を除いて灰釉がかけられ、皿の四隅に鉄絵が描かれる。削り出し高台。瀬戸・美濃焼と考えられる。96は青磁皿。口縁が緩やかに外反する。全釉。97は白磁碗。細かな貫入がみられる。99は染付磁器碗。高台脇に三重の圏線、高台裏に一重の圏線が描かれている。

瓦溜り 2 (92・102) 92は丸瓦。102は陶器碗。高台を除いて灰釉が施されている。削り出し高台。

瓦溜り 3 (88・103～111)は88は土師皿。手捏ね製。外面には指頭圧痕が残り、口縁部と内面は撫でられている。103～111はすべて軒丸瓦。103は口径14.1cmとやや小振りで、左巻三巴文の周囲に一圈を巡らす。104～111は左巻三巴文で、頭部が大きく、尾部は長く伸びるが互いに接していない。珠文の数は、103・104・106・107が16個、105・111が15個、109が12個となる。

瓦溜り 4 (112) 112は左巻三巴文軒丸瓦。珠文は16個である。

遺構外出土遺物(113～154)

土師質土器 (113・114・116～118) 113は柿釉を施した灯明皿。底面に糸切り痕の残るロクロ成形。114はロクロ成形の土師皿。底部に篋切りの痕が残る。116は柿釉の灯明受皿。ロクロ成形。117・118は焼塩壺蓋。内面に布目が残る。

陶器 (119～121・123・138) 119は堺焼の播鉢。9本単位の播目が施されている。120は瀬戸・美濃焼の水甕。外面には、流水文が彫られ、高台周辺部を除いて灰釉が掛けられる。また、口縁部から鉄釉が流し掛けされている。121は常滑焼の鉄釉の壺。外面には鉄釉の上に口縁部から底部にかけて、白濁釉が流れる。内面には灰釉が掛けられている。123は唐津焼の碗。138は鉄釉を上面のみに掛けた蓋である。

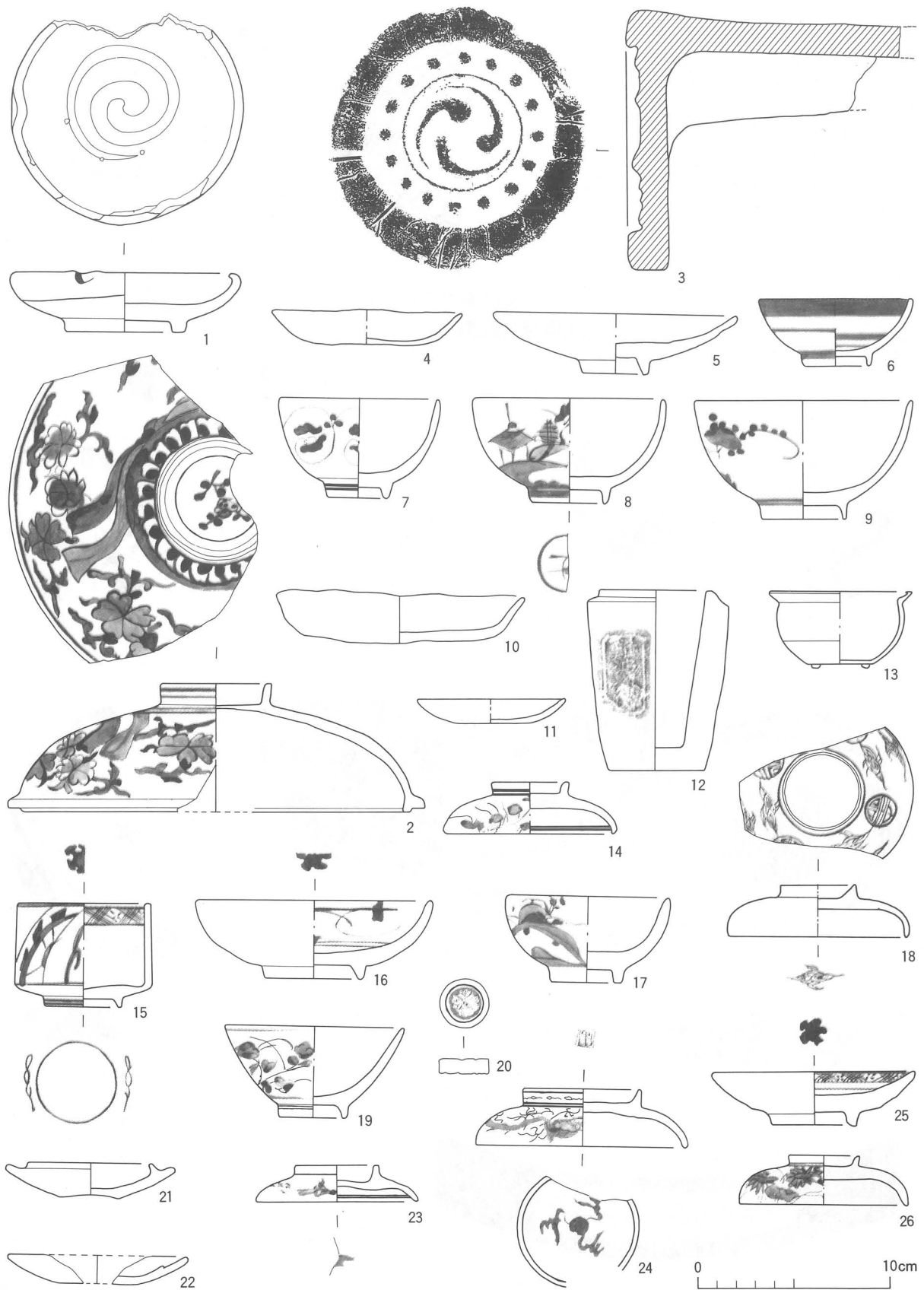
磁器 (115・122・124～140) 122・124～128・140は染付磁器皿。122は内面に折れ松葉文を描いている。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。高台は無釉。124は外面に唐唐文、見込みに五弁花を描く。高台裏に銘款がある。125・126は内面に草花文、127は見込みに菊文、128は松文を描いている。129は紅皿。高台周辺は無釉である。130は外面に松の枝を描いた小杯。131は外面に雪輪文を描いた筒型碗。見込みに五弁花を配している。132・133は広東碗。132の体部が直線的に開くの比べ、133は若干腰が張っている。132には粗い貫入が入る。134～137は染付磁器碗。134は腰が張り、口縁部が垂直に立ち上がる。外面には菖蒲文が連続して描かれる。135はコンニャク印判によって桐文を描いている。釉調は緑掛かっている。136は草花文を描く。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。137は花鳥文を描いた薄手の碗。口縁部が僅かに外反している。139は、染付碗の蓋。文様は細線描きで描かれている。

土人形・玩具 (141～144) 141は型合せで造られた童子。142は僧呂であろうか。ともに手捻り製。143は狗犬。型合せで造られている。頭・首・尾は緑釉が掛けられ、その他は灰釉掛けとなる。144は壺のミニチュア。ロクロ成形。口縁部から肩部にかけて透明釉が掛けられている。

瓦 (145～154) 146は棟端飾瓦に彫られた狗犬。145～148・150～154は軒丸瓦。いずれも左巻三巴文であるが、珠文の数は、145・148・151が13個、150・152・154が15個、153が16個となる。

小 結

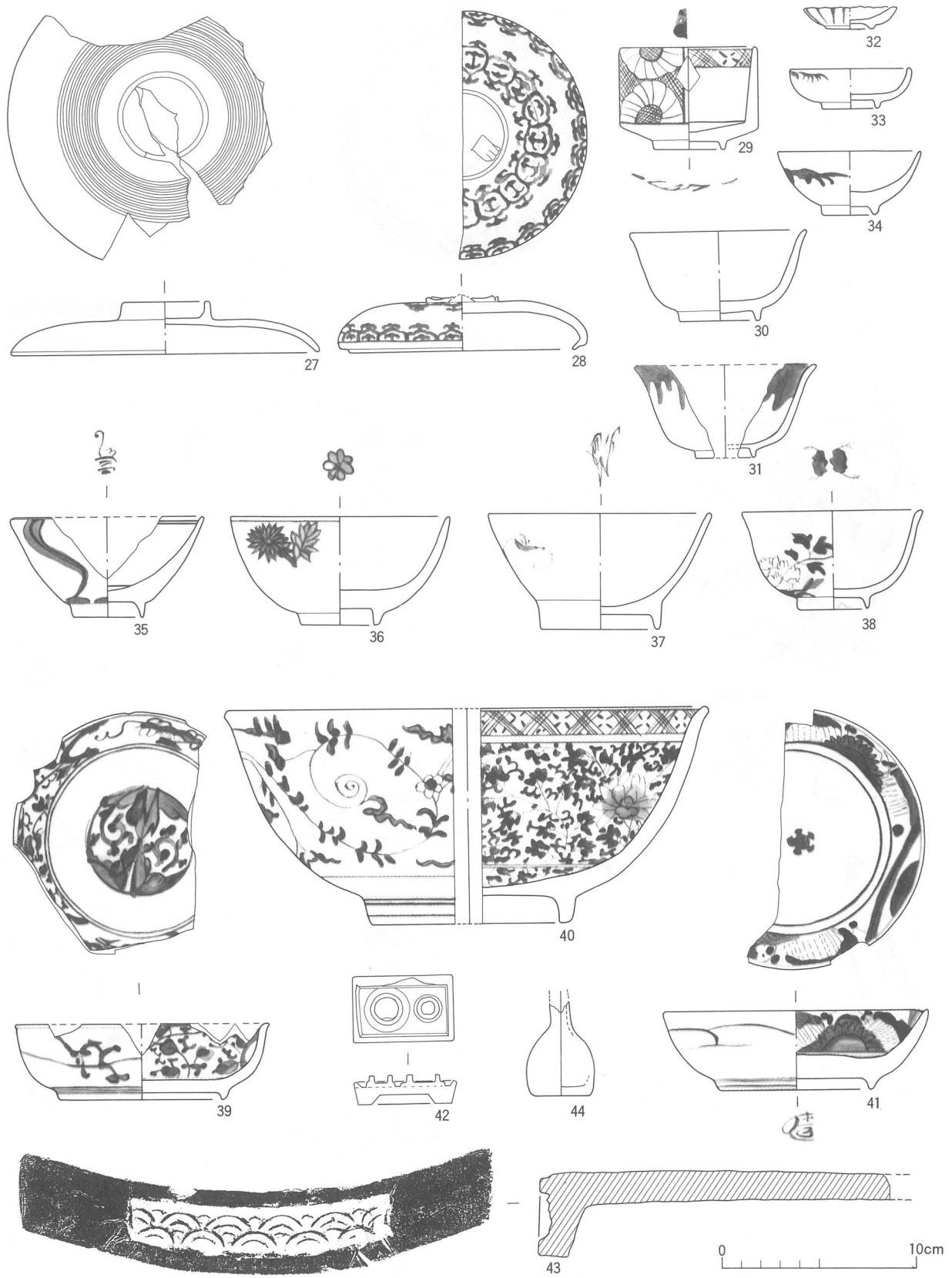
国の重要文化財に指定された旧岡田家住宅(店舗・酒蔵)については、調査委員会が組織されて平成元年度に現地調査が行われた。それと併行して岡田家文書の調査も進められて、建立当初からの建物の変遷や所有者の移転などが明らかになった(「旧岡田家住宅、酒蔵調査報告書」平成二年三月)。それによると、大蔵(千石蔵)の建立時期は文化・文政期(1804～30)と推定されている。



SK-1 1・2 SK-2 3 SK-4 4~9 SK-6 10~20 SK-11 21~26

図30 第44次調査出土遺物(1)

第2章 調査成果



SK-11 27~43 SK-16 44

図31 第44次調査出土遺物(2)

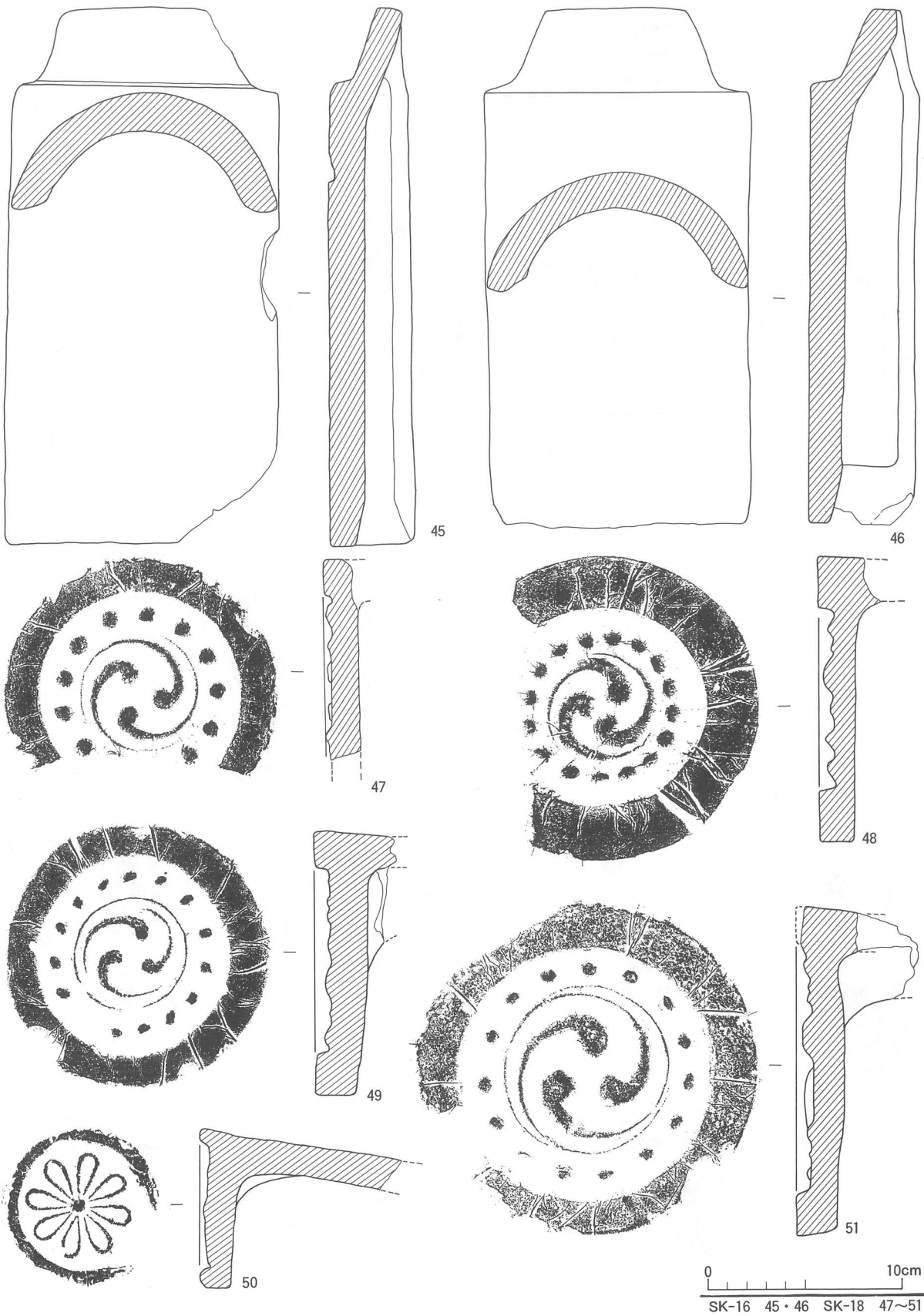
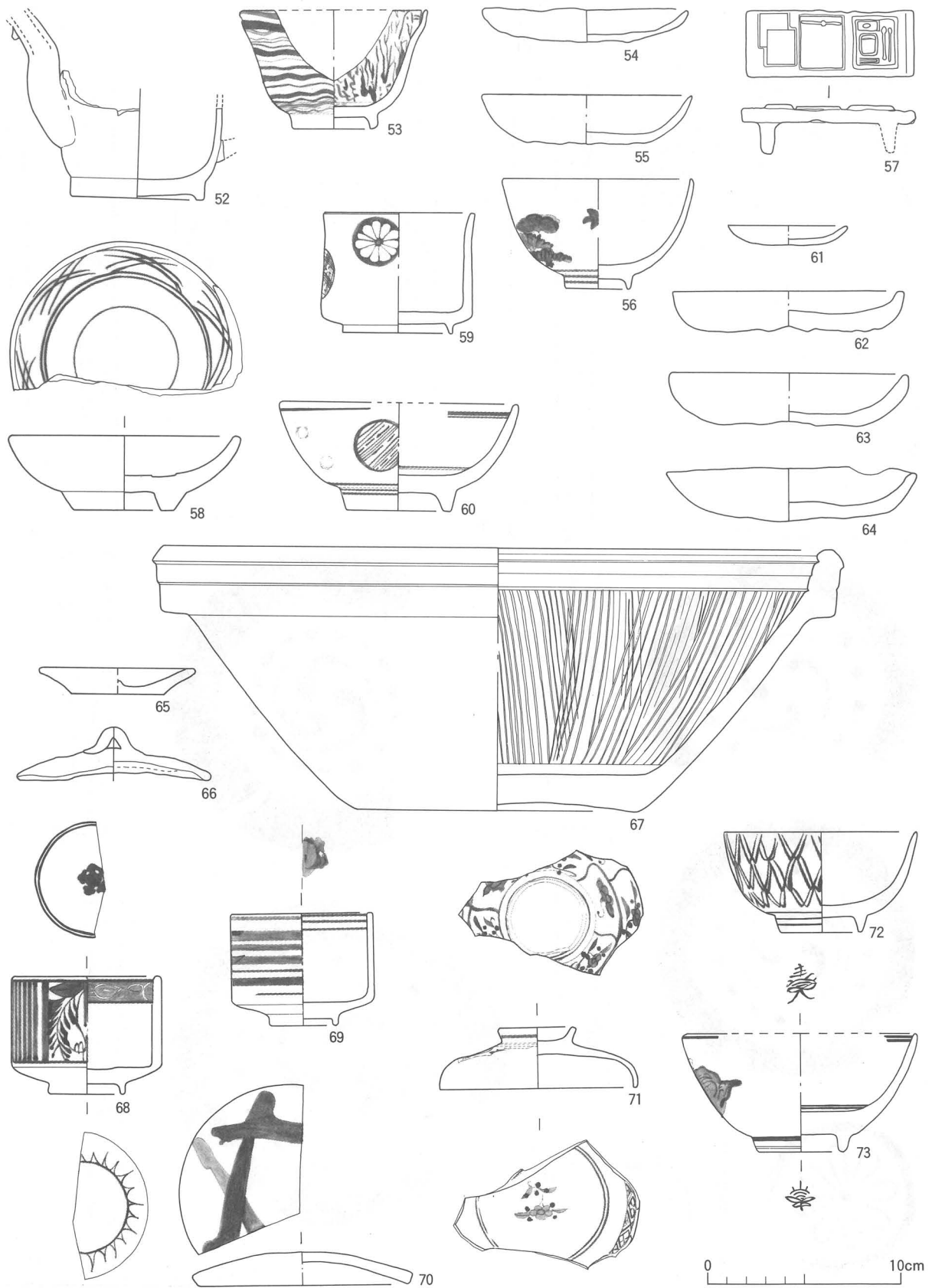


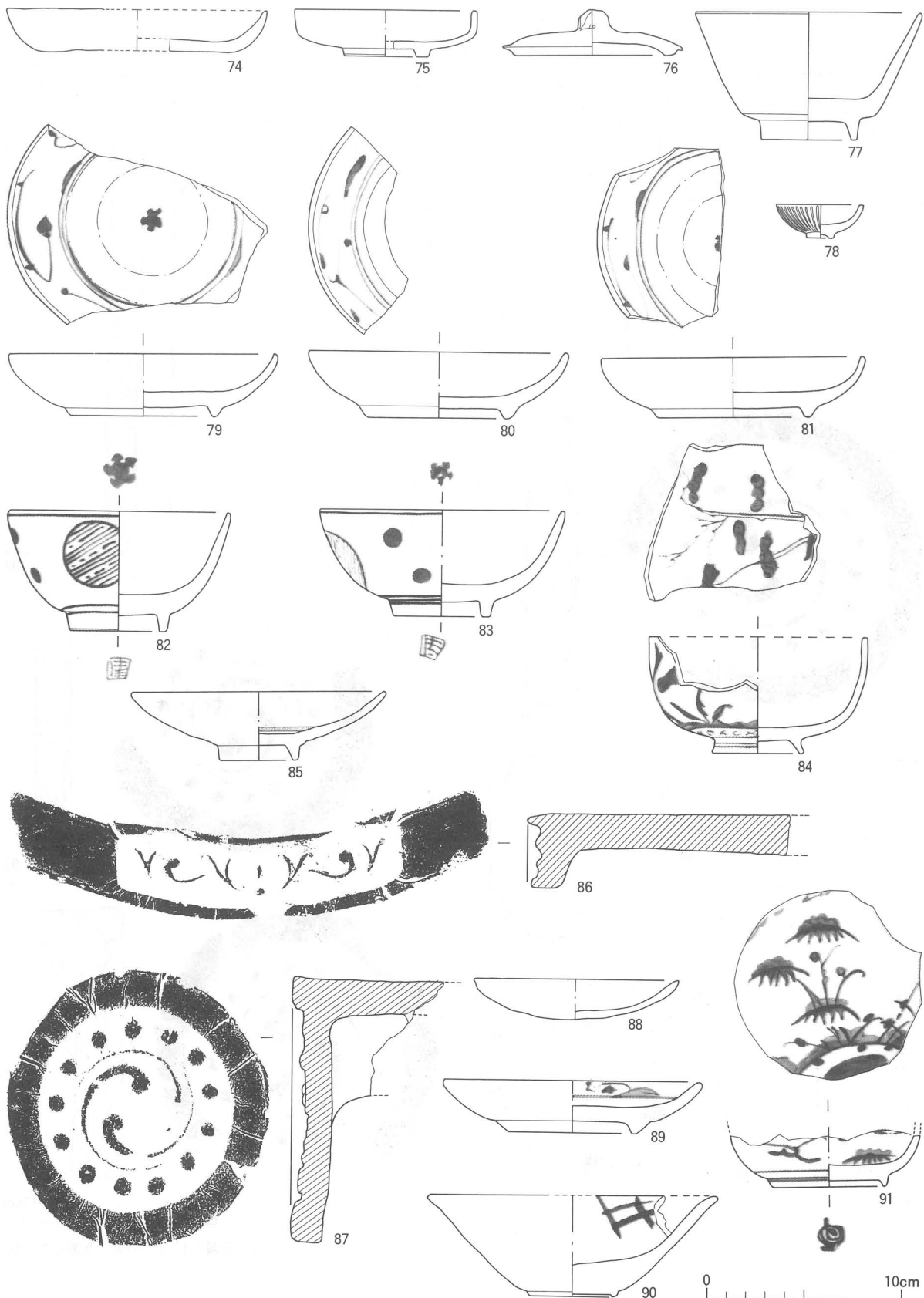
図32 第44次調査出土遺物(3)

第2章 調査成果



SK-28 52 SK-29 53 SK-33 54~56 SK-47 57
井戸2 58~60 井戸3 61~73

図33 第44次調査出土遺物(4)



井戸4 74~84 溝1 85・86 溝3 87 溝2 89 瓦溜切3 88 遺構外 90・91

图34 第44次調査出土遺物(5)

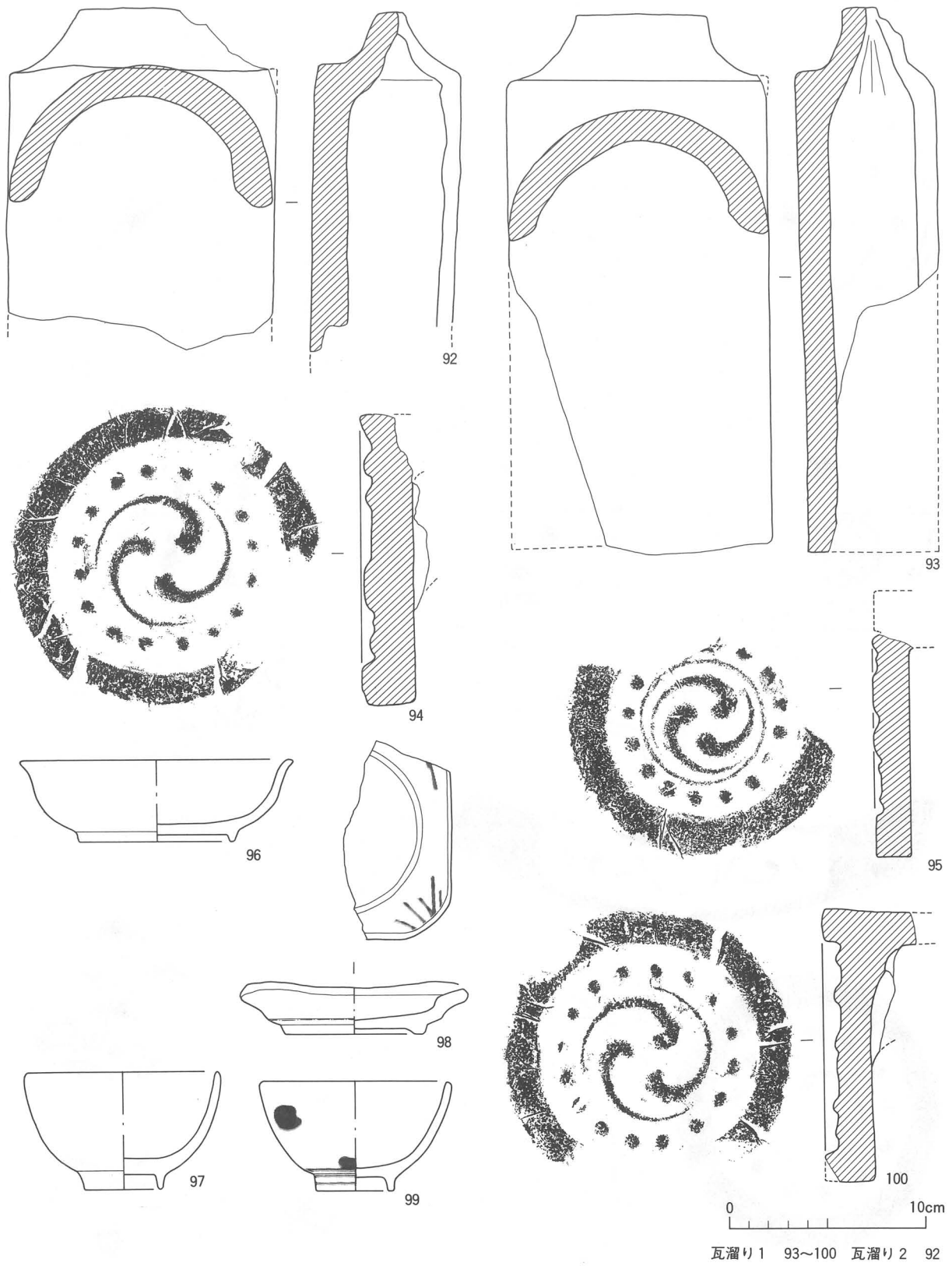
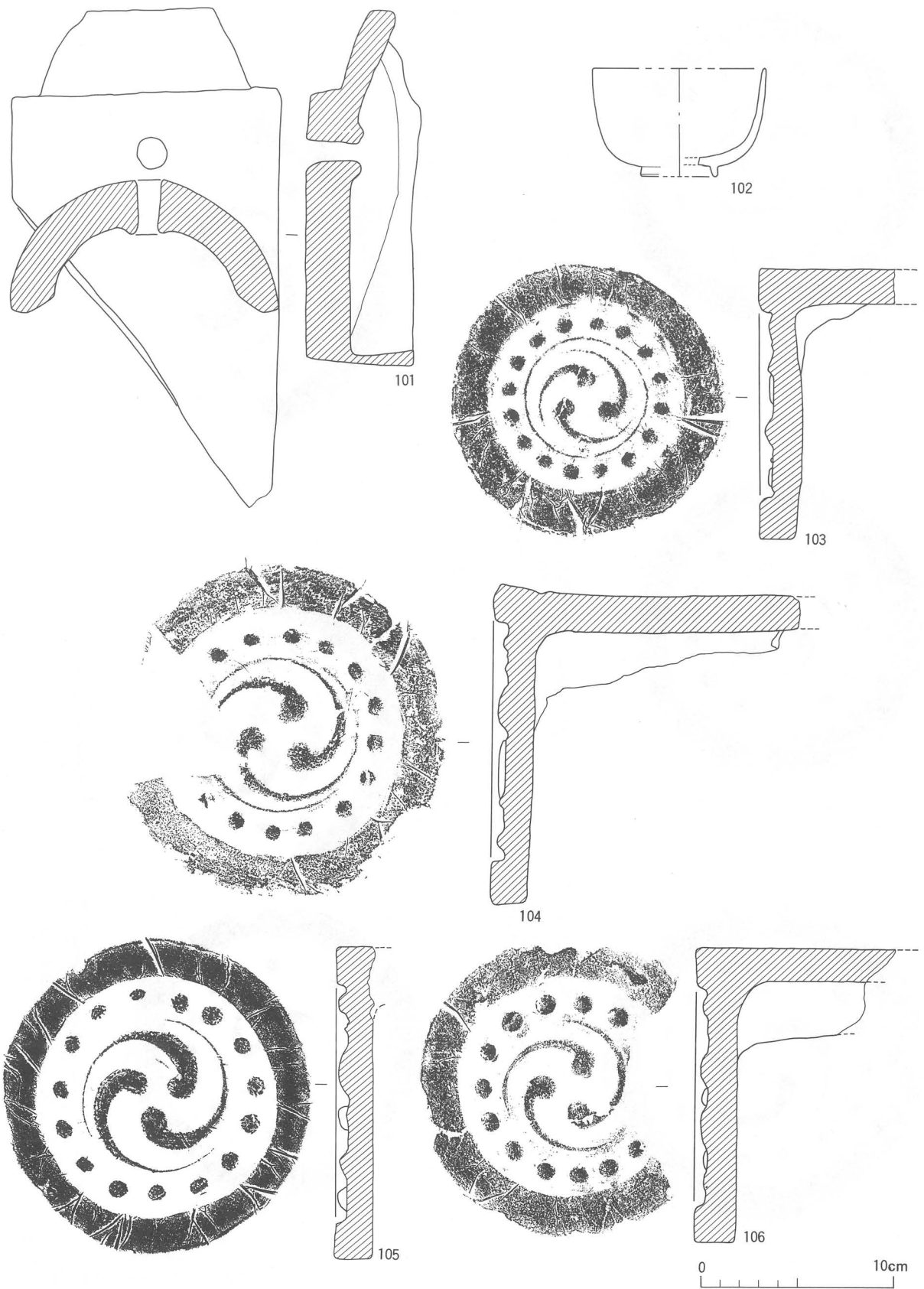


図35 第44次調査出土遺物(6)



瓦溜り1 101 瓦溜り2 102 瓦溜り3 103~106

図36 第44次調査出土遺物(7)

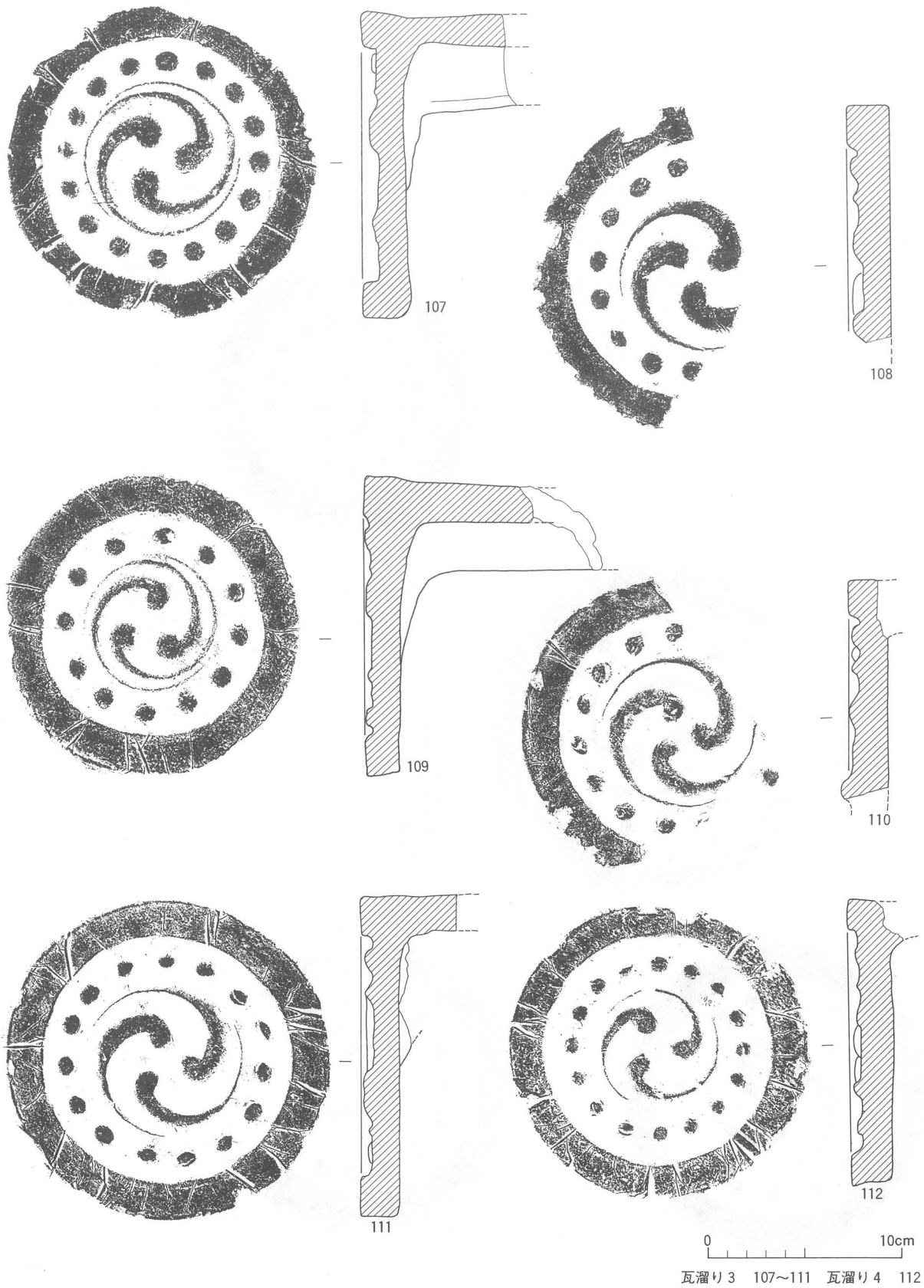
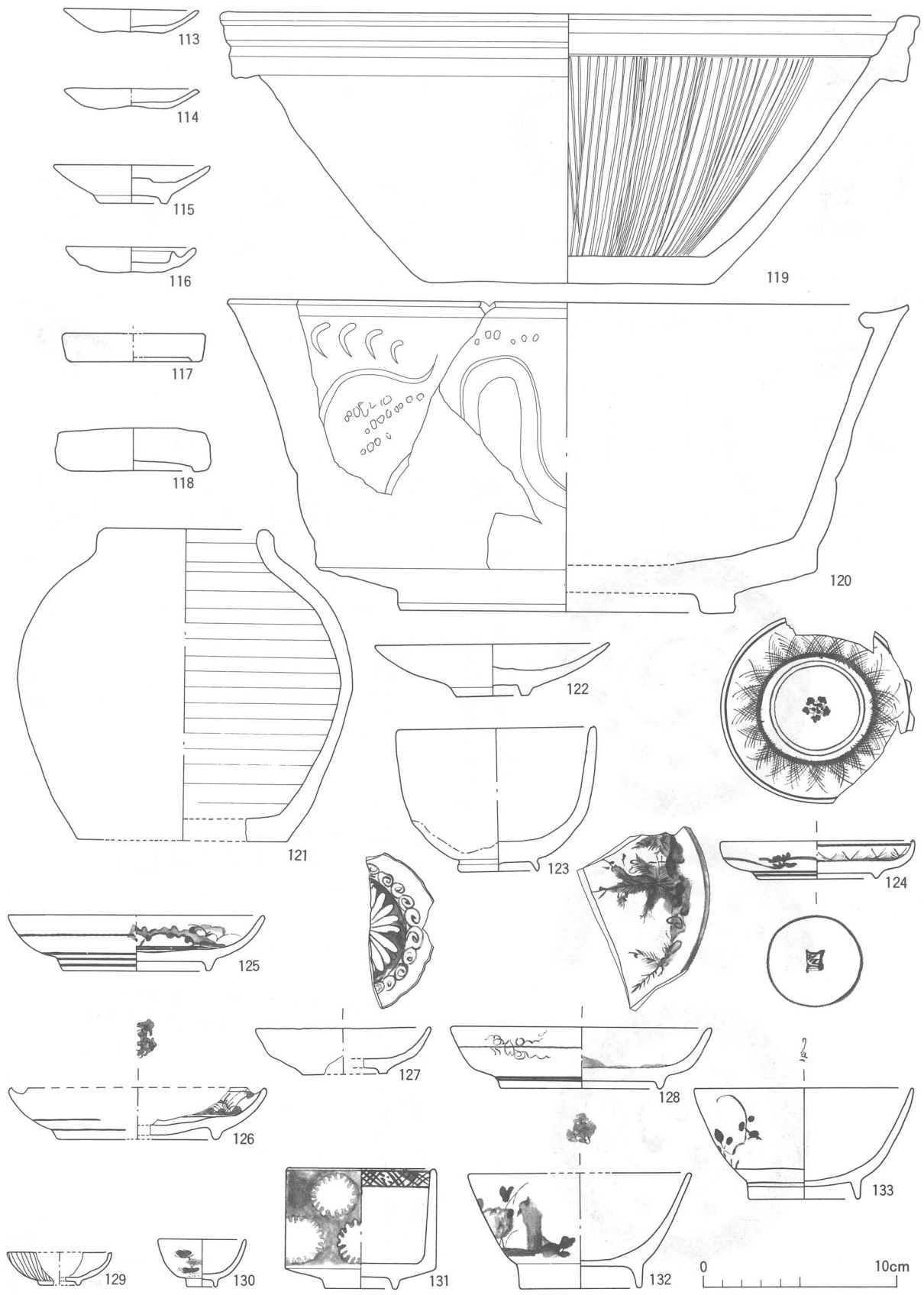


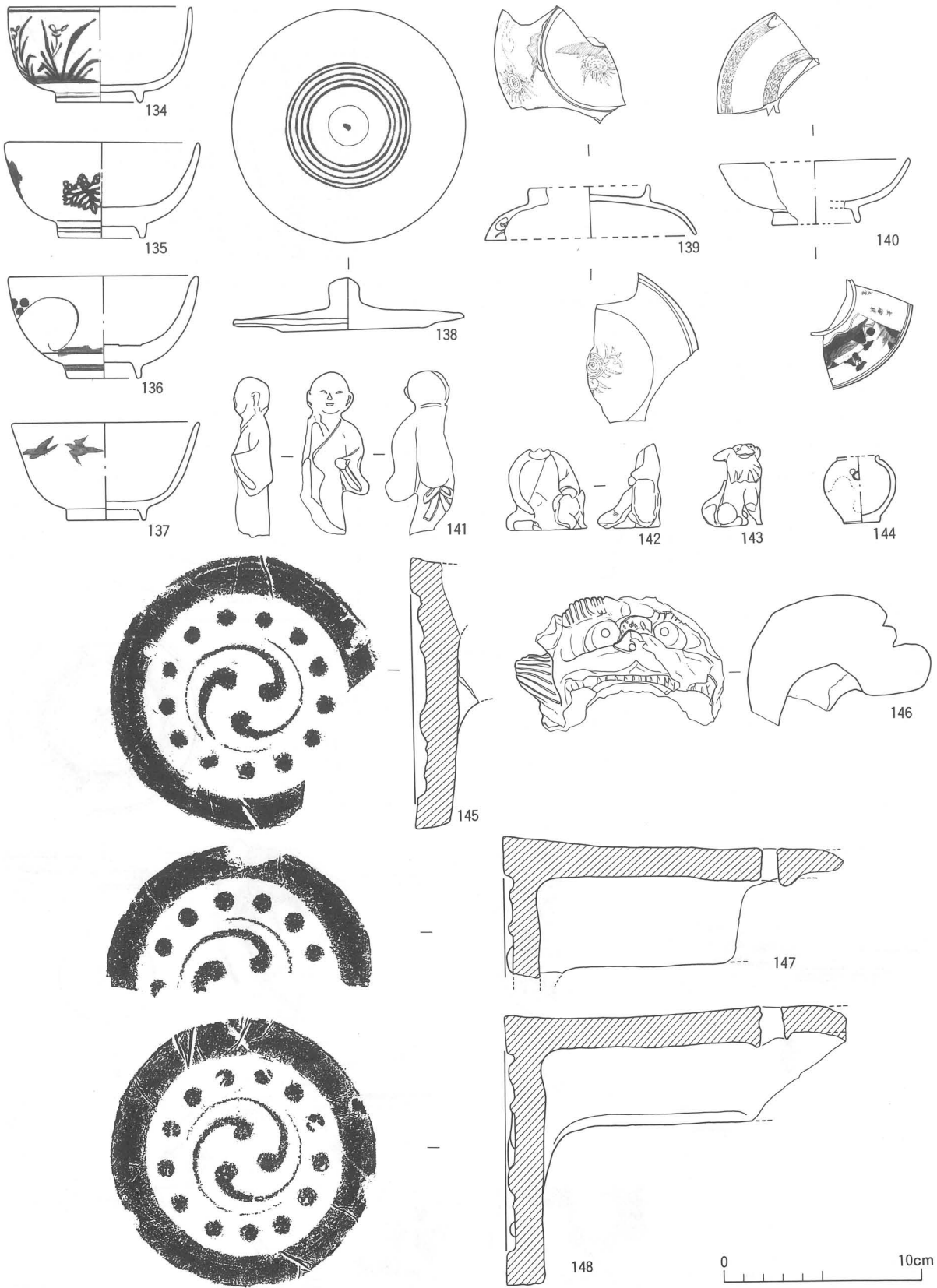
図37 第44次調査出土遺物(8)



遺構外 113~133

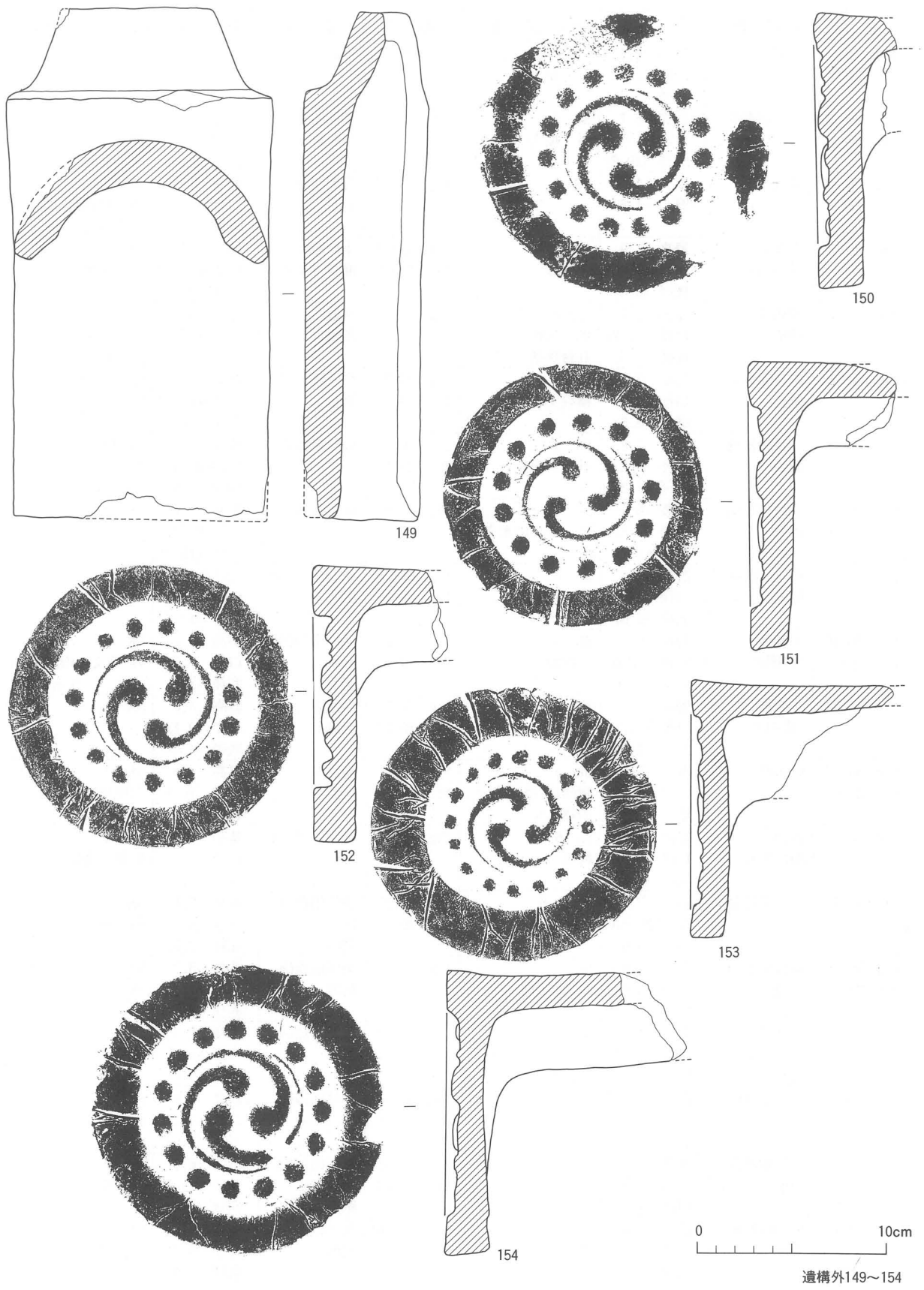
図38 第44次調査出土遺物(9)

第2章 調査成果



遺構外134~148

図39 第44次調査出土遺物(10)



遺構外149~154

図40 第44次調査出土遺物(11)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 30-1 Pl. 28-1	陶器皿	器高 3.1 口径 11.2 底径 6.3	SK-1 長石釉	Fig. 30-20	土面子	径 2.6 厚 0.8	SK-6
Fig. 30-2 Pl. 28-2	染付磁器蓋 肥前	器高 6.7 つまみ径 (5.8) 口径 (20.2)	SK-1 外 桜文	Fig. 30-21	燈明受皿 (陶器)	器高 1.8 口径 (6.5) 底径 (3.0)	SK-11 施釉
Fig. 30-3 Pl. 28-3	軒丸瓦	径 13.8 厚 1.6	SK-2	Fig. 30-22	燈明受皿 (土師質)	器高 1.5 口径 (9.3) 底径 (4.1)	SK-11 ロク口成形 柿釉 糸切り底
Fig. 30-4	土師皿 (燈明皿)	器高 1.9 口径 (10.0) 底径 (6.0)	SK-4 手捏ね	Fig. 30-23 Pl. 29-8	染付磁器蓋 瀬戸・美濃	器高 1.9 つまみ径4.3 口径 8.5	SK-11 外 山水文
Fig. 30-5	青磁皿 肥前	器高 3.1 口径 (12.7) 底径 (3.5)	SK-4 蛇ノ目釉ハギ 高台無釉	Fig. 30-24	吹蓋 肥前	器高 3.0 つまみ径6.1 口径 10.9	SK-11 外 龍文 銘款あり
Fig. 30-6	染付磁器碗 肥前	器高 3.5 口径 (8.0) 底径 (3.5)	SK-4 横縞文	Fig. 30-25 Pl. 29-9	染付磁器皿 肥前	器高 2.8 つまみ径4.4 口径 10.5	SK-11 内 斜格子文 五弁花
Fig. 30-7	染付磁器碗 肥前	器高 5.2 口径 (8.2) 底径 (3.2)	SK-4 外 草花文	Fig. 30-26 Pl. 29-10	染付磁器蓋	器高 2.6 つまみ径 (4.7) 口径 (8.8)	SK-11 外 草花文
Fig. 30-8 Pl. 28-4	染付磁器碗 肥前	器高 5.5 口径 (9.8) 底径 (3.9)	SK-4 外 楼郭山水文	Fig. 31-27	陶器蓋	器高 2.7 つまみ径 (4.5) 口径 (15.9)	SK-11
Fig. 30-9	染付磁器碗 肥前	器高 6.2 口径 (11.3) 底径 (4.5)	SK-4 外 梅樹文	Fig. 31-28 Pl. 29-11	染付磁器蓋 肥前	現存高2.8 つまみ径 (3.8) 口径 (11.6)	SK-11 上 瓔珞文
Fig. 30-10 Pl. 28-5	土師皿 (燈明皿)	器高 6.2 口径 13.0 底径 10.0	SK-6 手捏ね	Fig. 31-29 Pl. 29-12	染付磁器筒 形碗 肥前	器高 5.3 口径 (6.9) 底径 (3.7)	SK-11 外 菊文。内斜格 子文。五弁花
Fig. 30-11	土師皿 (燈明皿)	器高 1.3 口径 (7.7) 底径 (4.3)	SK-6	Fig. 31-30 Pl. 29-13	白磁碗 肥前	器高 4.6 口径 (9.1) 底径 (4.2)	SK-11
Fig. 30-12 Pl. 28-6	焼塩壺	器高 9.4 口径 5.9 底径 5.0	SK-6 胴部に「難波浄因」 の銘あり	Fig. 31-31 Pl. 29-14	陶器碗 信楽	器高 4.9 口径 10.3 底径 4.3	SK-11 口縁に緑釉を施す
Fig. 30-13	蓋物 瀬戸美濃	器高 4.0 口径 (7.0) 底径 (2.9)	SK-6 鉄釉	Fig. 31-32	紅皿 (土師 質)	器高 1.2 口径 4.8 底径 (2.5)	SK-11 施釉 型作り
Fig. 30-14	染付磁器蓋	器高 2.7 つまみ径 (4.0) 口径 (8.9)	SK-6 外 草花文	Fig. 31-33 Pl. 29-15	染付磁器小 杯 肥前	器高 2.1 口径 (6.2) 底径 (2.9)	SK-11 外 笹文
Fig. 30-15 Pl. 29-7	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 5.4 口径 (6.6) 底径 (4.1)	SK-6 内 斜格子文 五弁花	Fig. 31-34 Pl. 29-16	染付磁器碗 肥前	器高 3.3 口径 (7.3) 底径 (2.8)	SK-11 外 笹文
Fig. 30-16	染付磁器皿	器高 4.1 口径 (12.2) 底径 (5.1)	SK-6 内 草花文 五弁花	Fig. 31-35	染付磁器碗 肥前	器高 5.2 口径 (9.9) 底径 (3.6)	SK-11 外 振文。
Fig. 30-17	染付磁器碗	器高 4.5 口径 (8.2) 底径 (3.7)	SK-6 外 草花文	Fig. 31-36 Pl. 30-17	染付磁器碗 肥前	器高 5.6 口径 (11.2) 底径 (4.0)	SK-11 外 菊文。
Fig. 30-18	染付磁器蓋 肥前	器高 2.7 つまみ径 (4.9) 口径 (9.3)	SK-6 外 福寿字文	Fig. 31-37 Pl. 30-18	染付磁器碗 (広東碗) 肥前	器高 6.0 口径 (11.5) 底径 (6.0)	SK-11 外 蝶文
Fig. 30-19	染付磁器碗 肥前	器高 4.8 口径 (9.3) 底径 (3.5)	SK-6 外 草花文	Fig. 31-38 Pl. 30-19	染付磁器碗 肥前	器高 4.8 口径 (9.4) 底径 (3.0)	SK-11 外 牡丹文

表10 第44次調査出土遺物観察表(1)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 31-39 Pl. 30-20	染付磁器皿	器高 3.9 口径 (13.0) 底径 (8.6)	SK-11 外 唐草文 内 花と扇文	Fig. 33-58 Pl. 32-34	染付磁器皿	器高 3.9 口径 11.9 底径 5.1	井戸2 内 斜格子文 蛇ノ目袖ハギ
Fig. 31-40	染付磁器鉢	器高 11.0 口径 (25.0)	SK-11 外 唐草文 内 草花文	Fig. 33-59	染付磁器筒 型碗	器高 6.25 口径 (7.7) 底径 (5.6)	井戸2 内 斜格子文
Fig. 31-41 Pl. 30-21	染付磁器皿 肥前	器高 4.1 口径 (13.6) 底径 (7.9)	SK-11 外 唐草文	Fig. 33-60 Pl. 32-35	染付磁器碗 肥前	器高 5.6 口径 (12.3) 底径 (5.4)	井戸2 外 丸文
Fig. 31-42	土人形 玩具(かまど)	長 5.1 幅 3.4 高 1.5	SK-11	Fig. 33-61	燈明皿 (土師質)	器高 1.0 口径 (6.2) 底径 (3.2)	井戸3 口クロ成形 柿釉 糸切り底
Fig. 31-43 Pl. 30-22	軒平瓦	幅 1.5 厚 1.1	SK-11 波状文	Fig. 33-62 Pl. 32-36	土師皿 (燈明皿)	器高 2.1 口径 (11.9) 底径 (9.0)	井戸3 手捏ね
Fig. 31-44 Pl. 30-23	ミニチュア 花瓶	現在高5.0 胴部径3.5 底径 2.8	SK-16	Fig. 33-63 Pl. 32-37	土師皿 (燈明皿)	器高 2.7 口径 (12.2) 底径 (7.6)	井戸3 手捏ね
Fig. 32-45	丸瓦	長 27.7 幅 13.9 厚 2.0	SK-16 焼瓦	Fig. 33-64 Pl. 32-38	土師皿 (燈明皿)	器高 2.8 口径 12.9 底径 5.3	井戸3 手捏ね
Fig. 32-46	丸瓦	長 26.8 幅 13.7 厚 1.9	SK-16	Fig. 33-65	陶器蓋 瀬戸・美濃	器高 1.3 口径 (8.0) つまみ径 (4.8)	井戸3 鉄釉 糸切り底
Fig. 32-47 Pl. 30-24	軒丸瓦	径 14.1 厚 1.8	SK-18	Fig. 33-66 Pl. 32-39	陶器蓋	器高 2.8 口径 9.8	井戸3 鉄釉
Fig. 32-48 Pl. 31-25	軒丸瓦	径 14.8 厚 1.9	SK-18 三巴文	Fig. 33-67 Pl. 32-40	播鉢 堺	器高 13.6 口径 (34.4) 底径 (14.5)	井戸3
Fig. 32-49 Pl. 31-26	軒丸瓦	径 13.8 厚 2.3	SK-18 三巴文	Fig. 33-68 Pl. 32-41	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 6.1 口径 (7.6) 底径 (4.8)	井戸3 外 藤文 五弁花
Fig. 32-50 Pl. 31-27	棟込瓦	径 8.1 厚 1.6 長 10.1	SK-18	Fig. 33-69 Pl. 32-42	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 5.8 口径 (7.3) 底径 (3.5)	井戸3 外 横縞文 五弁花
Fig. 32-51 Pl. 31-28	軒丸瓦	径 17.3 厚 1.7	SK-18 三巴文	Fig. 33-70	陶器蓋	器高 1.7 口径 (10.8)	井戸3 長石釉 鉄絵
Fig. 33-52 Pl. 31-29	油差し (陶器) 瀬戸・美濃	底径 7.1	SK-28	Fig. 33-71	染付磁器蓋 肥前	器高 3.2 口径 10.1 底径 4.0	井戸3 外 草花文 内 斜格子文
Fig. 33-53 Pl. 31-30	陶器碗 唐津	器高 6.2 口径 (9.5) 底径 (4.3)	SK-29 外 刷毛目	Fig. 33-72 Pl. 32-43	染付磁器碗 肥前	器高 5.2 口径 10.0 底径 4.2	井戸3 外 二重網目文
Fig. 33-54 Pl. 31-31	土師皿 (燈明皿)	器高 1.9 口径 10.5 底径 5.4	SK-33 手捏ね	Fig. 33-73	染付磁器碗 肥前	器高 6.1 口径 (12.0) 底径 (4.5)	井戸3
Fig. 33-55	土師皿 (燈明皿)	器高 2.5 口径 (10.9) 底径 6.3	SK-33 手捏ね	Fig. 34-74 Pl. 32-44	土師皿 (燈明皿)	器高 2.2 口径 (13.4) 底径 (10.4)	井戸4 手捏ね
Fig. 33-56 Pl. 31-32	染付磁器碗 肥前	器高 5.7 口径 (9.7) 底径 6.3	SK-33 外、松文	Fig. 34-75	陶器皿 信楽	器高 2.4 口径 (9.4) 底径 (7.5)	井戸4
Fig. 33-57 Pl. 31-33	土製品 (玩具・文机)	長 8.7 幅 3.5 高 2.6	SK-47 型作り	Fig. 34-76 Pl. 32-45	陶器蓋	器高 3.35 口径 8.2	井戸4 鉄釉

表11 第44次調査出土遺物観察表(2)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig. 34-77 Pl. 32-46	白磁碗 肥前	器高 6.6 口径 11.6 底径 4.9	井戸4	Fig. 35-96 Pl. 34-60	青磁皿 肥前	器高 4.2 口径 (13.9) 底径 (7.9)	瓦溜り1
Fig. 34-78 Pl. 33-47	紅皿(磁器) 肥前	器高 1.7 口径 4.4 底径 1.4	井戸4	Fig. 35-97 Pl. 34-61	白磁碗 肥前	器高 6.0 口径 (9.8) 底径 (3.9)	瓦溜り1
Fig. 34-79 Pl. 33-48	染付磁器皿 肥前	器高 3.2 口径 (13.8) 底径 (7.5)	井戸4 内 蔓草文 蛇ノ目釉ハギ	Fig. 35-98 Pl. 34-62	陶器皿 瀬戸・美濃	器高 2.7 口径 (11.5) 底径 (7.0)	瓦溜り1 鉄絵 高台無釉
Fig. 34-80	染付磁器皿 肥前	器高 3.4 口径 (13.3) 底径 (7.3)	井戸4 内 蔓草文 蛇ノ目釉ハギ	Fig. 35-99 Pl. 34-63	染付磁器碗 肥前	器高 5.6 口径 (9.6) 底径 (3.9)	瓦溜り1
Fig. 34-81	染付磁器皿 肥前	器高 3.1 口径 (13.5) 底径 (7.9)	井戸4 内 蔓草文五弁花 蛇ノ目釉ハギ	Fig.35-100 Pl. 34-64	軒丸瓦	径 14.0 厚 2.3	瓦溜り1 三巴文
Fig. 34-82 Pl. 33-49	染付磁器碗 肥前	器高 6.2 口径 11.3 底径 4.9	井戸4 外 丸文 五弁花 銘款あり	Fig.36-101	隅丸瓦	長 25.9 厚 2.3 幅 13.9	瓦溜り1
Fig. 34-83 Pl. 33-50	染付磁器碗 肥前	器高 5.5 口径 (12.5) 底径 5.0	井戸4 外 丸文、五弁花 蛇ノ目釉ハギ、銘款あり	Fig.36-102	陶器碗 京焼写し	器高 5.6 口径 9.0 底径 4.0	瓦溜り2 高台無釉
Fig. 34-84	染付磁器碗 肥前	器高 6.0 口径 (11.2) 底径 (4.6)	井戸4	Fig.36-103 Pl. 35-65	軒丸瓦	厚 1.8 径 14.1	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-85 Pl. 24-51	青磁皿 肥前	器高 3.5 口径 (13.0) 底径 (4.0)	溝1 蛇ノ目釉ハギ	Fig.36-104 Pl. 35-66	軒丸瓦	厚 1.9 径 16.6	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-86 Pl. 33-52	軒平瓦	厚 1.8 幅 24.5	溝1 唐草文	Fig.36-105 Pl. 35-67	軒丸瓦	厚 2.0 径 16.6	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-87 Pl. 33-53	軒丸瓦	厚 1.7 径 14.6	溝3 三巴文	Fig.36-106 Pl. 35-68	軒丸瓦	厚 1.7 径 15.3	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-88 Pl. 33-54	土師皿 (燈明皿)	器高 2.2 口径 (10.5) 底径 (3.4)	瓦溜り3 手捏ね	Fig.37-107 Pl. 35-69	軒丸瓦	厚 1.6 けい 15.3	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-89 Pl. 33-55	染付磁器皿 肥前	器高 2.7 口径 (13.2) 底径 (6.5)	溝2 五弁花 蛇ノ目釉ハギ	Fig.37-108 Pl. 35-70	軒丸瓦	厚 2.2 径 不明	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-90 Pl. 33-56	陶器碗 唐津	器高 5.2 口径 (14.8) 底径 (4.4)	遺構外	Fig.37-109 Pl. 36-71	軒丸瓦	厚 1.9 径 15.5	瓦溜り3 三巴文
Fig. 34-91 Pl. 34-57	染付磁器皿 肥前	現在高 2.9 底径 (5.8)	遺構外 内 笹文 「渦福」銘あり	Fig.37-110 Pl. 36-72	軒丸瓦	厚 2.0 径 不明	瓦溜り3 三巴文
Fig. 35-92	丸瓦	幅 13.6 厚 1.6	瓦溜り2	Fig.37-111 Pl. 36-73	軒丸瓦	厚 2.0 径 16.6	瓦溜り3 三巴文
Fig. 35-93	丸瓦	幅 13.3 厚 1.6	瓦溜り1	Fig.37-112 Pl. 36-74	軒丸瓦	厚 2.2 径 14.9	瓦溜り4 三巴文
Fig. 35-94 Pl. 34-58	軒丸瓦	径 14.8 厚 3.2	瓦溜り1 三巴文	Fig.38-113 Pl. 36-75	燈明皿 (土師質)	器高 1.2 口径 7.0 底径 3.3	遺構外(第一層) ロク口成形 柿釉 糸切り底
Fig. 35-95 Pl. 34-59	軒丸瓦	径 13.1 厚 2.3	瓦溜り1 三巴文	Fig.38-114 Pl. 36-76	土師皿	器高 1.1 口径 (7.0) 底径 (4.2)	遺構外(第一層) ロク口成形 糸切 り底

表12 第44次調査出土遺物観察表(3)

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig.38-115 Pl. 36-77	白磁器皿 肥前	器高 2.0 口径 8.1 底径 3.5	遺構外(第一層) 蛇ノ目釉ハギ	Fig.39-134 Pl. 37-87	染付磁器碗 肥前	器高 4.9 口径 9.35 底径 4.4	遺構外 外 菖蒲文
Fig.38-116 Pl. 36-78	燈明受皿 (土師質)	器高 1.3 口径 6.7 底径 3.5	遺構外(第一層) 口ク口成形 柿釉 糸切り底	Fig.39-135 Pl. 38-88	染付磁器碗 肥前	器高 4.9 口径 (9.9) 底径 (4.4)	遺構外(第一層) 外 桐文 印判手
Fig.38-117 Pl. 36-79	焼塩壺蓋	器高 1.7 底径 6.7	遺構外(第一層) 内 布目	Fig.39-136 Pl. 38-89	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 (9.7) 底径 3.8	遺構外 外 草花文 蛇ノ目釉ハギ
Fig.38-118 Pl. 36-80	焼塩壺蓋	器高 2.2 口径 7.1	遺構外(第一層)	Fig.39-137 Pl. 38-90	染付磁器碗 肥前	器高 5.0 口径 (9.6) 底径 4.1	遺構外 外 花鳥文
Fig.38-119	播鉢 堺	器高 14.0 口径 36.6 底径 15.0	遺構外	Fig.39-138 Pl. 38-91	陶器蓋 瀬戸・美濃	器高 2.6 つまみ径1.5 口径 11.8	遺構外(第一層) 鉛釉
Fig.38-120	水甕(陶器) 瀬戸	器高 16.0 口径 35.2 底径 17.4	遺構外 高台無釉	Fig.39-139	染付磁器蓋 肥前	器高 2.6 つまみ径6.2 口径 10.8	遺構外(第一層)
Fig.38-121	陶器壺 常滑	器高 16.2 口径 8.8 底径 10.9	遺構外	Fig.39-140	染付磁器蓋 肥前	器高 3.3 口径 (9.7) 底径 (4.5)	遺構外(第一層) 外 人物文
Fig.38-122 Pl. 28-81	染付磁器皿 肥前	器高 2.7 口径 12.1 底径 3.7	遺構外(第一層) 内 折れ松葉文	Fig.39-141 Pl. 38-92	土人形 (童子)	現存高8.2 幅 3.5	遺構外(第一層) 型合せ
Fig.38-123	陶器碗 唐津	器高 7.4 口径 10.2 底径 4.0	不明 高台無釉	Fig.39-142 Pl. 38-93	土人形 (僧侶)	現存高4.1 幅 4.2	遺構外(第一層) 手捻り
Fig.38-124 Pl. 37-82	染付磁器皿 肥前	器高 2.0 口径 (10.0) 底径 (7.6)	遺構外(第一層) 外 唐草文 内 草原文	Fig.39-143 Pl. 38-94	土人形 (狗犬)	高さ 4.1 幅 3.3	遺構外(第一層) 型合 施釉
Fig.38-125	染付磁器皿 肥前	器高 2.9 口径 (13.3) 底径 (7.6)	B-12区 内 草花文 五弁 花	Fig.39-144 Pl. 38-95	玩具壺	高さ 4.1 幅 3.3	遺構外(第一層) 口ク口成形 糸切 り底 施釉
Fig.38-126	染付磁器皿 肥前	器高 2.7 口径 (13.2) 底径 (8.4)	遺構外(第一層) 内 草花文	Fig.39-145 Pl. 38-96	軒丸瓦	径 13.8 厚 1.3	遺構外 三巴文
Fig.38-127	染付磁器皿 肥前	器高 2.3 口径 9.0 底径 4.4	不明 内 菊文	Fig.39-146 Pl. 39-97	棟端飾瓦 (狗犬)	高さ 6.0 幅 10.5	遺構外
Fig.38-128	染付磁器皿 肥前	器高 3.2 口径 13.5 底径 8.3	攪乱 内 松文	Fig.39-147 Pl. 39-98	軒丸瓦	厚 1.5	遺構外 三巴文
Fig.38-129	紅皿	器高 1.7 口径 (5.4) 底径 (2.1)	遺構外(第一層)	Fig.39-148 Pl. 39-99	軒丸瓦	径 13.7 厚 1.6	遺構外 三巴文
Fig.38-130 Pl. 37-83	染付磁器小 杯 肥前	器高 2.5 口径 4.5 底径 1.5	遺構外 外 松文	Fig.40-149	丸瓦	長さ 27.0 幅 13.8 厚 2.2	遺構外
Fig.38-131 Pl. 37-84	染付磁器筒 型碗 肥前	器高 6.3 口径 (7.7) 底径 (3.7)	遺構外(第一層) 外 雪輪文 内 斜格子文	Fig.40-150 Pl. 39-100	軒丸瓦	径 14.9 厚 2.3	遺構外 三巴文
Fig.38-132 Pl. 37-85	染付磁器碗 (広東碗) 肥前	器高 6.0 口径 (11.5) 底径 (6.2)	遺構外 外 草花文	Fig.40-151 Pl. 39-101	軒丸瓦	径 15.3 厚 1.7	遺構外 三巴文
Fig.38-133 Pl. 37-86	染付磁器碗 肥前	器高 5.8 口径 11.3 底径 5.7	遺構外(第一層) 外 草花文	Fig.40-152 Pl. 39-102	軒丸瓦	径 14.2 厚 1.9	遺構外 三巴文

表13 第44次調査出土遺物観察表(4)

第2章 調査成果

番号	器種	法量	出土地点・備考	番号	器種	法量	出土地点・備考
Fig.40-153 Pl. 40-103	軒丸瓦	径 13.7 厚 1.4	遺構外 三巴文	Fig.40-154 Pl. 40-104	軒丸瓦	径 15.0 厚 1.7	遺構外 三攪文

表14 第44次調査出土遺物観察表(5)

大蔵は千石蔵とも呼ばれるが、千石蔵はこの蔵だけの固有名詞ではない。千石造りの蔵として広く一般に使われた呼称である。つまり、清酒千石を仕込むことのできる蔵という意味をもっている。千石蔵という大規模な仕込み蔵の出現は、年中醸造する四季醸造から、冬期に仕込む寒造り醸造に集中するようになったことと関連がある。江戸時代の伊丹では、四季醸造が伝統となっていたが、寒造りの仕込み方法が最もすぐれているので、次第に寒造りに移行していった。その時期が文化・文政期であると言われている。今回発掘調査を行った大蔵も、このような時代の要請に答えて建てられたものと考えられる。

文化・文政期の酒蔵の所有者は、鹿島屋清右衛門である。鹿島屋はこの当時ここを本店とし、他に二蔵を所有する規模の大きな酒造家である。本店の酒造株高をみると、文化三年に605.44石が増石されている。文化三年といえば、幕府によって「酒造勝手造令」が出された年であり、この施策に呼応し増石したものとみられる。増石される前が1,206.44石であるから、増石されて生産量はいっきょに1.5倍となっている。このような生産量の急激な拡大を既存の施設(酒蔵)で対応したとは考え難く、酒蔵の増築を前提したものと考えられる。寒造り集中の仕込み方法への転換と「酒蔵勝手造り令」による増石が、大蔵増築の背景にあると考えられるのである。

最後に検出遺構の時期について検討を加えてみたい。出土遺物により遺構の時期をみると、17世紀後半～末の遺物を出土する遺構と18世紀後半～末の遺物を出土する遺構が多い。前者をⅠ期、後者をⅡ期とすると、Ⅰ期には、溝1・瓦溜り1・瓦溜り3・SK4がある。瓦溜りは火事によって焼け落ちた瓦を廃棄した土坑である。こうした土坑は、西隣の光明寺の発掘調査(第100次)、東隣の美術館建設に伴う発掘調査(第29次)でも発見されており、伊丹を襲った元禄十二年の大火か元禄十五年の大火によるものと考えられる。元禄十二年の火事では「寺院六ヶ寺、酒家十六軒其外数不知」、同十五年の火事については439軒が焼けたことが記録されている。Ⅱ期の遺構には、SK6・SK11・SK28・井戸2・井戸3・井戸4などがある。大蔵はⅡ期の遺構との直接的な切り合い関係がないが、Ⅱ期の遺構と大蔵が平面的に重なることから、Ⅱ期の遺構→大蔵の順序が考えられる。

第3章 各 説

第1節 有岡城侍町検出の堀について

はじめに

今回報告した第34次調査及び第37次調査では、小規模な堀跡を検出している。その特徴については既に本文中で述べたが、これまでに発見された他の堀との関係について若干補足しておきたい。

再開発事業に伴って実施した侍町の発掘調査では、この一帯が後世の削平を受けており、侍屋敷そのものについては明らかにできていないが、井戸跡や中小の堀跡の発見が侍町の構造解明の手掛かりとなっている。前川要氏は、「有岡城惣構の検討」の中で、侍町の中小の堀について、家臣団の居住空間を長方形に区画したものと推定し、侍町の防衛機能を指摘している。^(註1) また、中規模の堀が現在の道路と同じ方向性を示していることに着目し、有岡城当時の侍町の地割が伊丹郷町の町割に引き継がれたことも指摘している。侍町の地割と現状地割の関係については、平成二年に実施した第103次調査検出の堀(堀1)が現在の道路の東側に沿うように延びていたことで、廃城後も大きな改変を受け^(註2)

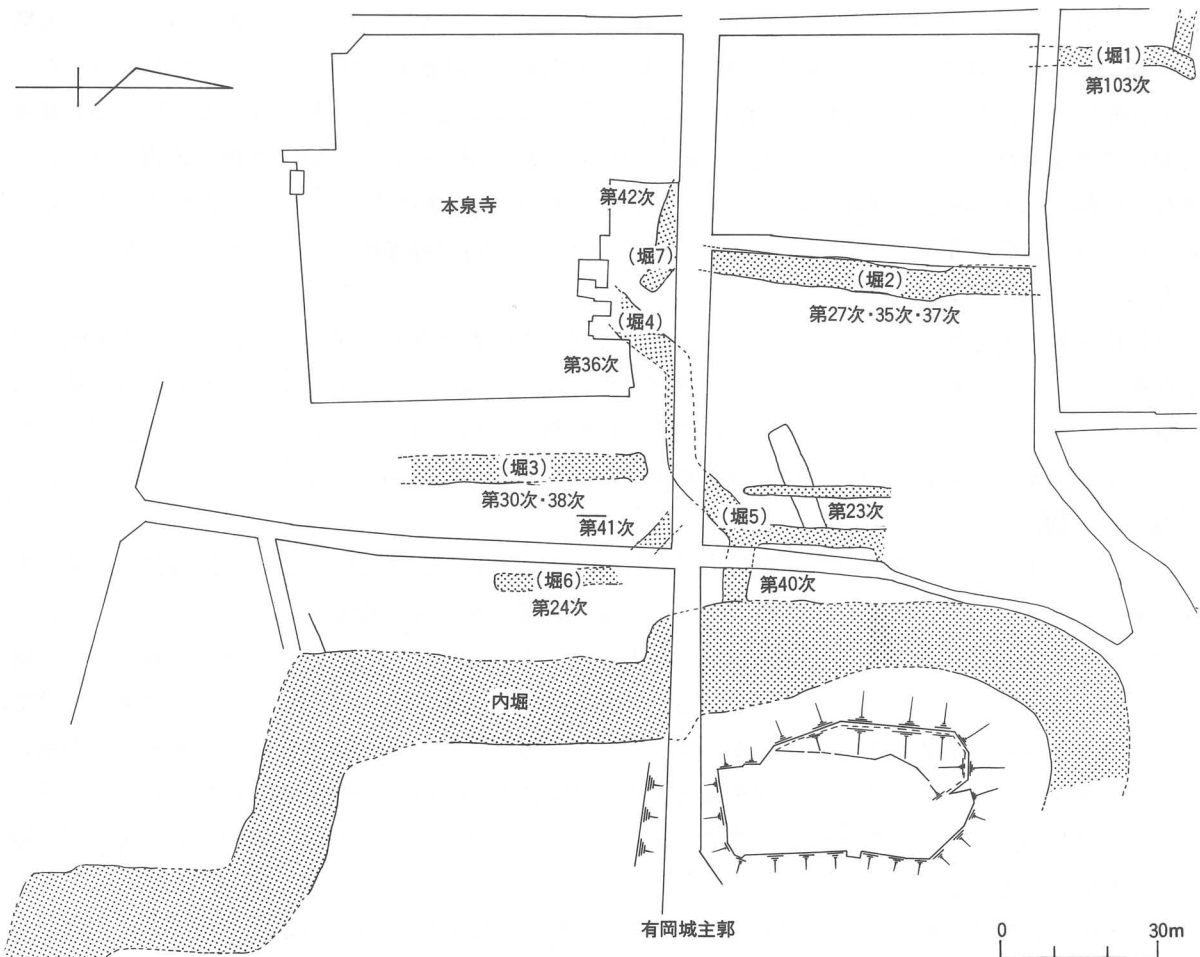


図41 有岡城主郭西側の堀配置図

ていないことが裏付けられている。しかし、図3に示した侍町の堀跡には、町割を斜目に横切る堀跡が多く見つかっており、一概に侍屋敷に沿って設けられたとは考えられない堀(堀4~7)がある。そこで本稿では、現状の町割と同じ方向性をもつ堀と、もたない堀に分けて検討してみたい。各堀には調査回数と堀の番号(SF01など)が付けられているが、説明し易いよう便宜的に堀の名称を与えた(堀1~堀7)。

町割と堀

現在の道や内堀と同じ方向性を有している堀に、堀1~堀3がある。堀1は最も主郭から離れた場所で検出された。堀幅は約3m、深さは1m弱で、長さ22mにわたって調査された。堀の北側ではやや東に傾いて終わっているが、南側は道を越えてさらに南に伸びていると推定される。この堀をそのまま南へ延長すると、本泉寺(永禄三年開基)境内の西縁に結び付くことになる。堀2は、堀1より規模が大きく、幅5mで深さ2m程である。堀の東側には一箇所屈曲するところがあるが、これは折れと考えられる。図示していないが、この部分から東へ伸びる溝が2条検出されている。堀2の南北の両端とも未調査となっているが、南端については第42次調査検出の堀状遺構を越えて南に伸びていないことが明らかであるので、この堀状遺構に合流するか、もしくは現在の道路あたりで終結していると考えられる。堀3は、本泉寺の東側に位置している。現在の寺域との間は約10mである。規模は、幅5m・深さ2.5m、堀底に柱穴が2箇所あり橋脚跡と推定されている。堀の北端は確認されているが、南端は未検出となっている。^(註3)

以上、堀1~堀3についてみてきたが、気づいた点について、いくつか述べてみたい。一つは堀間の距離についてである。堀1と堀2、堀2と堀3の間隔は、計測する場所によって若干異なるが、35m前後となる。また、堀3と内堀の間についても同じ値を示していることから、ここに一つの基準となる町割が存在していたと推定される。また、侍町の道については、第103次調査で確認されている。第103次調査では、堀1の西側に堀に沿って幅3m(1間半)の道跡が検出された。そして、この道の延長が現在の道路と重なってくるのである。このことは、当時の堀端の道が、現在に受け継がれたことを示していると考えられる。

次に侍屋敷と堀の関係について考えてみたい。侍屋敷の町割と関わりをもつ堀には、東西方向の堀が存在していない。堀1をみても、その先端部は東に向けて傾くものそこで終結しており、そのまま東に伸びていない。このことから、中小の堀は侍屋敷の西辺のみに設けられていたと考えられ、少なくとも北側からの防禦については配慮されていなかったとみられる。

金 堀

堀1~堀3のように町割と結びつく堀以外に、性格不明の堀が検出されている。今回報告した第42次調査検出の堀状遺構もそうだが、ここでは、有岡城期の遺物を出土した堀4~6について検討したい。

堀4は本泉寺北側を発して、現在の道路下を通過して堀5に通じていると推定されている。堀5は堀4方向から伸びてきて、二股に分かれている。一方は内堀に通じ、そして一方はさらに北側に伸びている。その北端は未調査となっているが、東に折れて内堀に合流する可能性が高い。堀6は、内堀に平行して伸びている。その北側は方向を変えて第41次調査検出の堀に連絡する可能性がある。そうすると、第41次調査検出の堀の方向からみて、堀4~5と連絡することになり、堀4~6がすべて一続きの堀ということになる。

堀の規模は、堀5が幅3~6m、深さ2.4~2.5m、堀6が幅1.8m・深さ3mとなっている。堀の規模は堀1~3と大差ないが、方向や枝分かれするなどの構造については大きな違いが認められる。そ

して、堀の先端が内堀に連絡することは、敵の侵入を防ぐという堀本来の機能を失なうことになりかねない。以上のことから、堀4～6は有岡城の防禦用の堀と考えるより、敵方が掘った城攻め施設と考えた方がすべての面で符合してくる。

「信長記」には、天正六年(1578)から行なわれた信長の有岡城攻めについて、詳しく描写されている。^(註4)それによると、「諸手四方より押つめ城楼かねほりを入責られ」と記述されている。城楼とは櫓のことで、城内を見晴るために築かれたものであろう。また、かねほりは金掘のことで、城内に向けてトンネル状のものが掘られたのであろう。金掘は、もとは金銀鉱山の人夫をさすが、16世紀には城攻めに徴用され、その採鉱技術を利用して土塁や井筒などを破壊するのが第一任務であったという。^(註5)「信長記」に記述されている金掘の遺構が、侍町で検出された堀4～6に相当するのであれば、実態のつかみにくいこの種の遺構としては貴重な資料となる。

おわりに

「信長記」の記述に従うと、天正七年十月十五日、信長方は惣構の要所に築かれていた上藤塚砦を破ると、一挙に城中に流れ込み、侍町に火を懸けて裸城にしている。そして、速やかに城楼を築き、金掘を掘って主郭部の攻撃に移っている。既に九月二日には、城主荒木村重が五六人の家臣と共に尼崎城に移っており、城内の戦意は薄れていたことであろう。そこに、城内を見おろすように高々と城楼が築かれ、目の前で着々と金掘が掘られたことが、籠城方にとって脅威であった。籠城一箇月の後、十一月十九日に降伏しているところをみると、城楼・金掘を用いた攻撃が、籠城方に対し心理的に大きな影響を与えたものとみられる。

金掘の実戦例については、伊藤鄭爾氏の論考^(註6)に詳しい。それによると、今川氏が安倍山の金掘を利用して、永正10年(1513)に浜松庄の引間城、永年13年に深獄城の井筒を掘りくずし、北条氏は甲州信州の金掘を集めて、埼玉県の松山城の櫓を掘りくずしている。また、規模のわかるものとして、大正十一年(1583)徳川家康が伊勢の峯城を攻めるにあたって、数百人の金掘を入れ、本丸の土居をくずし、東西の櫓を破壊し、一昼夜のうちに堀を5間から10間掘りくずしたという。井筒(井戸)を掘りくずすことは、城内の飲料水を断つ目的で行なわれるものだが、この場合は、トンネル状の金掘を掘る必要がある。また、櫓を掘りくずす場合には、手前にある堀の下、地中深く金掘りを掘り進めたと推定される。これに対し、有岡城の金掘(堀4～6)は、内堀まで至る間がトンネル状に掘られた様子は認められず、形状から言えば、塹壕のような施設であったと考えられる。金掘の発掘調査例の無い段階で、このような施設を、金掘の範疇で促えてよいものか、多少不安も残るが、ここでは、「信長記」の記述に従っておきたい。

ところで、「大阪冬の陣図屏風」^(註7)には、徳川方が天満川に向けて、機筋かの塹壕を掘り進めている様子が描かれている。詳しくみると、ここに描かれた塹壕が有岡城検出の堀4～6と、規模、形状において共通した特徴をもっていることが判る。その一つは、塹壕に天井部が無いこと、二つは、深さが人の背丈ほどであること、三つは蛇行して掘られていることである。有岡城の金掘の類例の一つとしてあげておきたい。大阪冬の陣は、慶長十九年(1614)のことであるので、有岡城落城から35年を経ているが、城攻め的手段に変化がないことを示している。

有岡城侍町の発掘調査は、まだ一部が行なわれたにすぎない。今後の調査によって、また新たな事実が明らかになってくると思われる。今後の調査に期待すると共に、資料が増えた段階で再び検討したい。

第3章 各 説

註

- (1) 前川要 「有岡城惣構の再検討」(『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』 大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987)
- (2) 伊丹市教育委員会 「第103次調査現地説明資料」 1991
- (3) 前掲書(1)
- (4) 八木哲浩編 (『荒木村重資料』伊丹資料叢書4)
- (5) 伊藤鄭爾 「城」読売新聞社 1975
- (6) 前掲書(5)
- (7) 大阪冬の陣図屏風(左隻) 東京国立博物館

第2節 調査地域の歴史

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第44次調査は、伊丹市立美術館庭園造園に伴う発掘調査で、伊丹市教育委員会が調査主体となり、宮ノ前地区埋蔵文化財調査団（団長 村川行弘）が発掘担当者となって、昭和62年3月～4月の間発掘調査をおこなった。

発掘調査対象地区である庭園予定地は、旧岡田家酒蔵のうち、大蔵（千石蔵）が建てられていた場所で、昭和59年までは大手柄酒蔵株式会社が使用していたが、その後昭和60年に解体された地域である。

平成2年3月刊の「旧岡田家住宅・酒蔵調査報告書」や「伊丹市史」によると、この地域の歴史の変遷は近世初頭まで辿ることができる。

西に隣接する旧岡田家住宅は発見された棟札によって、延宝2年（1674）の建立であることが分り、松屋与兵衛の居住として建てられた可能性が推測されている。その後、寛延3年（1750）以前に鹿島屋清右衛門がその敷地を買収し、酒蔵で酒造業を営んだ。鹿島屋清右衛門は大阪天満北富田町からの出造り酒造家で、寛延3年の酒造人数帳に町分として名があり、米屋町の住人であった。天明3年（1783）の「酒冥加銀につき上方酒屋総代願書」にも大阪天満北富田町大阪惣代鹿島屋清右衛門の名が記されている。また宝暦10年（1760）の伊丹から江戸への積出酒に鹿島屋清右衛門5,134石、同利兵衛2,297石と見えている。

天保3年（1832）の「酒造株高」は鹿島屋清右衛門1,812石、同中之町店1,812石、同北出店553石、計4,198石で酒銘として「松緑」を用いていた。同11年の酒造株高は7株で5,826石であった。

記録の面では、文化・文政の時期に千石蔵を増設し、幕末には紙屋八左衛門の天印家酒蔵も買い取り大々的に醸造業を展開していたと考えられている。

紙屋八左衛門の天印家酒蔵は延享4年（1747）に一文字屋七郎兵衛が紙屋八左衛門に売却したもので、14間×18間の宅、酒蔵が5間×14間と酒株1,098石ほかが付随していた。元治元年（1864）頃には紙屋八左衛門の酒蔵であったことが「有岡古続語」に記されているので、鹿島屋清右衛門が買取ったのは、それ以後のことであろう。明治3年（1870）には、この地は津国屋勘三郎に譲渡されている。岡田利兵衛が現在地域を買取ったのは明治12年以降のことである。伊丹の酒造家たちが度々同じ場所で酒造業を営み、経営者の交替がなされてきたことが知られる。

なお、岡田家の酒銘は一陽・八重・清竹、東雲・飛竜などであり、明治からは伊丹で富貴長、今津店で福注連を用いている。昭和20年6月に企業合同で伊丹酒類興業有限会社となり、今津の酒蔵は戦災で消失した。昭和43年11月からは大手柄酒造株式会社の所有となっていた。

一方、発掘調査の結果では、この地域に江戸時代前期～中期にかけての酒蔵と考えられる礎石をもった建造物址が検出され、その礎石の1つには「鹿し清」の文字と「松緑」の商標が墨書されていた。江戸前期以来、鹿島屋清右衛門の酒蔵があり、「松緑」という酒を造っていたことが分る。また大蔵（千石蔵）の礎石・井戸・溝なども検出された。そして、文化・文政期（19世紀前半）の建築と推定されている大蔵の建築時期は、遺構のうちでは最も新しく、18世紀から19世紀初頭に当る時期が実年代であることが判明した。

宮ノ前地域においては文献資料・古地図・伝承が比較的遺存しており、考古学の実証によって若干の修正はあるものの記録を裏付ける遺構の検出がみられるのも伊丹郷町遺跡の特色の一つである。

第4章 結 語

有岡城跡の発掘調査報告書は、第4次調査までは「伊丹城跡発掘調査報告書」としてⅠ～Ⅳまで刊行されたが、第5次～第10次調査の成果は「有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ」としてまとめられた。このように、報告書の遺跡名が途中から変更になったのには理由がある。有岡城は、昭和50年から53年までの発掘調査をもとに、昭和54年12月、国史跡の指定を受けることになったが、この時、史跡の指定名称に「有岡城」が採用されたのである。

城名が有岡城となったのは、天正二年(1572)に荒木村重が入城してからのことであり、少なくとも文和二年(1353)以降は、長きにわたって伊丹城と呼称されてきた。ところが、史跡指定を受けるにあたり、この城の城郭史的にみた重要性が、荒木村重によって完成された惣構にあると判断されたのである。惣構は、侍町や城下町まで防御線のうちに配置するもので、周囲を堀や土塁で囲郭した構造を言う。有岡城も城下町の外側に土塁と堀が存在していた。史跡指定にあたっては、本丸のある主郭だけでなく、周囲の外堀跡の範囲も史跡に指定され、当時の惣構の範囲が全域にわたって保護の対象になった。しかし、これにより発掘調査の対象範囲が広がり、主郭部から侍町へ、そして城下町へと移っていった。このように、遺跡名が、伊丹城から有岡城へ変更になるとともに、保護する遺跡の範囲が拡大することになった。

昭和60年には、大手前女子大学藤井直正教授により、第17次調査がおこなわれ、有岡城の遺跡のみならず江戸時代の伊丹郷町の遺跡が広く調査された。これを契機に江戸時代の伊丹郷町に関心が高まり、その後の第29次調査、第32次調査では江戸時代後期から順に、層位的な調査が実施されるようになってきた。

江戸時代の伊丹は、有岡城が廃城となった後も、残された城下町の範囲が母体となり、酒造業を中心に在郷町として栄えた。町中には大規模な酒蔵が立ち並び、生産された清酒は主に江戸に送られた。

第32次調査では、酒蔵跡が検出され、第29次調査では酒造用の竈が良好な形で調査されることになり、伊丹郷町の遺跡が具体的な姿を現してきた。この当時は、全国的に近世考古学への関心が高まりつつあり、伊丹においても、昭和61年から始まった国鉄伊丹駅前市街地再開事業に伴い、侍町の調査と共に、江戸時代の伊丹郷町も、遺跡として着々と調査されていった。このような経過を受けて、昭和63年3月に刊行した「埋蔵文化財分布地図」では、国史跡指定範囲を除き、遺跡名を有岡城跡から「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」に再び変更することになった。このことは、保護すべき遺跡の対象を江戸時代の伊丹郷町にまで広げることを意図している。有岡城惣構の範囲と江戸時代の伊丹郷町とは、平面に重なるので、遺跡の時代のみ広がったことになる。遺跡の名称が二度変更されることになったが、これについては以上の経過があったのである。

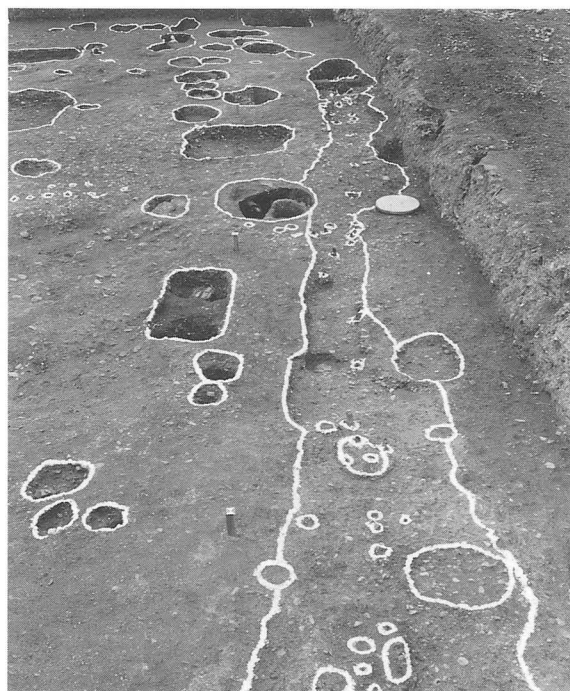
現在は、当時の城下町の範囲において別の再開事業が進行しており、それに伴って伊丹郷町の遺跡が調査されつつある。今後、調査成果を順次公表し、伊丹の江戸時代を明らかにすると共に近世考古学確立に寄与したいと思う。



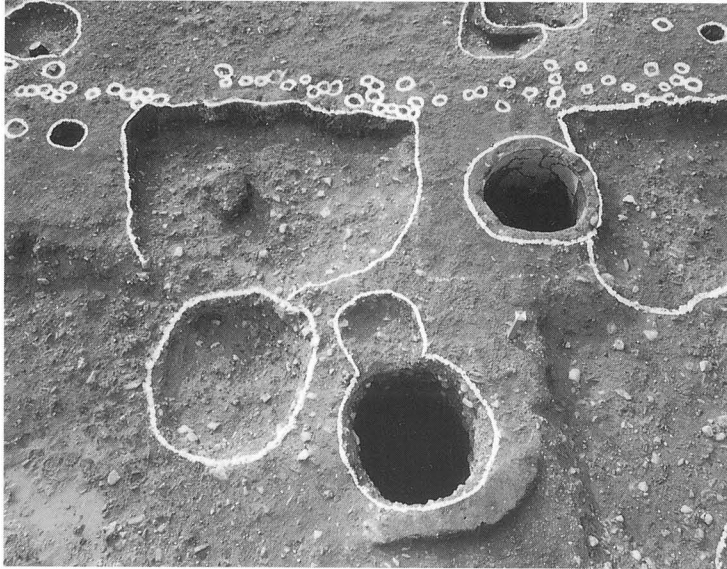
a. 第34次調査遠景(北より)
前方の建物が日蓮宗本泉寺、調査区東側では南北に延びる小堀が検出された。



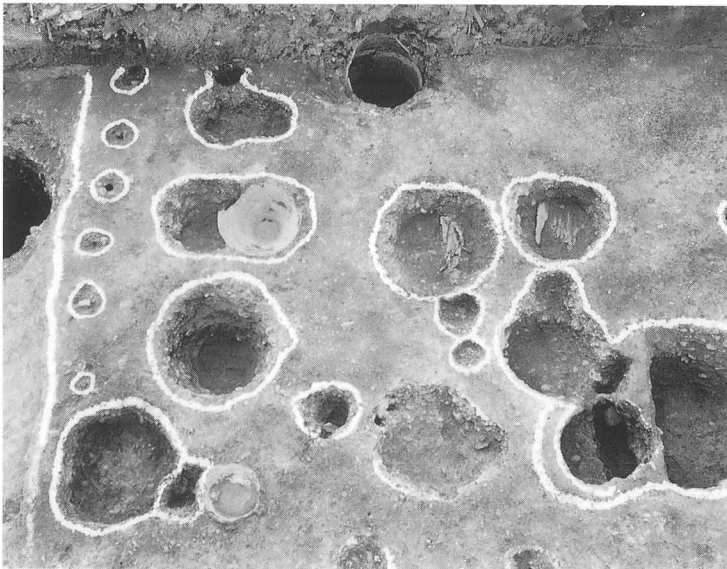
b. 第34次調査全景(北より)
調査区東側(左)は大きく攪乱を受けている。



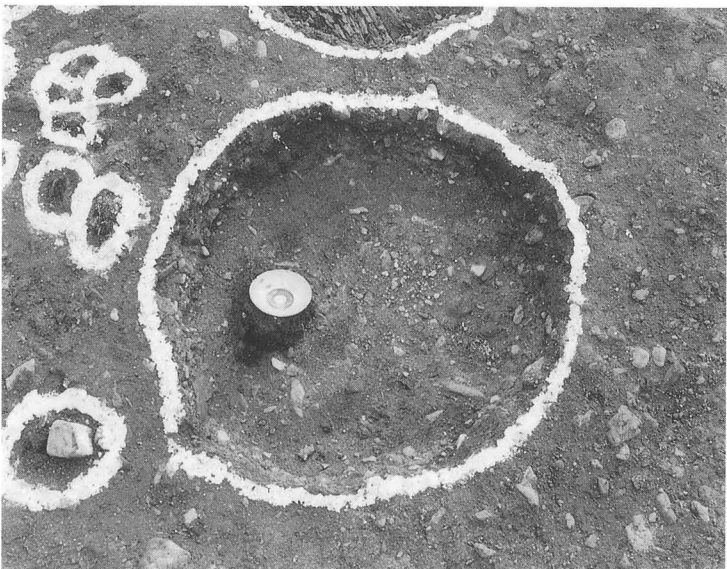
c. SDO 2 (東より)
溝の底面に杭が打ち込まれている。



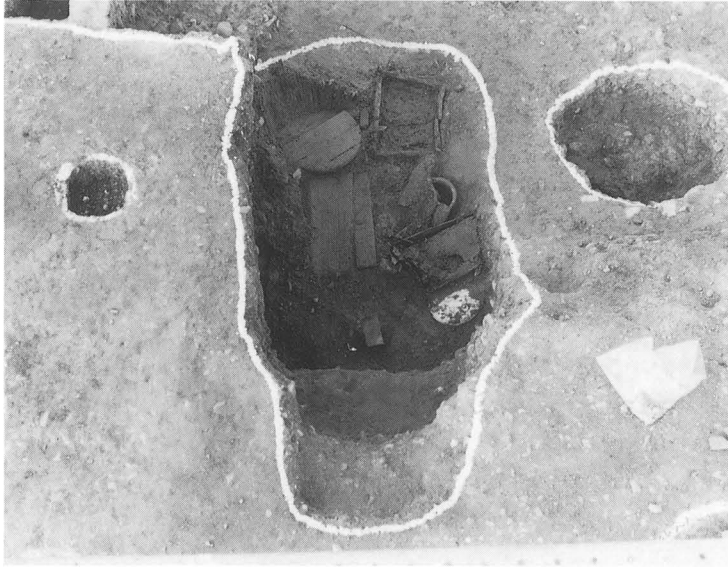
a. 井戸(井戸2、井戸5)
この付近に井戸が集中して掘られている。



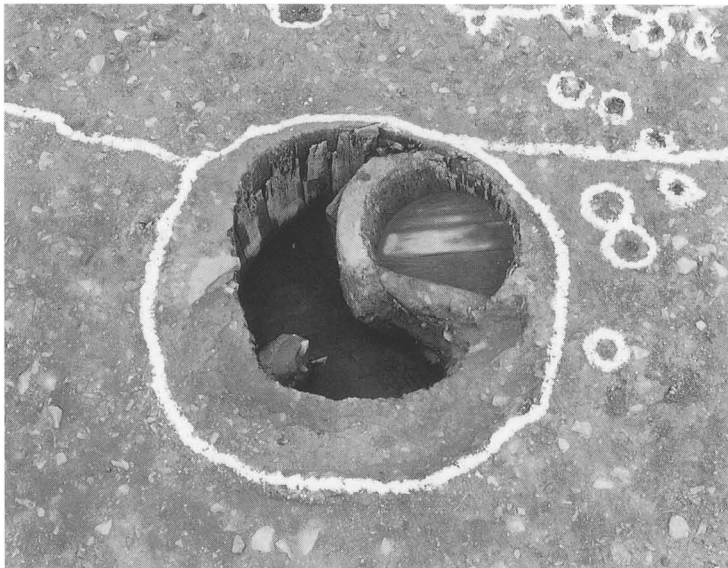
b. 埋桶、埋甕群(SK131ほか)
大小2基並んで配置される例が多い。



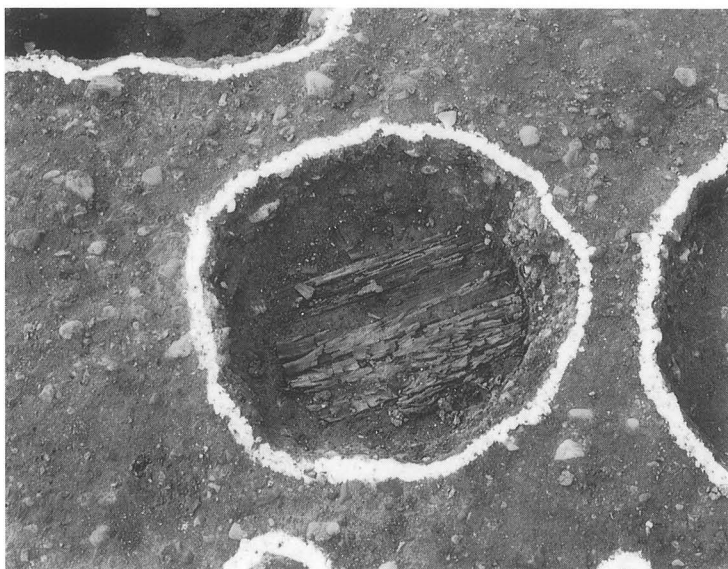
c. 埋桶(SK32)
埋桶底から染付皿が出土した。



a. 土坑 (SK214)
土坑内部に木製品が多数
遺存していた。



b. 埋桶 (SK13)
埋桶が重なって検出され
た。



c. 埋桶 (SK33)
埋桶の底板が遺存してい
る。



a. 第37次調査堀跡全景(北より)
堀は現在の道と平行する。



b. 堀土層断面(北より)
埋土の堆積状況から、廃城後土塁を切り崩して埋戻されたとみられる。



a. 井戸跡
井戸を壊して堀が堀削されている。



b. 井戸跡内部(東より)
井戸底より瓦、羽釜などが出土していた。



a. 第42次調査全景(東より)
堀状遺構の北側の壁は未検出。



b. 第42次調査全景(東より)



c. 堀状遺構西側
西側は緩やかな
立ち上がりとなる。



d. 堀状遺構南側
底面は平坦である。



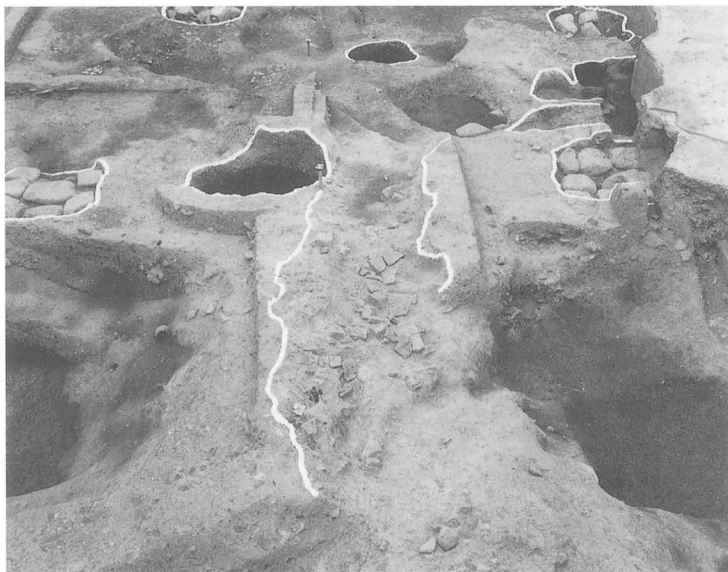
a. 第44次調査遠景(南より)
調査区西側の建物が浄土宗光明寺、東側の建物が市立美術館。



b. 第44次調査全景(南より)
酒蔵の礎石(根石)が等間隔で検出された。



a. 石列(東より)
この石列が酒蔵の北端にあたる。



b. 溝2(東より)
この溝は酒蔵より古く、
17世紀後半頃のものである。



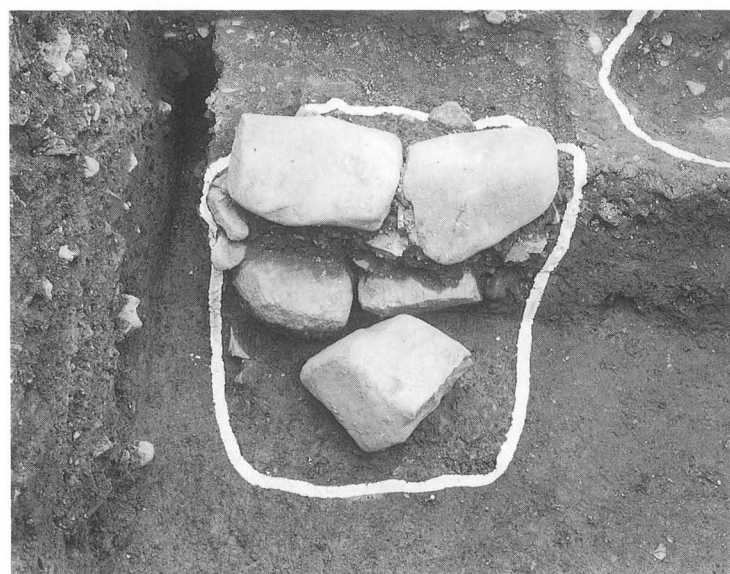
c. 竈1.2(北より)
竈2基が並んで築かれている。



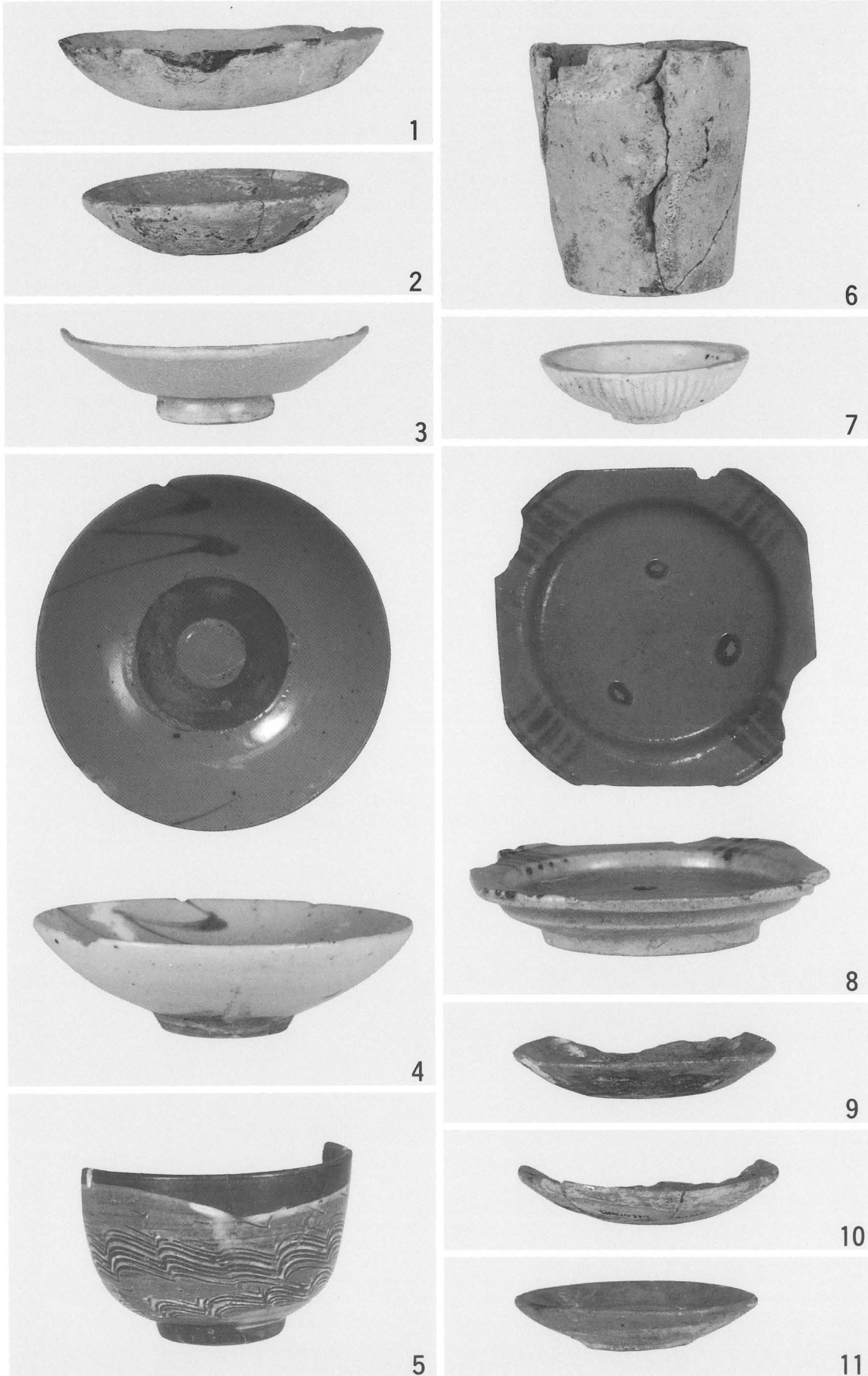
a. 瓦溜り1
酒蔵は瓦溜りの上に建てられたことが判る。



b. 礎石8
礎石の基礎(根石)は地盤の安定する地山面まで達している。



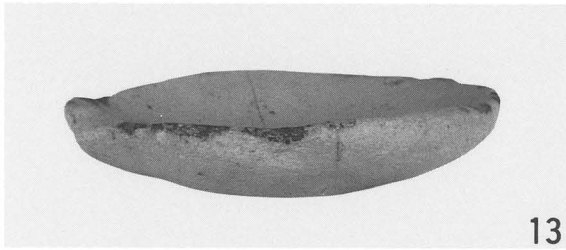
c. 礎石5
根石は何段にも積み重ねられている。



第34次調査出土遺物(1) 1・2 SK 3, 3 SK26, 4 SK32, 5 SK36, 6~8 SK38, 9~11 SK45



12



13



14



15



16



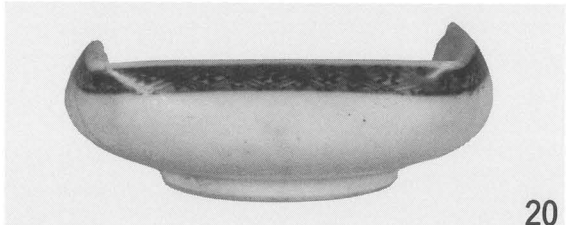
17



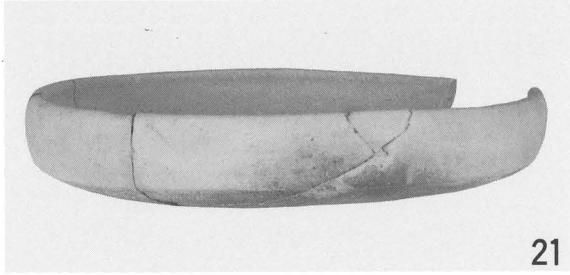
18



19



20



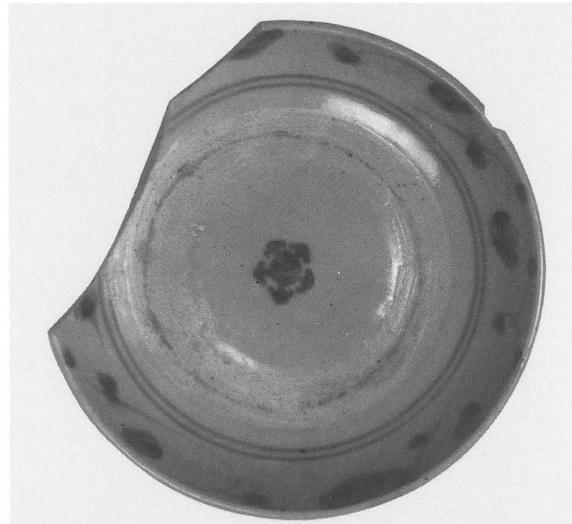
21



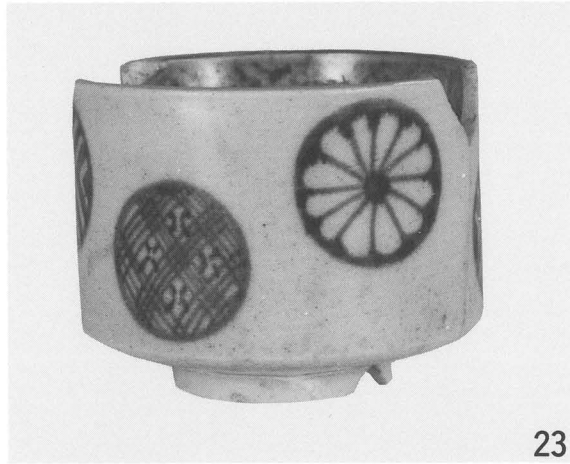
26



22



27



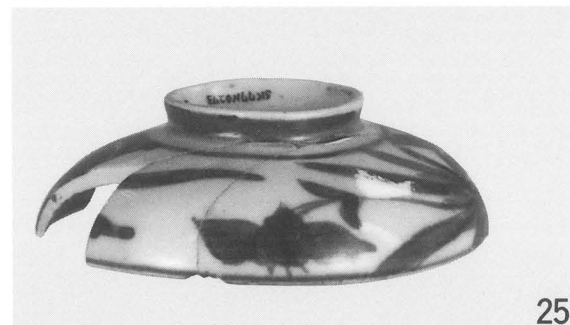
23



24



28



25



29



30

第34次調査出土遺物(3)

21 SK73, 23~25 SK77, 26 SK79, 27 SK82, 28 SK84
29・30 SK88



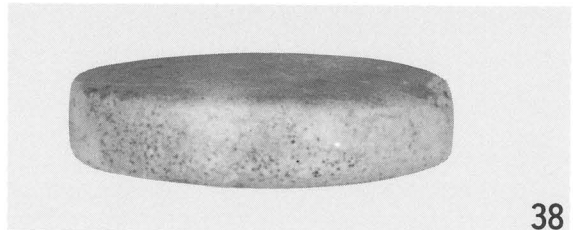
31



37



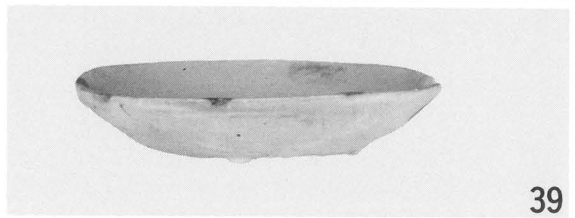
32



38



33



39



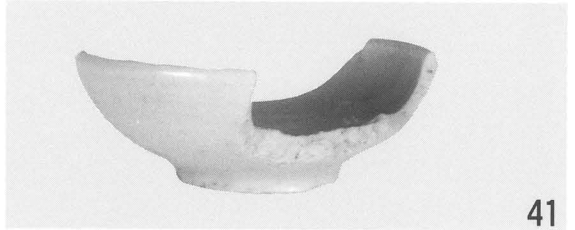
34



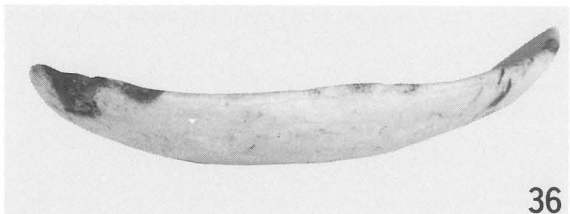
40



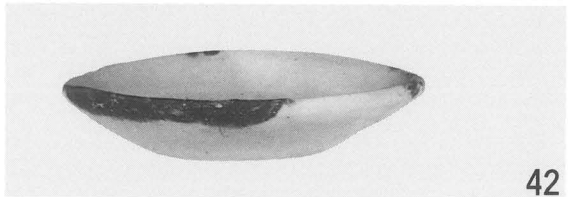
35



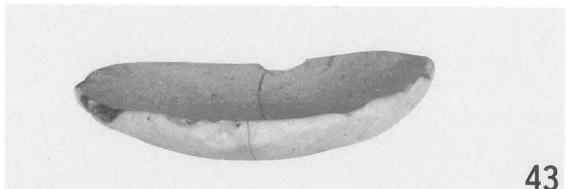
41



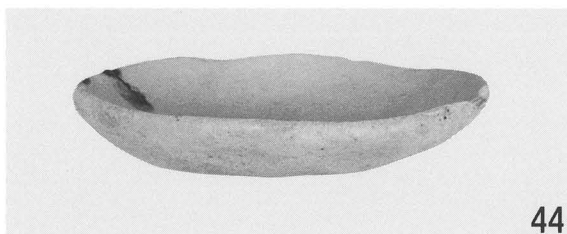
36



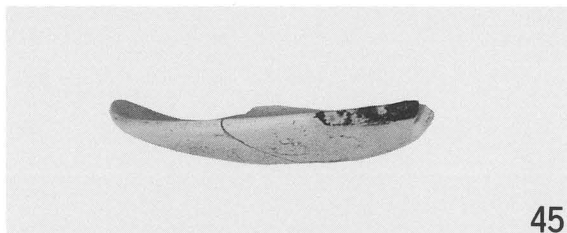
42



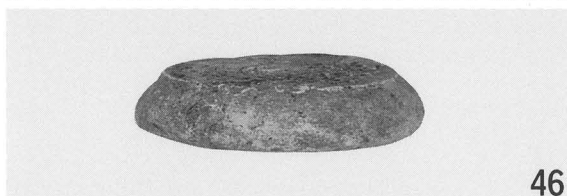
43



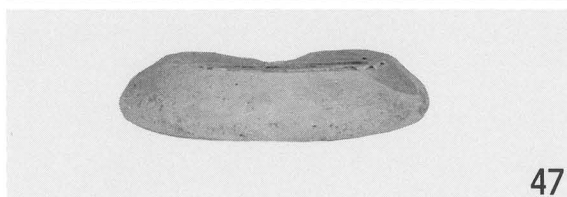
44



45



46



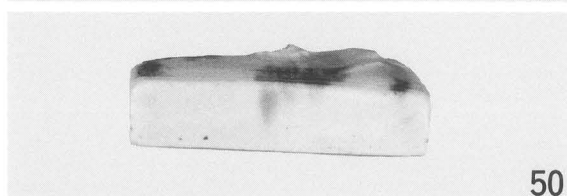
47



48



49



50



51



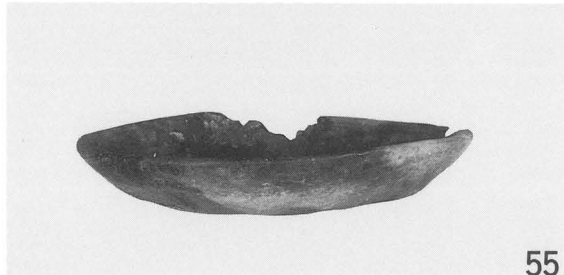
52



53



54



55



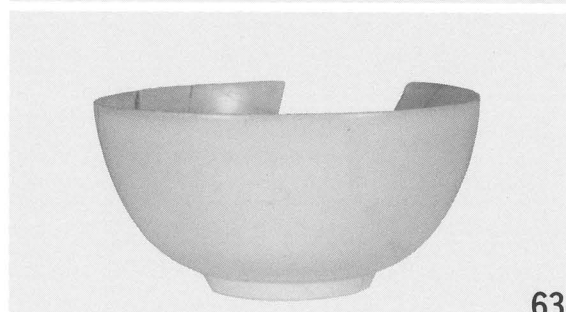
56



62



57



63



58



64



59



65



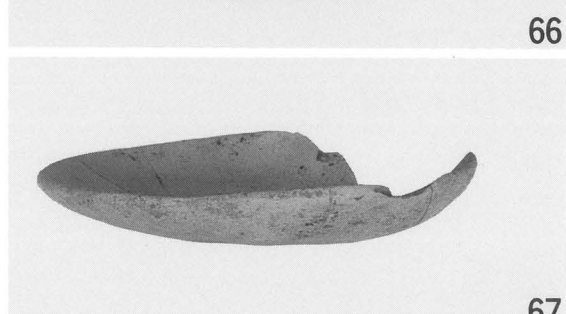
60



66



61



67



68



74



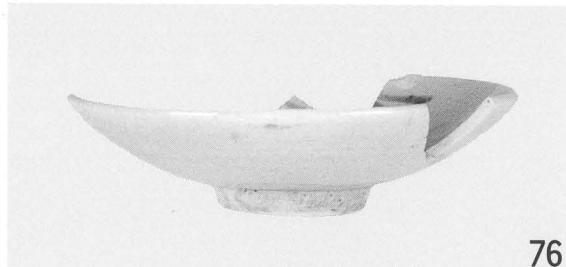
69



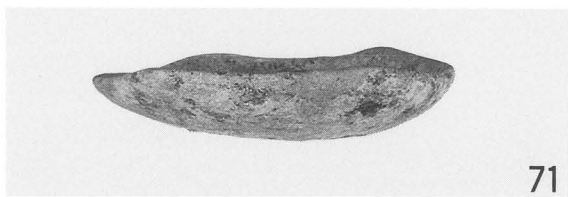
75



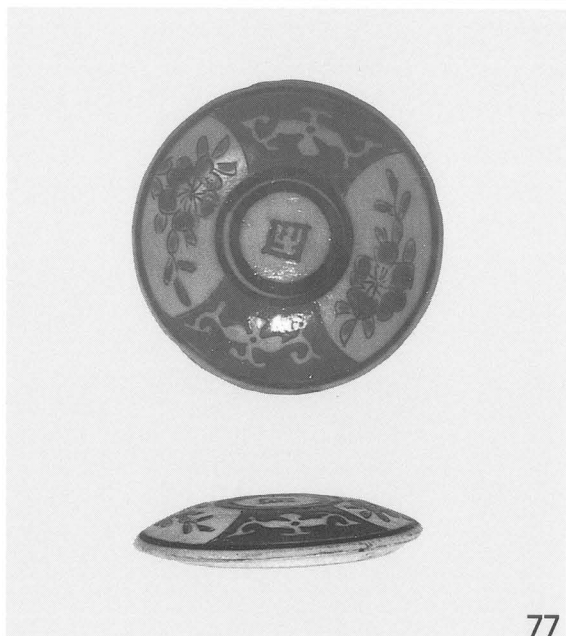
70



76



71



77



72



73



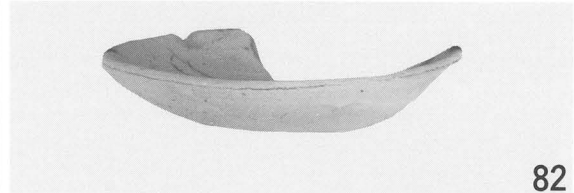
78

第34次調査出土遺物(7)

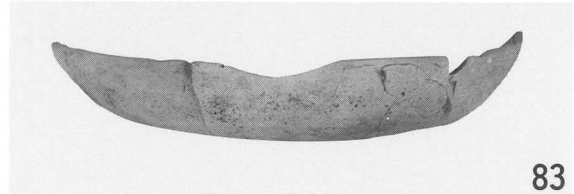
68 S K146, 69 S K158, 70 S K168, 71 S K164, 76 S K167, 77 S K171, 78 S K177



79



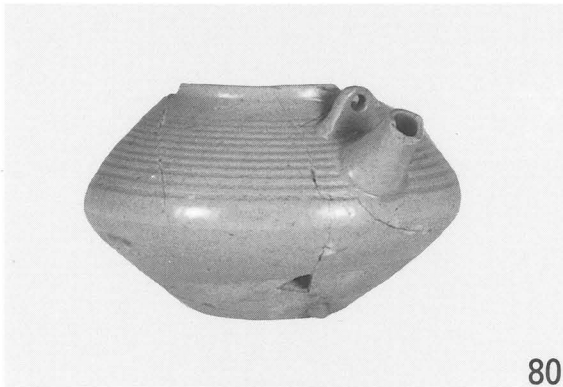
82



83



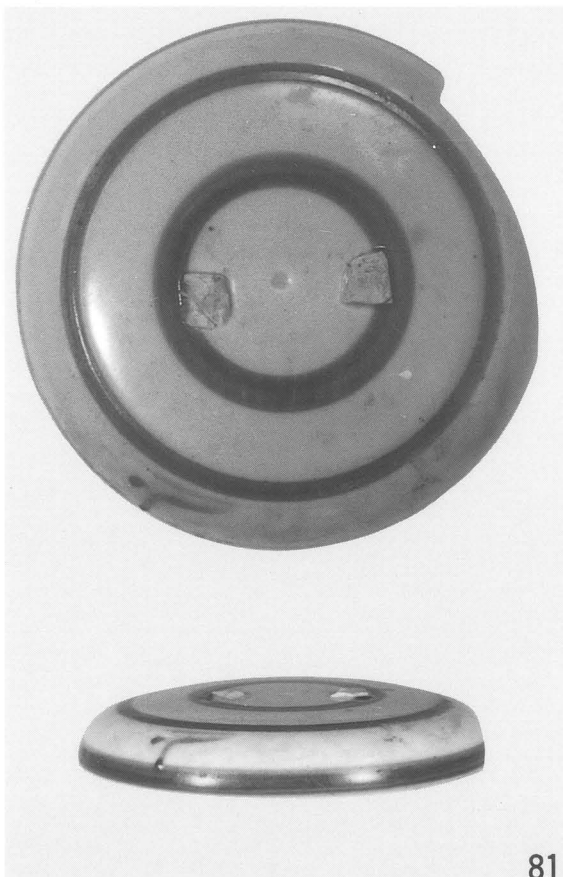
84



80



85



81



86



87

第34次調査出土遺物(8)

79 S K 180, 80 S K 182, 81・82 S K 183, 83 S K 185, 84 S K 205,
85・86 S K 214, 87 S K 235



88



93



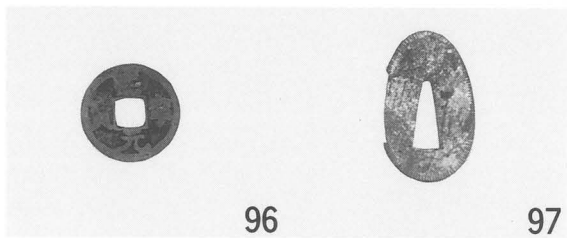
94



95



89



96

97



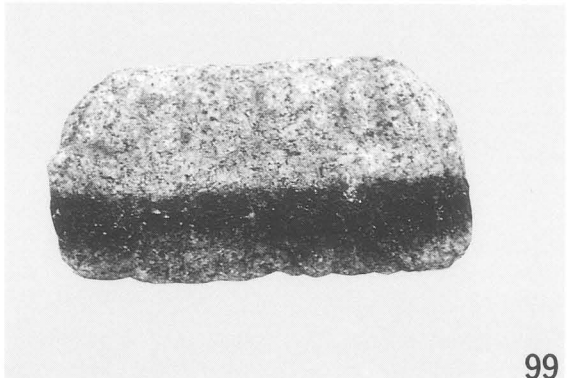
90



98



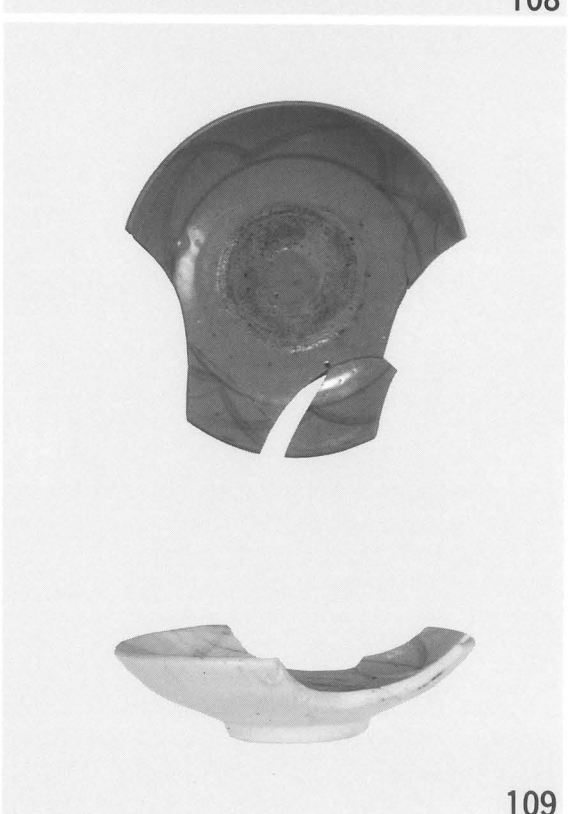
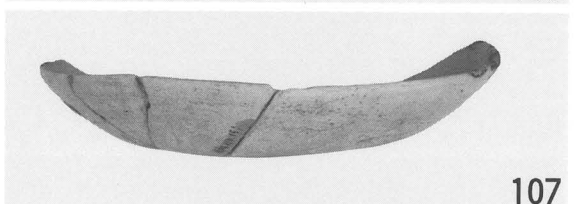
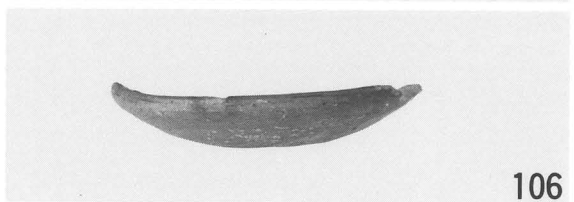
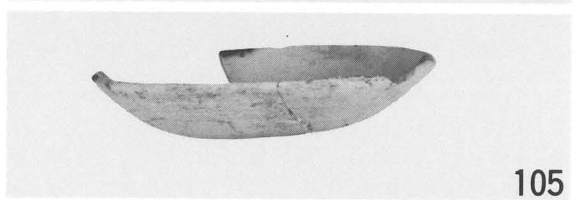
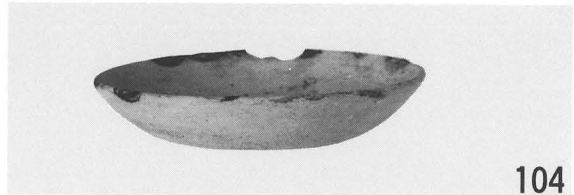
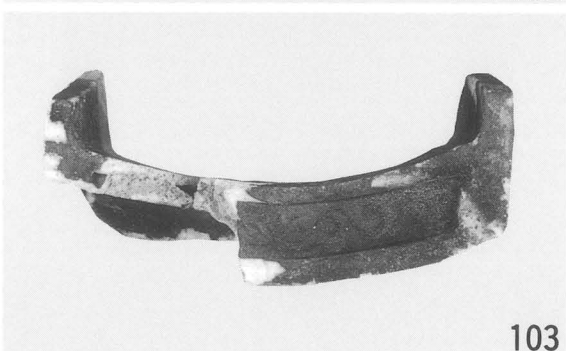
91



99

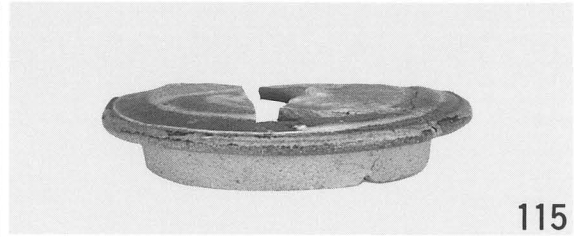


92

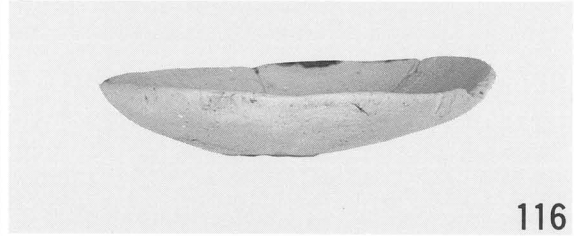




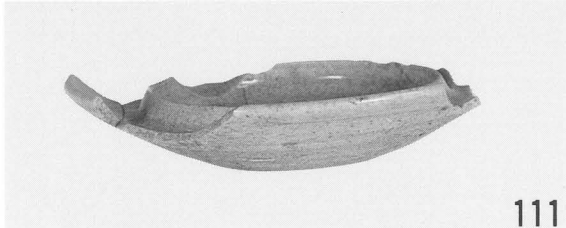
110



115



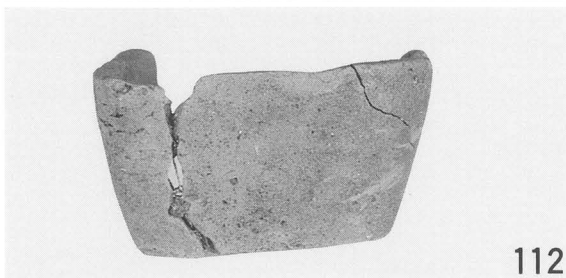
116



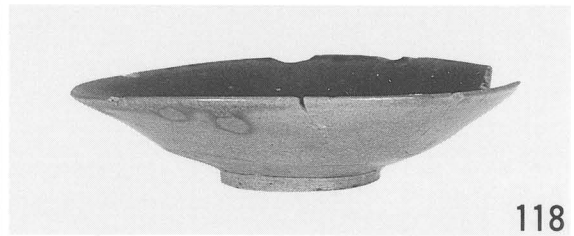
111



117



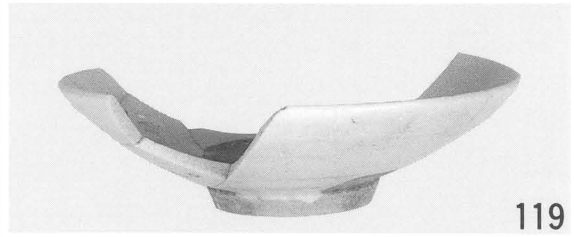
112



118



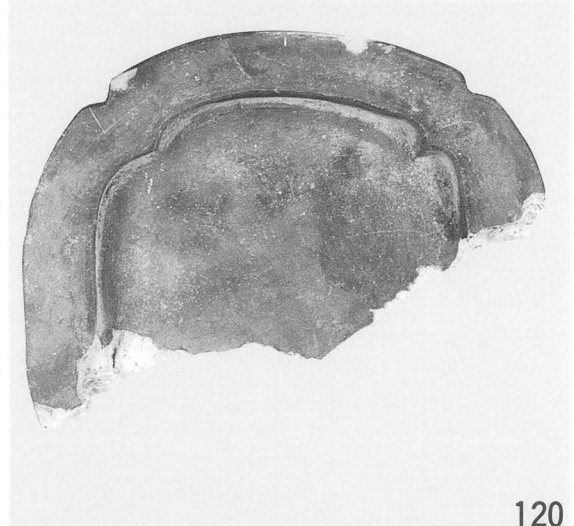
113



119

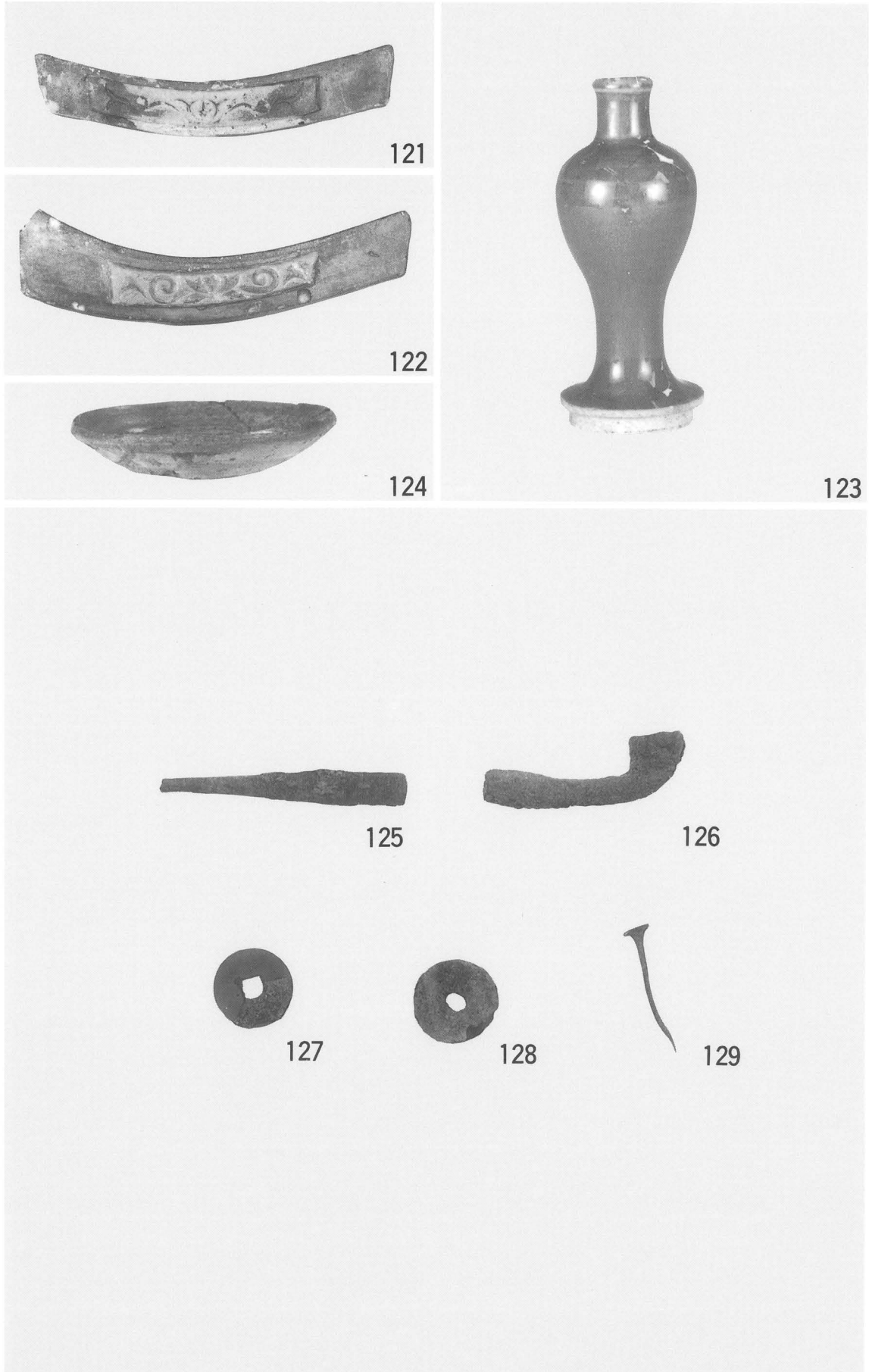


114

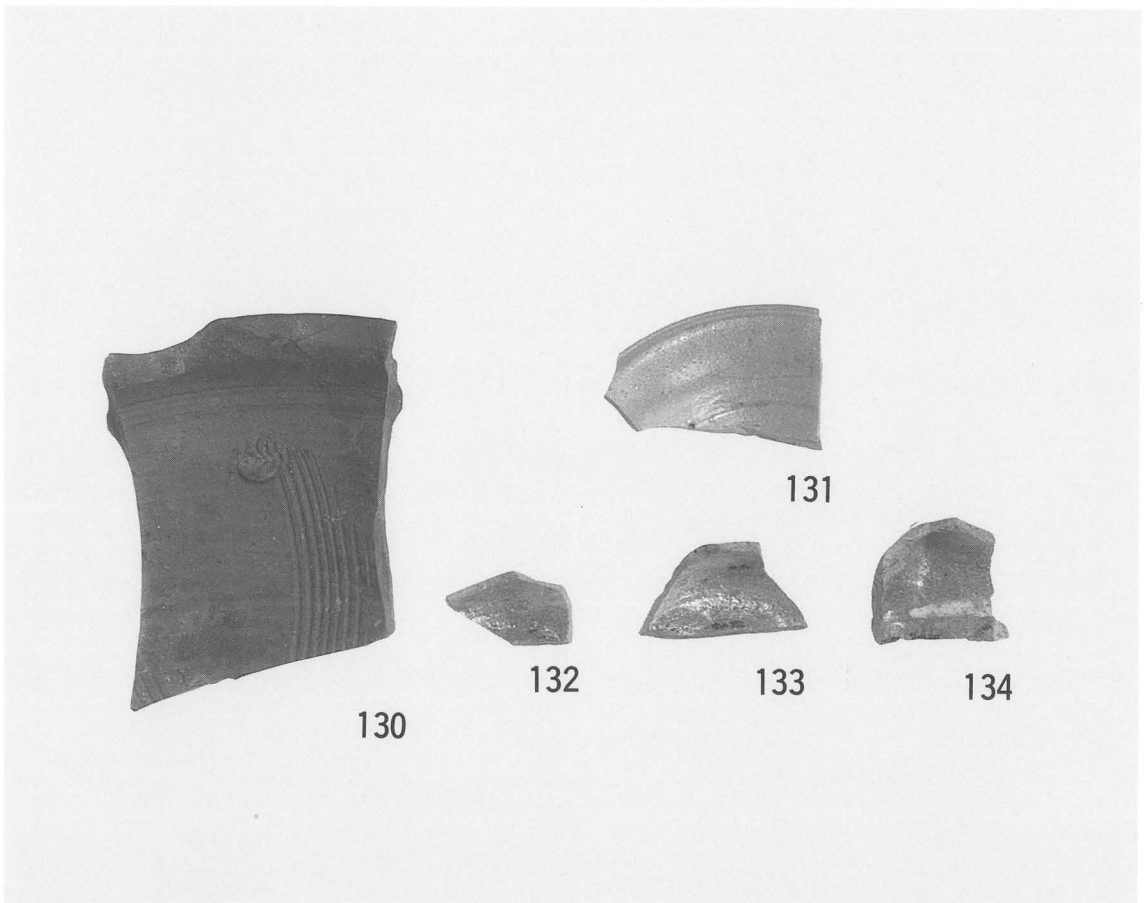
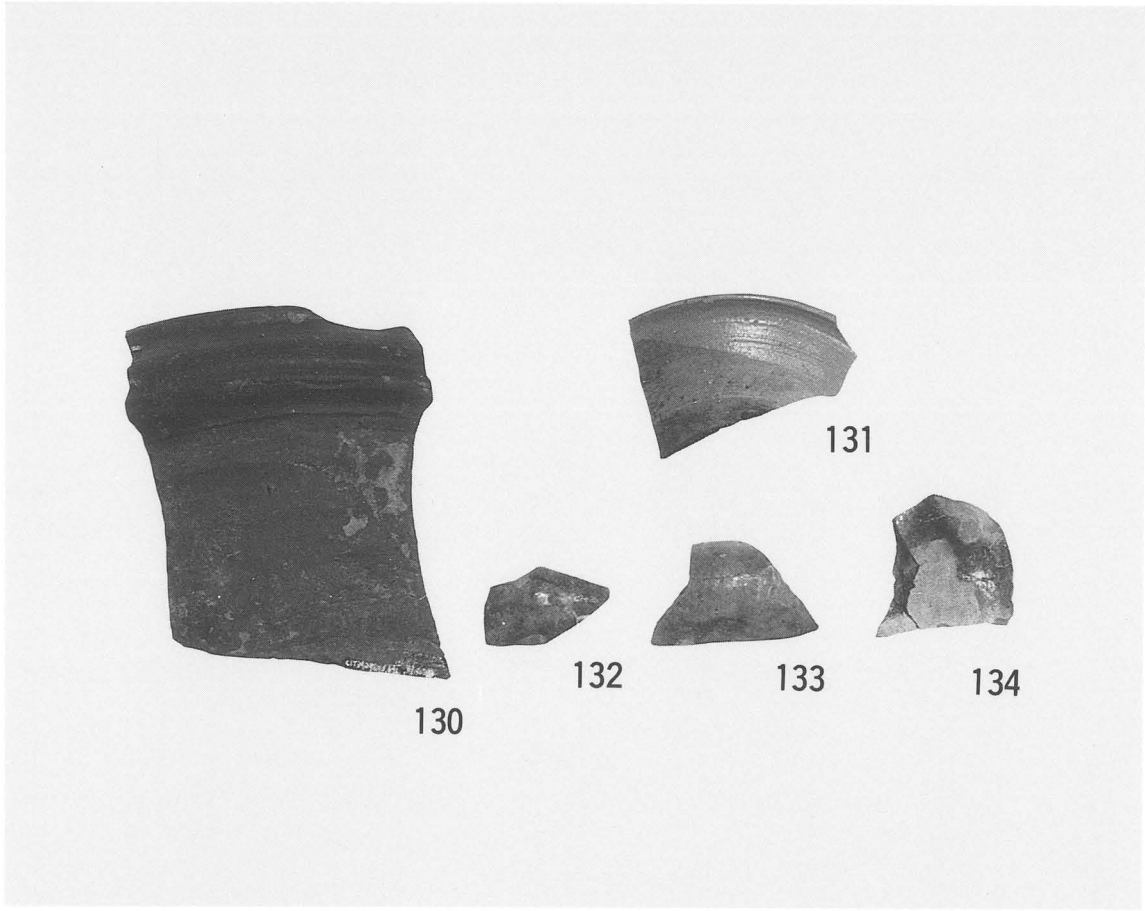


120

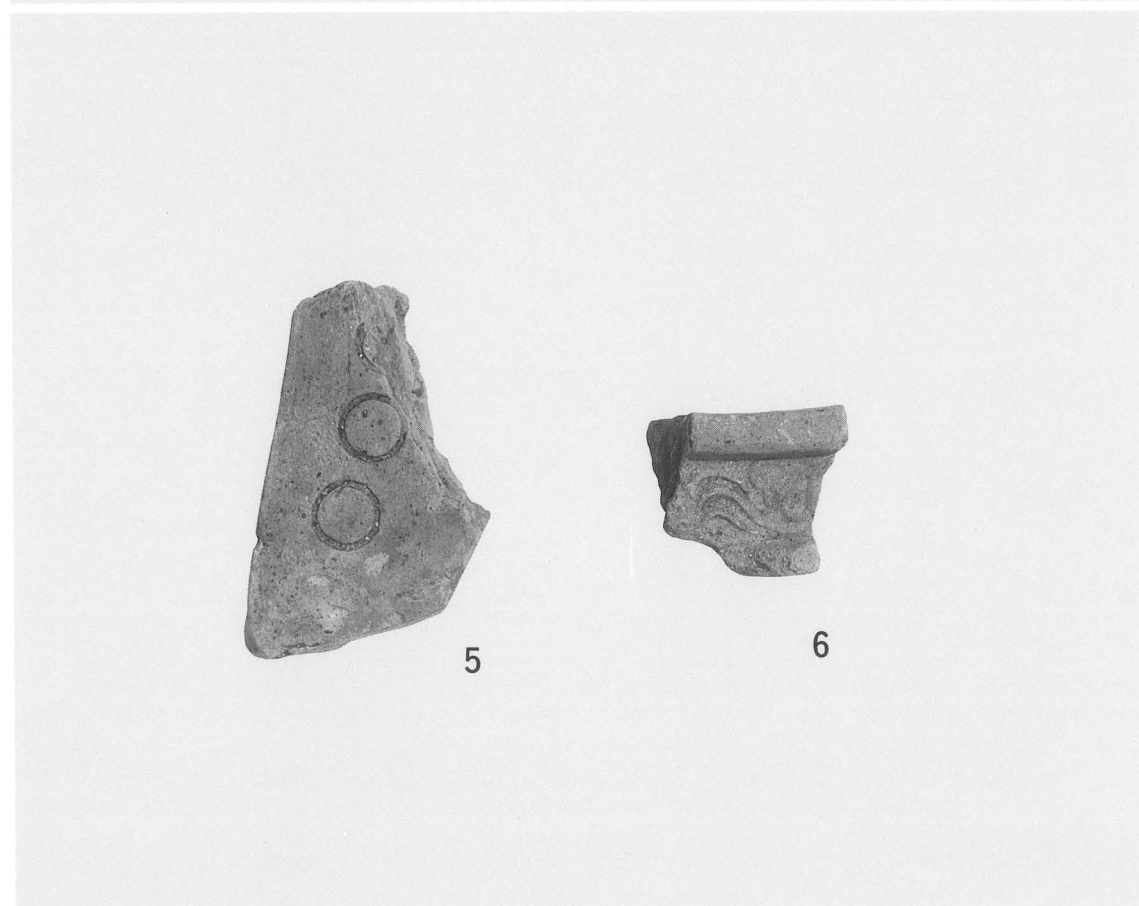
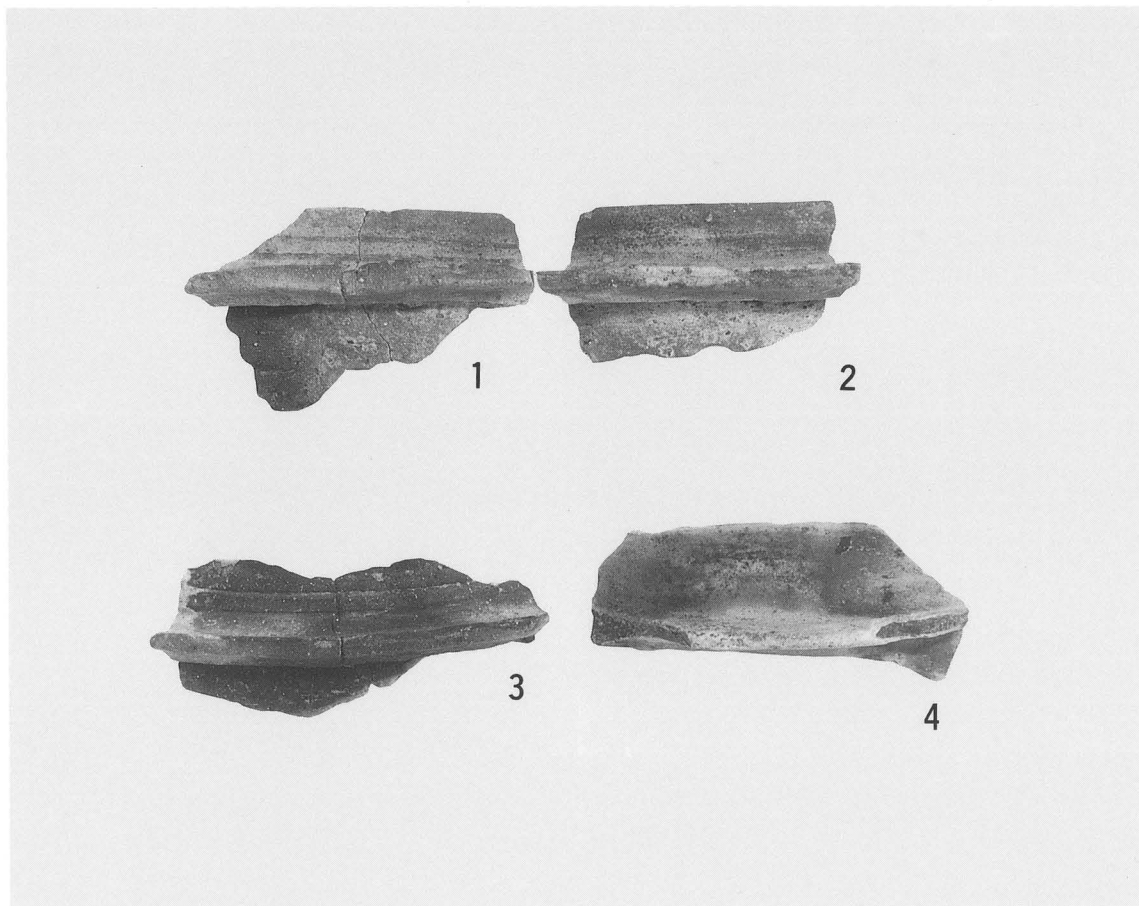
第34次調査出土遺物(11) 110 井戸, 111・112 井戸 5, 113~115 井戸 8, 116~120 井戸 9



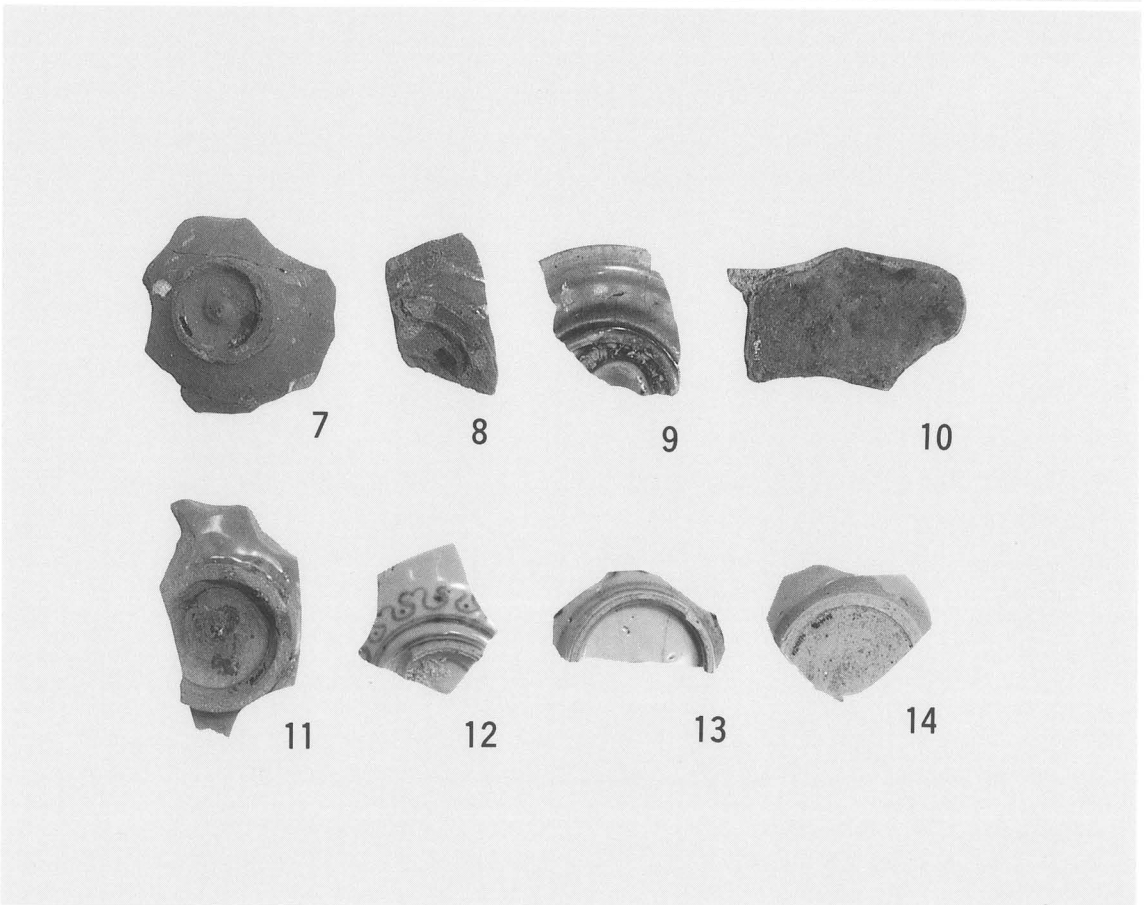
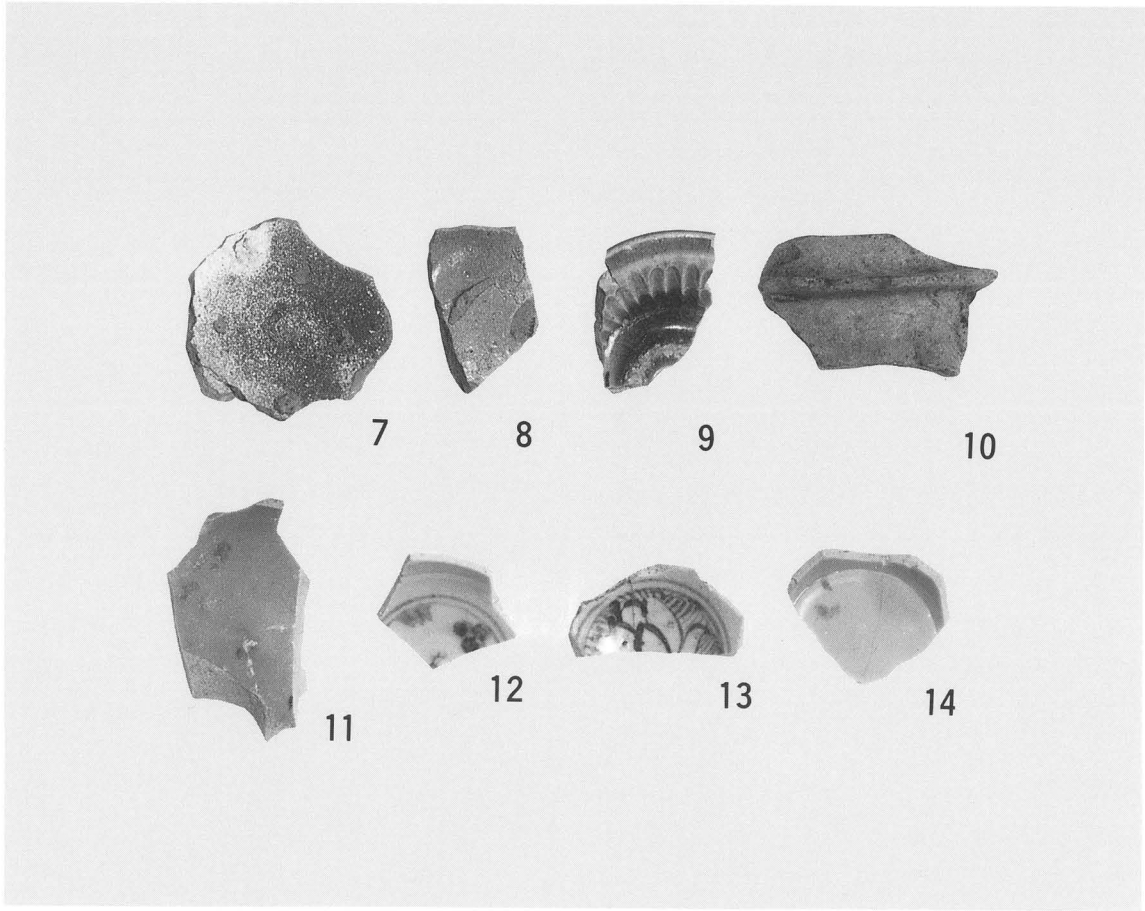
第34次調査出土遺物(12) 121・122 井戸11, 123 重機荒堀, 124 地山直上, 125~129 SK-13



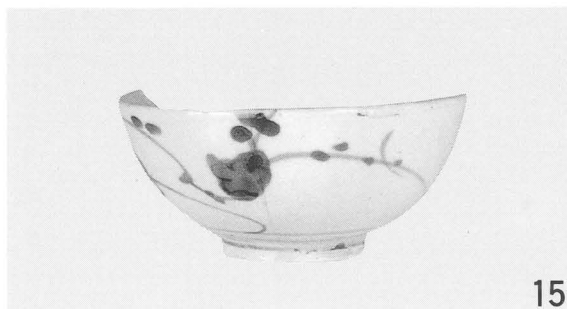
第34次調査出土遺物(13) 130~134 井戸 3



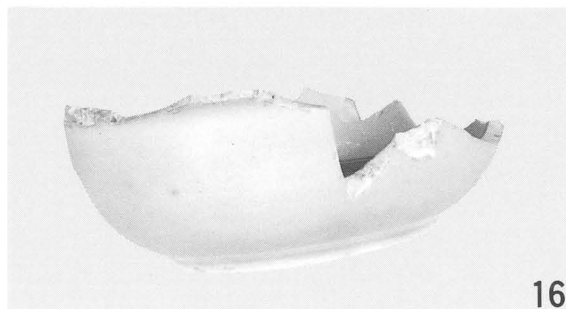
第37次調査出土遺物(1) 1~6 井戸



第37次調査出土遺物(2) 7・8 第1層, 9~14 堀



15



16

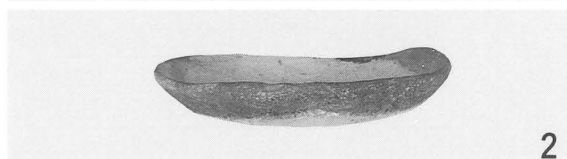
第37次調査出土遺物(3) 15・16 第1層



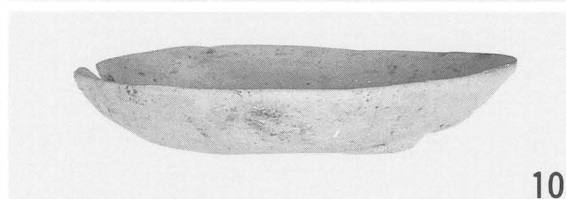
1



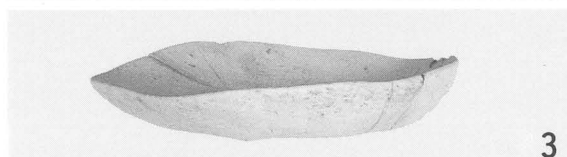
9



2



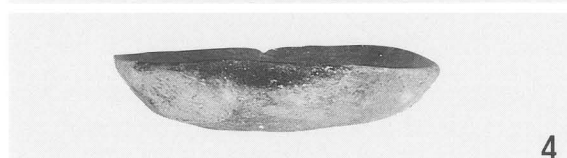
10



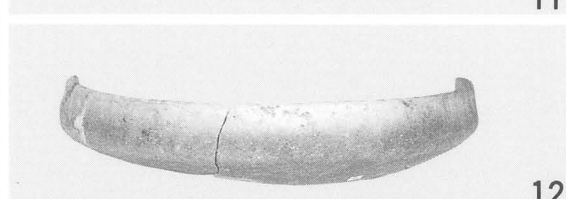
3



11



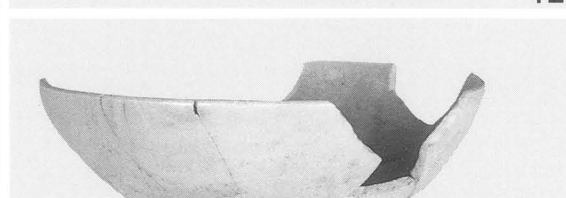
4



12



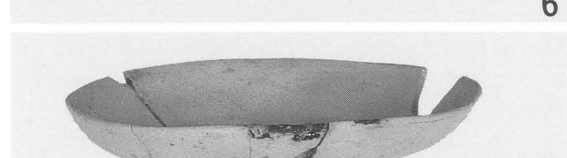
5



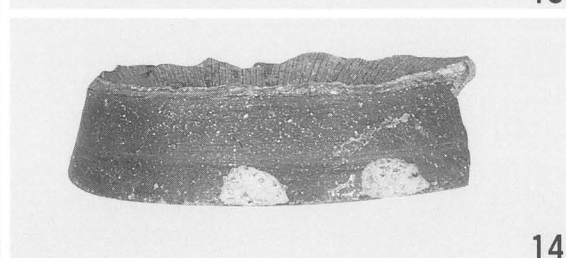
13



6



7

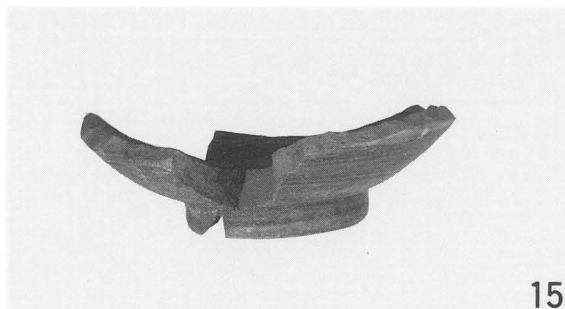


14



8

第42次調査出土遺物(1) 1~11・13 上層, 12・14 下層



15



20



16



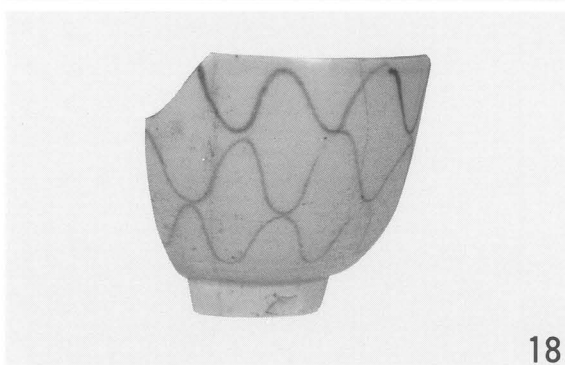
21



17



22



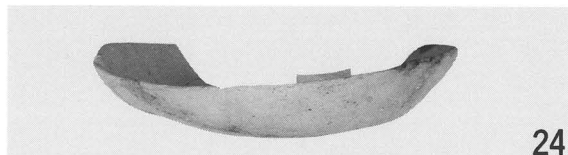
18



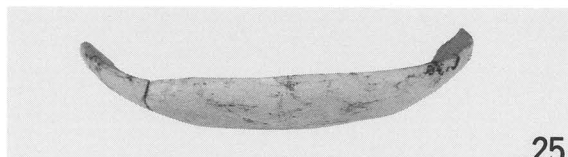
23



19



24



25



26



27



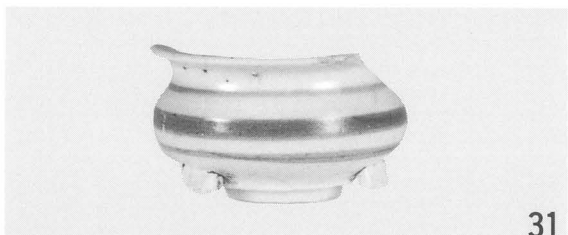
28



29



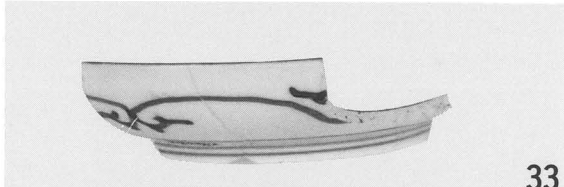
30



31



32



33



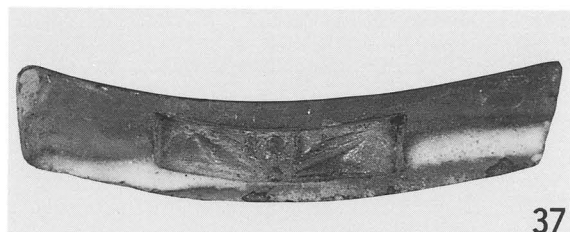
34



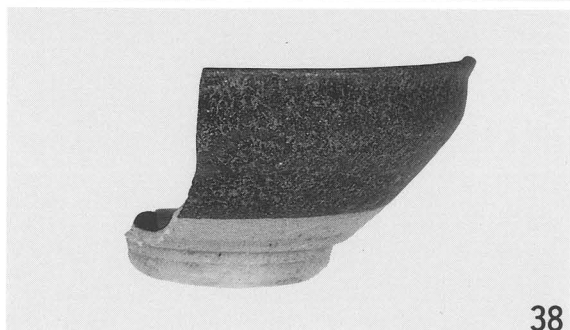
35



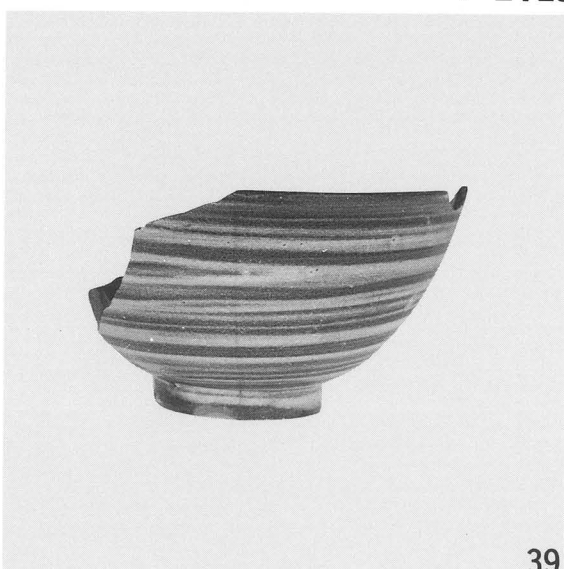
36



37

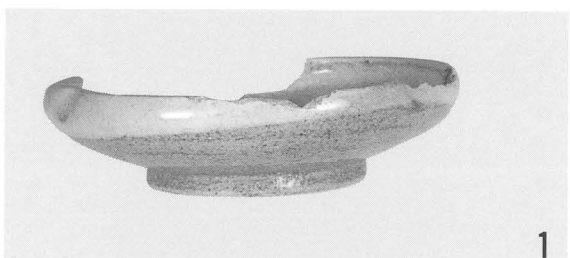


38



39

第42次調査出土遺物(4) 37 排土内, 38・39 東西道跡下



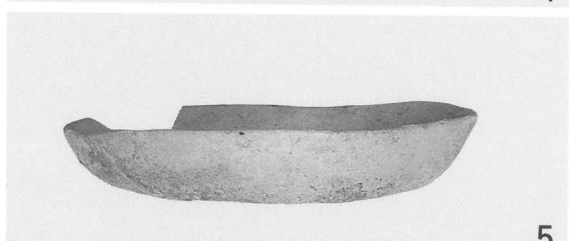
1



4



2



5



3

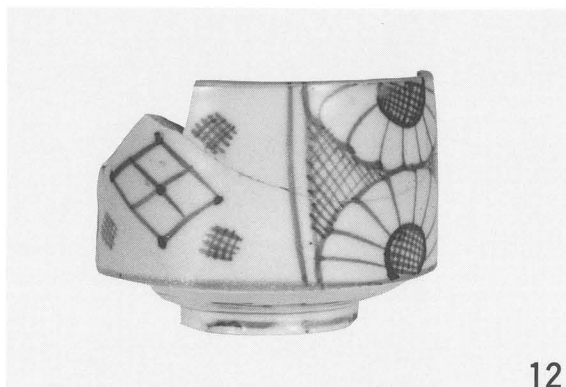


6

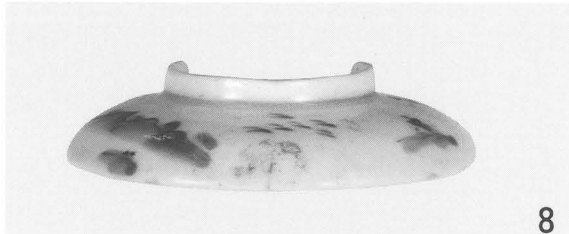
第44次調査出土遺物(1) 1・2 SK 1, 3 SK 2, 4 SK 4, 5・6 SK 6



7



12



8



13



9



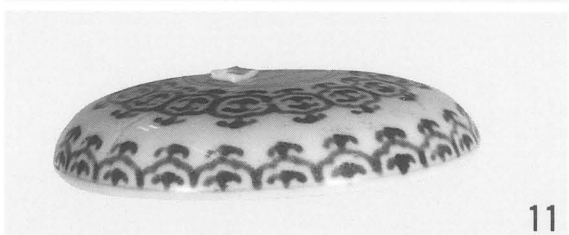
14



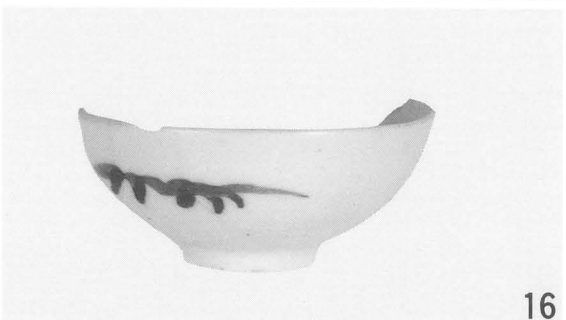
10



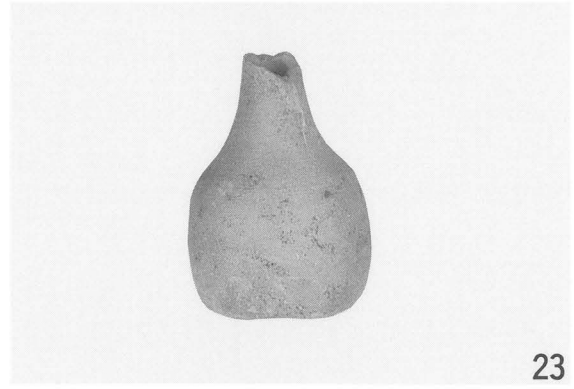
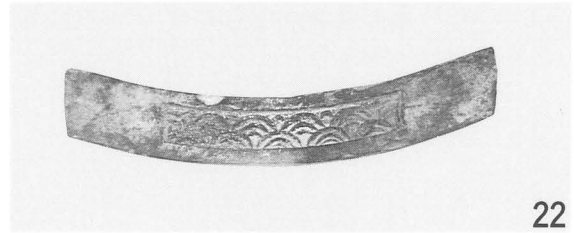
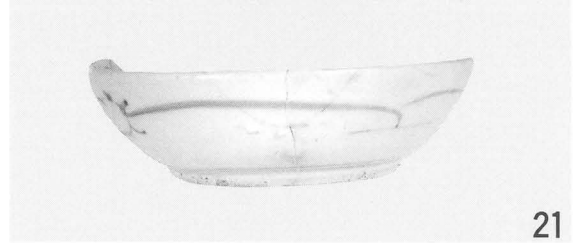
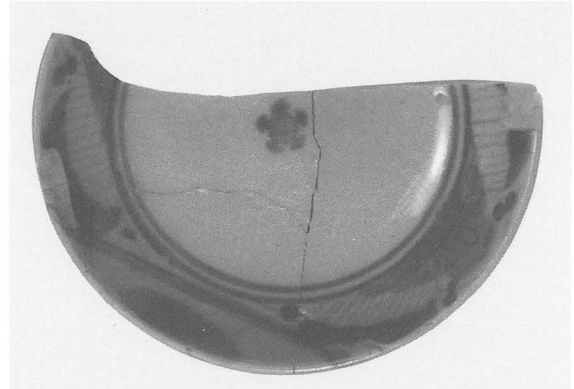
15



11



16



第44次調査出土遺物(3) 17~22 SK11, 23 SK16, 24 SK18



25



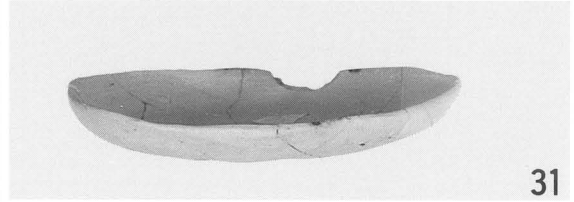
29



26



30



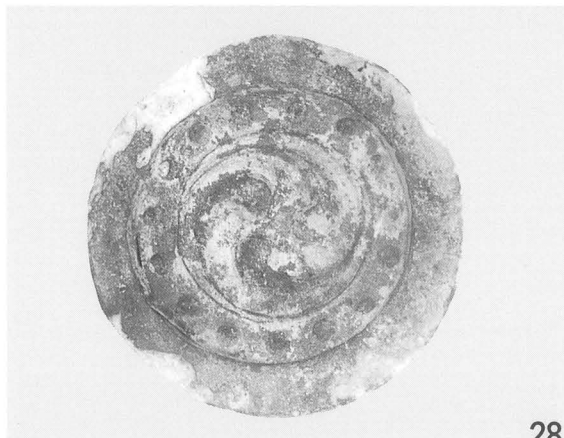
31



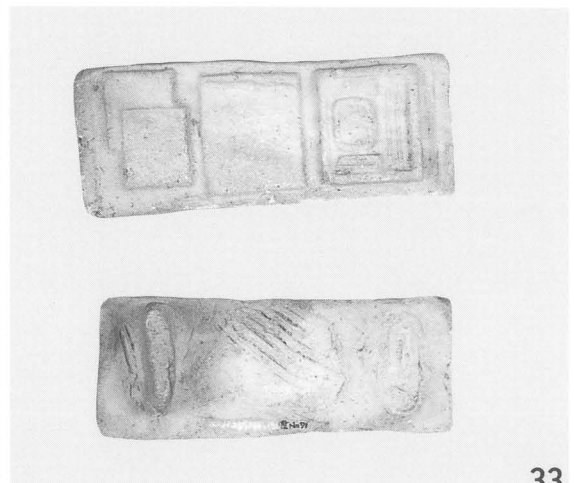
27



32



28



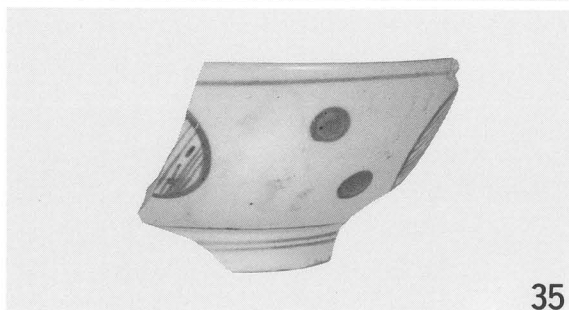
33



34



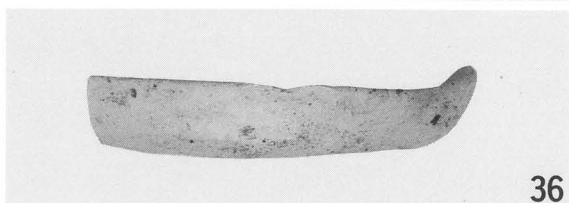
41



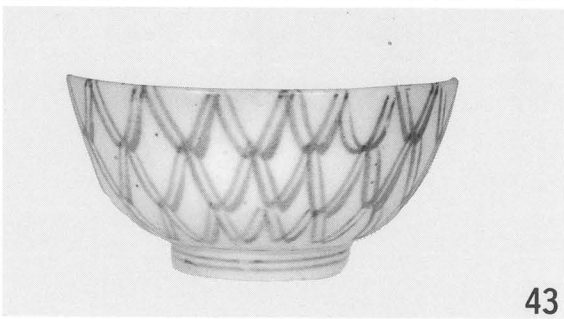
35



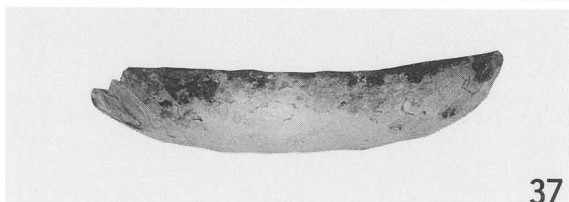
42



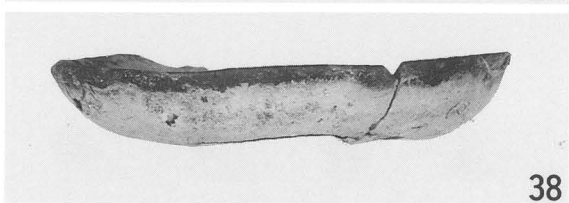
36



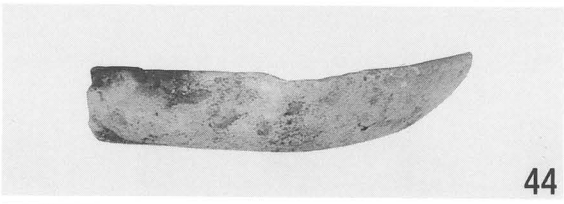
43



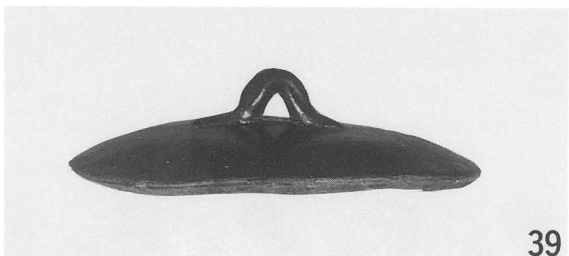
37



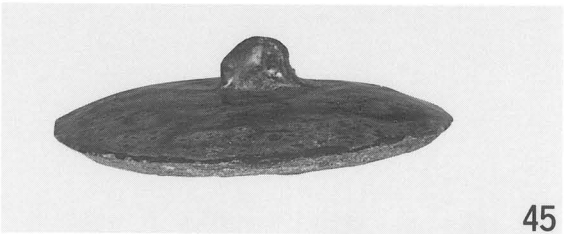
38



44



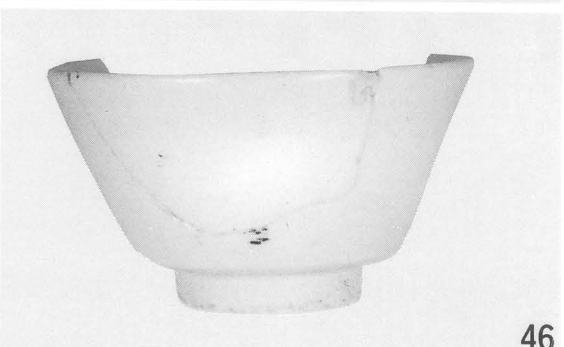
39



45



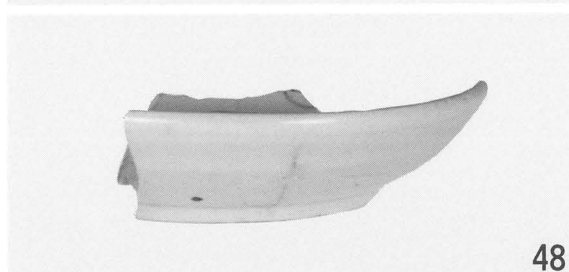
40



46



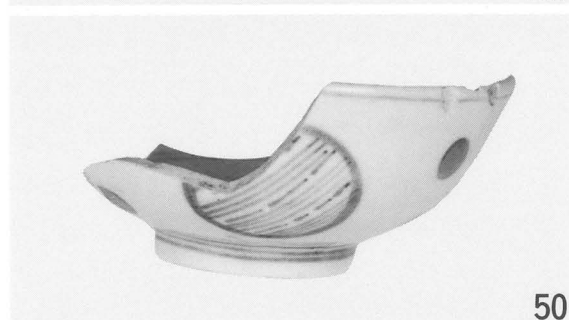
47



48



49



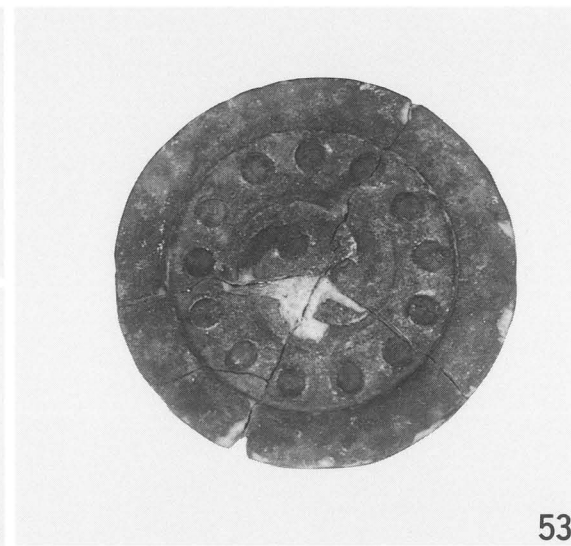
50



51



52



53



54



55

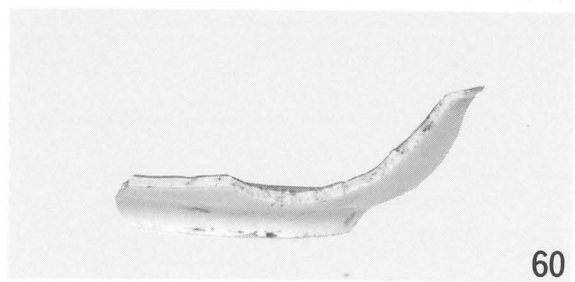


56

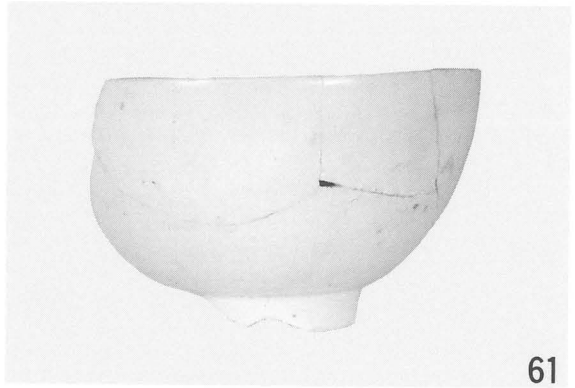
第44次調査出土遺物(6) 47~50 井戸4, 51・52 溝1, 53 溝3, 54~56 瓦溜り



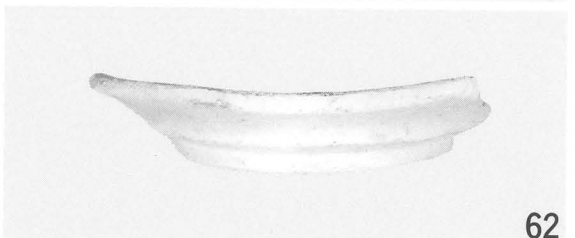
57



60



61



62



58



63



59



64



65



68



66



69



67



70



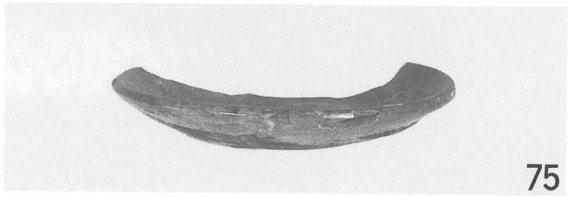
71



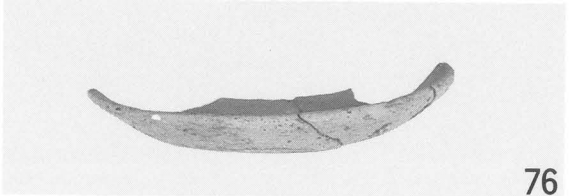
74



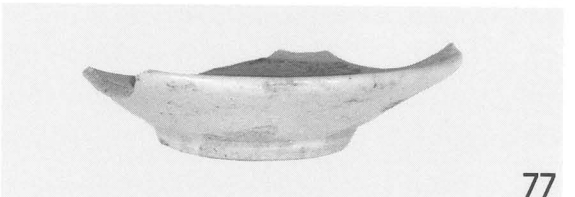
72



75



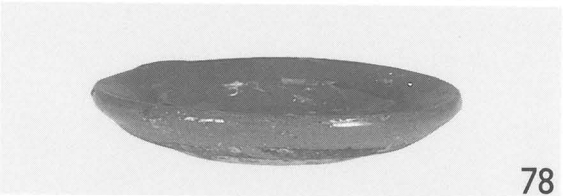
76



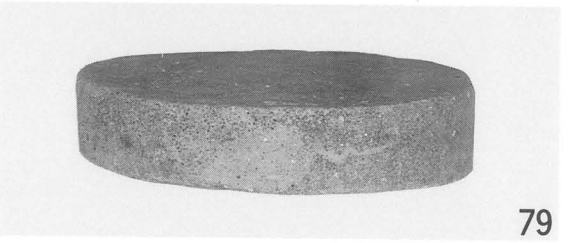
77



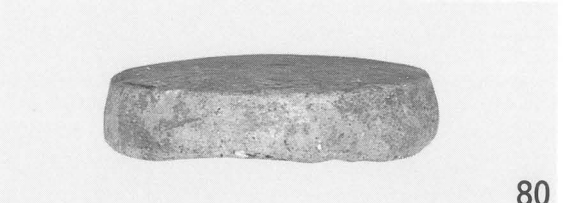
73



78



79

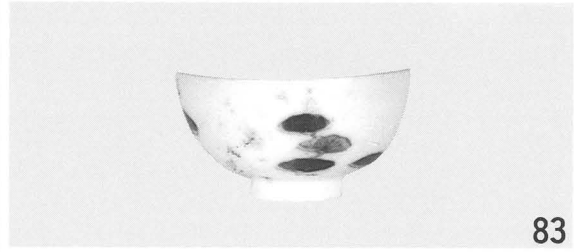


80

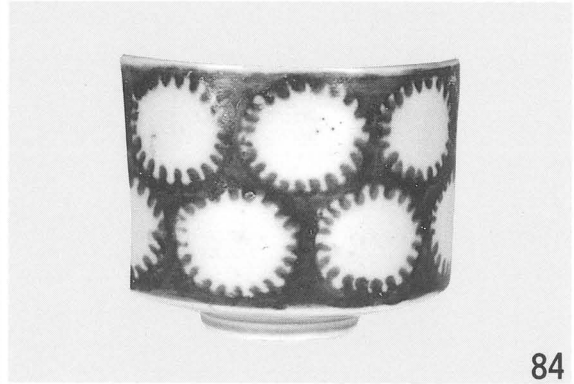
第44次調査出土遺物(9) 71~73 瓦溜り3, 74 瓦溜り4, 75~80 遺構外



81



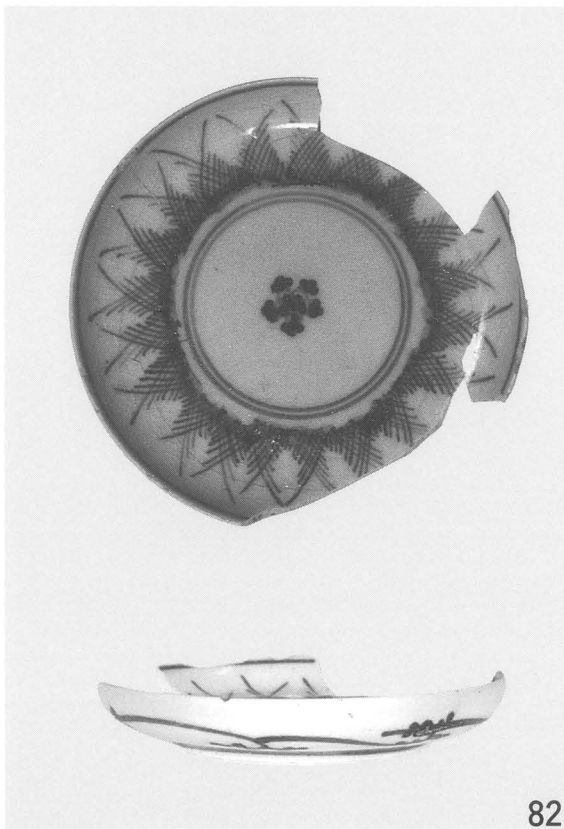
83



84



85



82



86



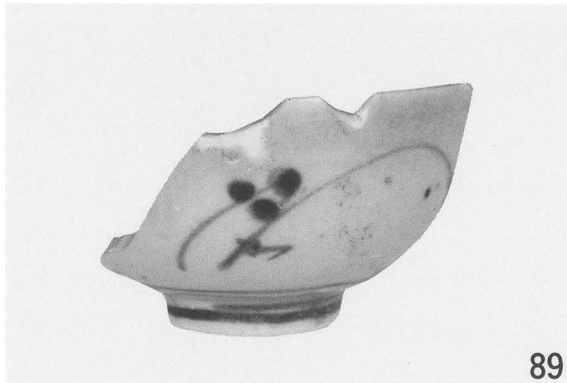
87



88



93



89



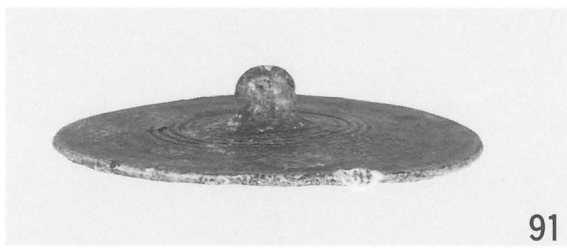
94



90



95



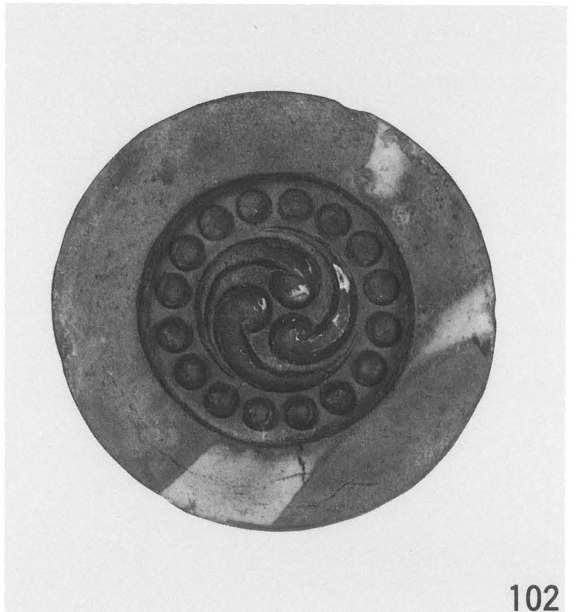
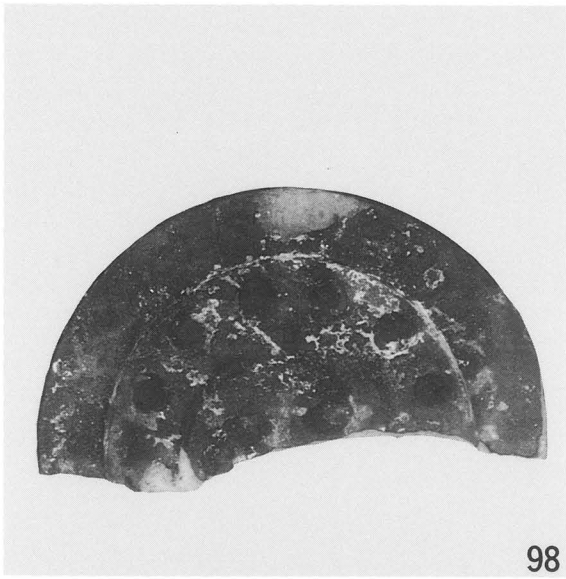
91



96



92





103



104

第44次調査出土遺物(13) 103・104遺構外

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第16集
兵庫県伊丹市
有岡城跡発掘調査報告書Ⅷ

発行年月日 1992年3月31日
発 行 伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目
T E L 0 7 2 7 - 8 3 - 1 2 3 4

印 刷 関西成光株式会社
T E L 0 6 - 4 6 2 - 7 5 0 1

